奥義抄

藤原清輔

奥義鈔序

歌はあめのむかしよりおこりて、あらがねの今につたはれり。くにのわざのはじめなるがゆゑに和をさきとし、ことをながむるがゆゑに歌を名とす。五帝本紀注云、歌は長く言、ながむるとよむなり。詩はもろこしのつたへ、は詠也、詠をばながむるとよむなり。これをやまと歌といふ。歌は我くにのことばなり。きゝはおなじからねど、おもむきはひとつなるべし。短歌は賦なり。長歌は五七言詩、旋頭歌は江南曲、混本歌は越調詩、連歌は聯句也。剰文又かよひてあり。およそなずらふるところ異なる事なし。歌のまち〳〵のすがたはじめよりあるにあらず。ちはやぶる神代には句をとゝのへ、名をわかつ事なし。たゞ思にしたがひ、こゝろざしにまかせてのべき。出雲の八雲の詞より、やまと歌みそぎひともじにさだまる。しかはあれどことつくしがたき時はながく、ことばたらぬ折は短くいへることあり。これよりさま〴〵のすがた心々の名おのづからいできたるをや。今の人歌はあだなるもてあそび、はかなきことゝ思へり。いにしへを見ればしかにはあらず。佛もひかりをやはらげて、この事をのたまふ。文殊飢人になりて聖徳太子に奉御歌

いかるがやとみのをがはのたえばこそ我おほきみの御名をわすれめ

神もかたちをあらはしてこれにはこたへ給ふ。平城のみかど住吉に幸し給ふときの御歌

我みても久しくなりぬすみよしのきしの姫松いくよ経ぬらむ

神あらはれてのたまはく、

むつまじと君はしらずや瑞籬のひさしき世よりいはひそめてき

あまつ人もこれによせて志をのぶ。淨御原天皇吉野河に幸して琴をひき給ふ時、神女あまくだりて舞ふ歌に云、

乙女子がをとめさびすもからたまをとめさびすもそのからたまを

其曲五かへり、是を五節といふ。かの時よりはじまりて今におこなはるゝ事也。すべらぎのきみもこれにてみことのりをくだしき。天平感寶元年陸奥國に出レ金時詔書、反歌、大伴家持作

すめろぎのみよさかえむとあづまなるみちのく山にこがね花さく

おほきなるねがひなもいのる。傳教大師中堂建立の時の歌

阿耨多羅三藐三菩提の佛たちわがたつそまに冥加あらせ給へ

ねんごろなるのぞみをもとほす。延喜の御時躬恒が臧人して奏する歌

いづくとも春のひかりはわかなくにまだみよしのゝ山は雪ふる

おほやけのかしこまりをもなだむ。靜範配流之時兼房朝臣のよみてめしかへさるゝ歌

さ月やみこぞのもりのほとゝぎす人しれずのみなきわたるかな

わたくしのいかりをもなだむ。大陽寺櫻島忠信郡司の翁をめしかへさるゝ時によみてゆるさるゝ歌

老はてゝゆきの山をばいたゞけどしもとみるにぞ身はひえにける

かしこきひじりとてもすてず。空也聖人の歌

ひとたびも南無阿彌陀佛といふ人のはちすの上にのぼらぬはなし

たけきものゝふもしれり。平貞盛がめとられて、陣にありと聞きて將門きぬをおくるときの歌

よそにてもかぜのたよりに我ぞとふえだはなれたる花のやどりは

たのしびさかえの所、なげきかなしびの時にも必ず出て、いはんや男女の心をやはらぐるなかだち、これよりよろし

きことはなし。（これらの歌は常のことなればしるさず。）此うた人の心のはかなくなるにまかせて、ときにしたがひておとろへゆく。今の歌をいにしへにならぶるに、火水よりもことなるべし。古今序に云、浮詞雲のごとくにおこり、艶流は泉のごとくにわく。そのみ皆おちてその花ひとりさかゆ。これをみるごとに今をかなしまずといふことなし。抑歌のふみ式は、光仁の御代に参議藤原の朝臣濱成みことのりをうけたまはりて作れる歌式、若は石見女髄腦などいひて、家々の教まゝ傳はれり。集はおほやけには奈良の御時の萬葉集をさきとして、拾遺及び金葉集にいたるまで世々にえらび給へり。私には山上憶良類聚歌林より新撰萬葉集（天神御撰俗號二樹下集一法眼源賢撰）といふまでに思ひ〳〵のしわざしげく聞ゆ。此外の家集、柿本山邊氏をはじめて海手古良（師氏大納言集）豐蔭（一條攝政集）盧主（増基集）らに及ぶまで、いくそばくぞ。これらのたぐひ濱のまさご數しらず、そらなる星のごとくに多けれども、をかしきほどをとゞむるばかりにて、かたきをあらはせることなし。中にも式のおもむきかすかにして、今の世に叶ひがたし。然るをおのづからさとり、わづかに見たる所をだにうもれ木いたづらにくちむやはとて、野べの草かきあつむるは賢き人のためにはあらず、愚なるたぐひにそなへむとなり。わかちて三巻なづけて奥義抄と云ふ。たゞしきたまをみがくほまれなくて、くひぜをまもるあざけりあらむことをしらで、はかりおもふべしといへり。

奥義鈔上式

前和歌得業生柿下躬貫撰

一、六義　二、六體　三、三種體　四、八品　五、疊句
六、連句　七、隱題　八、誹諧　九、譬喩　十、相聞歌、挽歌
十一、戲咲　十二、無心所着　十三、廻文　十四、四病　十五、七病
十六、八病　十七、避病事　十八、詞病事　十九、秀歌體　二十、九品
二十一、十體　二十二、盜古歌　二十三、物異名付十二月名　二十四、古歌詞　二十五、所名

一　和歌六義

一風　二賦　三比　四興　五雅　六頌

一曰風、古今にはそへ歌とあり。歌云、

難波津にさくやこの花冬ごもり今は春べとさくやこの花

毛詩云、上は以風化下、下以風刺上（注云、風化風刺皆謂譬喩不付言也。今案に、同書云、風は諷也。そふとよむなり。そふと云は題をあらはにいはずして、義をさとらする也。故に風をそへ歌と云ふ。此歌は大鷦鷯天皇おとゝの親王とたがひに位をゆづりて三年まで位につきたまはぬをいぶかり思ふに、つひに正月に位につき給へる時に、新羅の王仁が奉る歌也。梅の花にみかどをそへたてまつれり。この花とは梅の花なり。高津の宮にて位につきたまへれば、難波津にさくやこの花とよめり。或書云、梅紫木前花發故號二木花一云々。

二曰賦　古今にはかずへ歌とあり。歌云、

さく花におもひつくみのあぢきなさみにいたづきのいるも知らずて

正義云、賦之言、鋪、直鋪二陳今之政教善惡一。今案に、賦は鋪也。しくはことをつくすなり。題の心をつくして直ちにいふなり。又ものをかずふるはつくす義也。故に賦をかずへ歌といふ。

三曰比、古今にはなずらへ歌とあり。歌云、

君にけさあしたの霜のおきていなばこひしきごとにきえやわたらむ

正義云、見レ今先不二敢付言一。取二比類一以言レ之。今案に、比はなずらふるなり。物に似する也。故に比をなずらへ歌といふ。

四曰興、古今にはたとへうたとあり。歌云、

わが戀はよむともつきじありそ海のはまのまさごはよみつくすとも

正義云、見二今之美一雖二於娼謀一取二善事一以喩二勸之一。今案に、興をば毛詩にたとへとよめり。たとへと云は、かれをもてこれになぞらふるなり。故に興をたとへ歌といふ。

五曰雅、古今にはたゞこと歌とあり。歌云、

いつはりのなき世なりせばいかばかり人のことのはうれしからまし

毛詩云、言二天下之事一顯二四方之風一謂二之雅一。雅者正也。政有二小大一。故有二小雅一焉、有二大雅一焉。今案に、雅はまさしき也。たゞしき也。まさしくたゞしきは、ありのまゝなる也。物にもそへず、たとへをもとらぬ也。故に雅をたゞこと歌といふ。

六曰頌、古今にはいはひ歌とあり。歌云、

このとのはむべもとみけりさきくさのみつばよつばにとのづくりせり

毛詩云、美二盛德之顯容一、以二其成功一告二於神明一者。正義云、頌之言誦也、容也。今之德廣以美レ之。今案に、頌は誦也。稱讃乃義也。祝はほむる心也。故に頌をいはひ歌と云ふ。或物云、風雅頌者異レ體、賦比興者異レ詞。以二彼詞一成二此二形一云々。

二　和歌六體

一長歌　二五三七、合三十一字也。

八雲たつ出雲やへ垣つまごめにやへがきつくるそのやへがきを

此歌今書入、本式には文殊の御歌を書けり。

二短歌　五七五七、多少任レ意。人丸が高市親王に奉短歌

かけまくもかしこけれどもいはまくもゆゝしけれども
あすかやまかしこくもまがみがはらにひさかたのあまつみかどを
まきのたつとは山こえてさだめ給ひてかみさぶといはがくれます
あめのしたさかえむときはわれもとも〳〵とゞまりましゝ

五七五々體　望二病者於女一涕詠之無常歌

初めあればさだめてをはりあることは
うつせみのよのことわりとおもへども
あまそぎのそのきしかげとたのめれば
さいたづまあかねさすまよふくさばにおとろへて
ぬばたまのひにゝことによひもねかねて
草まくらうきなくて宵にはあらねどなりゆけば
うきなくてときのひきかもみづどりの
あまぐもにたゑにしことをたひらぎて
おもひつゝうきふねのうらにたゞよひ
ほれたることも語らはむとかぜまつと

ゆめのごと　いともはかなく　なりゆけば
かくなはに　おもひみだれて　なきなげき
袖のうらに　よするなみだの　しきぬれば
すべなしと　あまのわぶるを　みきゝつゝ
たまほこの　みちゆきずりに　みるわれも
あまぐもの　ゆきすぎかねて　さまよひぬ
あなうの世　あはれわがみを　かげろふの
夢かうつゝか　なぞもつねなき

亂句體　無二本式一。今書二入之一。

うぐひすの　かひこのなかの　ほとゝぎす　ひとりうまれて
しやがちゝにて　なかずしやが　はゝにてなかず　卯のはなの
さけるのべより　とびかへり　きなきとよまし　たちばなの
花をばちらし　ひねもすに　なけばきゝよし　まひはせむ
とほくなゆきそ　わがやどの　花たちばなに　すみわたれとり

三旋頭歌　五句外加二一句一。胸腰終入。七字五字任レ意。山上憶良草花歌云、

はぎの花　をばなくすばな　なでしこの花　をみなへし　又ふぢばかま　あさがほの花

是は胸に七字くはへたるなり。此歌無二本式一。今書二入之一。橘貞樹朝臣の船にのりてよむ歌

ふねにのり　うしほかきわけ　玉もかる　ほどばかり　しらなみたつな　ありかみゆべく

これは腰に五字をくはへたる也。小町歌云、

夢路には　足もやすめず　かよへども　なぞやかひなき　うつゝに一め　みしことはあらず

是は終七字くはへたる也。

四混本歌　當歌の一句なき也。七字五字任レ意。安部清行朝臣歌云、

あさがほのゆふかげまたず散りやすきはなのよぞかし

又五句體あり。三國町歌云、

いはのうへにねざすまつがへとのみこそおもふ心はあるものを

五折句歌　五字あることを每句のかみにおくなり。小町が人にことかる歌云、

ことのはも　ときはなるをば　たのまなむ　まつはみよかし　へてはちるやと

ことたまへとおけり。

六音冠折句歌　十字あることを每句の上下におくなり。

〔此歌在二村上御集一。慶幡御息所許也。而載二喜撰式一。尤不審。若以二古歌一歟。〕

仁和御製

あふさかも　はてはゆきゝの　關もゐず　たづねてとひこ　きなばかへさじ

あはせたきものすこしとおけり。

已上出二喜撰式一。

三　和歌三種體

一　求韻　二　查體　三　雅體

求韻歌別有二十種。

一長歌　以二第二句終字一爲二一韻一、以二第四句終字一爲二一韻一。如レ此轉々。

二短歌　以二第三句終字一爲二初韻一、以二第五句終字一爲二終韻一。

韻字有二二種一。

一龜韻　やま　たましま　はま　等類也。

二細韻　しり　にり　等類也。

查體別有二七種一。

一雜會　資人久米廣足歌曰、

かすが山みねこぐ船のやくしでらあはぢの嶋のからすきのへら

牛馬犬鼠等乃一處如二相會無一レ有二雅意一。故云二雜會一。

二猿尾　通合師歌曰、

はたほこにそひてのぼれるなはのごとそひてのぼれるはたほこの

終七字の五字ある也。故曰二猿尾一。

三無頭有尾　神日本磐余彦天皇擊二梟師一歌云、

あみしほひとりもゝなひつ人はいへどもたむかひもせず

無二初五字一。故云二無頭有尾一。

四列尾　殖栗豐島詠レ夜歌曰、

あかときはとりもなくなり寺々のかねもとよみぬあけはてぬこのよ

終句有二八字一。故云二列尾一。

五有頭無尾　八坂入姫答二活目天皇一歌曰、

このなしをうゑておほさばかしこけむ

腰以下無。故云二無尾一。（第三句爲レ腰、已下爲レ尾、腰以上爲レ頭）

六直語　活目天皇贈二八坂入姫一歌曰、

みましするをかにかげなすこのなしをうゑておほしてかげによけむも

俗人の言語にことなることなし。故云二直語一。歌人右六歌の體犯す事なかれ。若是を犯さば爲二查體一。

七雜韻　角沙彌紀濱歌曰、

白なみのはまのまつがへのたむけぐさいくよまでにか年のへぬらむ

韻字不レ合。（第三句終字初韻、第五句終字終韻）故云二雜韻一。さとむ、同韻にあらず。

雜體別有二十種一。

一聚蝶　每句の上に同事を用也。淨御原天皇御製曰、

みよしのをよしとよくみてよしといひしよしのよくみよよきとよくみよ

每レ句に吉ありて凶なし。たとへば、葉蝶の一處にあつまれるがごとし。故云二聚蝶一。

二繼脊　言隱語露也。立レ式者歌曰、

ねずみのいへよねつきふるひきをきりてひきゝりいだすよつといふかそれ

ねずみのいへは穴名なり。よねつきふるひは粉名なり。きをきりてひきゝりいだすは火の名也。よつはこれ四字也。

卽あなこひしと云心なり。故に繼脊と云ふ。如レ此の歌は名爲二甲第一一也。

三變本　以二六句一爲二一絕一、第三句終字爲二初韻一、第六句終字爲二終韻一。大神高市萬呂卿歌曰、

しら雲のたなびくやまは見れどあかぬかもたづならばあさとびこえてゆふべこましを

も與レを同韻字也。

四短歌　以二五句一爲二一絕一、第三句終字爲二初韻一、第五句終字爲二終韻一。

おきつとりかもづく島にわがゐねしいもはわすれじよのことごとに

し與レに同韻字なり。

五長歌　二句終字爲二一韻一如レ此轉々。弔二天稚彦一會者歌曰、

あめなるや　おとたなばたの　一韻　うながせる　たまのみすまろ　二韻

みすまろの　あなたまはやみ　三韻　たにふたわたる　あぢすきのかみ　四韻

二句ののの字はこれ一韻、四句のろの字はこれ二韻。のとろと一對なり。六句ののみの字は是三韻にあたる。八句のみの字は是四韻。みとみと是韻一對の韻。四句のろ字、六句の尾の字、韻に當る。今韻をあらためむと思ふ故に、以二五句の字一韻につらなる。四句のろの字においては韻をあらたむる節をあらはすなり。若歌者、韻を改めむと思はゞ如レ此せよ。もし改めむと不レ思ば、又其韻の同字の韻をうること例不レ可レ禁。雖レ然多不レ可レ用。但絕句は其禁甚也。

六頭古腰新　古事を發句に陳、新意を三句に陳、是爲二雅麗一。當麻大夫贈二鶉伊勢一思レ婦歌曰、

あづさゆみひきつのべなるなのりそも花はさくまでいもにあはぬかも

梓弓は是古事、ひきつは是たとへ、なのりそは新意、花さくまでには是新物の色、いもにあはざるかは是爲二結句一。

七頭新腰古　新意を發句に陳、古事を三句に陳、是爲二妙佳一也。長田王戀レ婦歌曰、

秋やまのもみぢばしむる白露のいちじろきまで妹にあはぬかも

あき山は發句の新意、もみぢばは二句物也。白つゆは三句古事、いちじろきは四句喩、いもにあはぬかもは五句の終句。能與レも一對。凡作歌之體背レ此者皆爲二查體一。

八頭古腰古　頭腰幷に古事を陳。故云二頭古腰古一。此體或有二相對一。或無二相對一。詠レ春歌曰、

あをによし、しろたへに、ともに古事也。是爲二相並一。

あをによし山かひよしろたへにこのたなびくはるがすみかも

九古事意　凡是體非二一例一。又無二定處一四句中交錯。詠二龍田山一歌曰、

風ふけば雲のきぬがさたつた山いとにほはせるあさがほの花

雲のきぬがさは是二句、たつたやまは是三句、二句のきぬがさのたとへによせて、三句に山の名をあらはす。故に三古事意と云ふ。

十新意體　是體非二古事一、非二直語一、或有二相對一或無二相對一。故云二新意一。

相對　孫王臨燒戀歌曰、

しほみてばいりぬるいそのくさならしみらくすくなくこふらくのおほき

古遠直に離、故云二新意一。みらくすくなくこふらくのおほきはこれ相對也。此體與二古直一相似少亦對レ別可二消息一也。

此歌萬葉集には譬喩歌とかけり。

無對

あきはぎは咲きてちるらし春日野になくなるしかのこゑをかなしみ

藤原里官卿奉レ贈二新田部親王一歌曰、

みなそこへしづくしらたまながゆゑにこゝろつくしてわがもはなくに

第一二句非二是直語一、三四句是爲二直語一。三等句に一二句之情をあらはす。故名二新意一。餘亦准知。

〔てにとりしからにわすとはひとのいひしこひわすれかひことにしありけり

又後拾遺歌云、

あしひきのやまほとゝぎすのみならずおほかたとりのこゑもきこえず

如レ此類也〕已上出二濱成卿式一。

四和歌八品

一詠レ物者　まづはじめに名色をあらはさずして、對を設よ。詠二春山一時は、まづ冬山をあらはすべし。

冬すぎておもひはるやま　如レ此可レ云。

二贈レ物者　專其物を不レ賞して色をあらはすこと髣髴なれ。凡人に贈物豈皆美物乎。

ものとみむかずにはあらねど　如レ此可レ云。

三述レ志者　後代に軌摸とせしむ。心にまかせて領略する事なかれ。再三識して述也。

あさかやまかげさへみゆるやまの井の　如レ此可レ云。

四恨レ人者　終にその心を不レ破、閑思ひて花を綴てやうやく心をのべよ。

伊勢のうみにもしほやくなるうらみして　如レ此可レ云。

五惜レ別者　悦喜悲歎心中に滿て閑に述レ心。

ゆくかげにけふわかれなば　如レ此可レ云。

六謝レ過者　毎レ句に義を不レ失して解二結謝一レ過。

いまはわがひとひふつかのあやまちか　如レ此可レ云。

七題レ歌者　忽に題を得て早速に善惡を不レ顧譏病を去るを可レ好。

八和レ歌者　其人の歌中に章句をとりて水火に相違よ。

あはずして別れし袖はほせどひず胸のおもひはもゆるものから

返歌

おのれたきおのれ則ちこがれつゝきえぬ思ひはわれもしるとぞ

如レ此可レ存也。

五疊句歌

〔同事をかさねよむなり。〕

心こそ心をはかるこゝろなれ心のあだは心なりけり

六連句歌

春の野、夏の野、秋の野、冬の野　如レ此可レ續。

以上出二喜撰式一。

七隱題歌

是古式に不レ載事也。但古今并拾遺集に物名部と云はこれにや。近代の人是を稱二隱題一也。件歌は爲レ題而物名を歌のおもてにおきて他の心をのぶる也。古今に云、桔梗花を、

あきちかうのはなりにけりしらつゆのおける草葉もいろかはりゆく

かなにかきにくきものをば本字につきてよくよむべし。又同名のものをするゑよみて、なかばかくれぬ歌もあり。拾遺集云、かのかはのむかばき

かのかはのむかはぎすぎてふかゝらばわたらでたゞにかへるばかりぞ

八　誹　諧　歌

滑稽也。委趣は下巻にあり。

〔誹音非也。無二俳音一。可レ用二俳字一云々。雖レ然古今拾遺等皆以用二誹字一。尤不審也。〕

已上出二古今集一。

九　譬　喩　歌

如レ字六義の風比興等歌體なり。委趣は在二下巻一。

十　相　聞　歌　挽　歌

相聞は戀歌也。挽歌は哀傷也。

十一　戯　咲　歌

如レ字。

はつをものつくりたる田をはむからすまなぶたはれてはたほこにをり

十二　無　心　所　着　歌

雜會歌體也。無二所存一也。

わぎもこがひたひにおふるすぐろくのことうへのうしのくらのうへのかさ

已上出二萬葉集一。

十三　廻　文　歌

さかさまによむに同歌也。詠二草花一古歌云、

むらくさにくさのなはもじそなはらばなぞしもはなのさくにさくらむ

十四　和　歌　四　病

一岸樹病　第一句始字第二句始字同也。

てる日さへてらぬ月さへ　如レ此てとて也。

二風燭病　每レ句第二字與二第四字一同也。

このとのはさとのとりとる　如レ此のとの、とゝと也。

三浪船病　五言の四五字と七言の六七の字と同也。

くさのゝわかれしいもゝ　如レ此のとの、もとも也。〔私云、ののトもも〕

四落花病　每レ句に同詞まじはれる也。但故重讀は不レ忌。

〔新撰髓腦云、每句同樣なる詞交たる也。新撰髓腦落花病證歌云、

のちのひのしるしにしつるしらかしのしばしのちやゝたづぬばかりぞ

のとの、しとしなり。〕

已上出二喜撰式一。

十五　和　歌　七　病

一頭尾　第一句終字と第二句終字と同也。

しもがれのしだりやなぎの　如レ此のとの也。

二胸尾　第一句終字と第二句三六等字同也。

かむかぜの伊勢のくにゝも　如レ此のとの也。

三腰尾　他句終字と本韻と同也。

わかやなぎみどりのいとになるまでに　本韻にとに也。

四繋字　五句中與二本韻一同字有也。一繋字は不レ爲二巨病一。二繋字已上を爲二巨病一。

いもがなはちよにながれむひめしまに　本韻にとに也。

五遊風　一句中字與二終字一同也。

とにかくにものは思はじたゞ人の　如レ此にとに也。但物の名は不レ可レ忌。假令、いもがひも妹紐、是物名也。

如レ此をば不レ可レ避。

六聲韻　二句共同字是也。

みまくほりわがおもふ君もあらなくになにゝかきけむうまつからしに

にとに也。但不二巨病一。昔長歌には皆用レ之。

七遍身　二韻中本韻二字以上を除て同字あるなり。

いまさらになにか思はむわがなびくこゝろは君によりにしものを

二句中四のにを用、是也。

已上出二濱成式一。

十六　和歌八病

一同心　一歌中再同事用也。或曰二倭裏聯病一。

みづたかきたかだのまちにまかすとてみづなきひねにほと〳〵にねぬ

若故に重讀は無レ咎。左衛門督源氏歌云、

うたばうてひかばひかなむこよひさへあなことわりやねではかへらじ

文字雖レ同義異無レ妨也。中原氏初鴈歌曰

秋なれどわさ田にかりまところなみかりがねよそになきわたるかも

刈與レ鴈義異也。文字雖レ異義同は尤不レ宜。古在木嶋歌曰、

あひみるめなきこの嶋にけふよりてあまとも見えぬよするなみかな

なきこのしま、よするなみかな共無義也。如レ此類可レ避也。

二亂思　詞不レ優して常にそへよめる也。或云二倭形迹病一。古郊野遊覽歌云、

ゆく水のながれのつともしらなくにおのがさと〳〵なこそふりけれ

三橘蝶　句始は好て末疎也。或云二倭平頭病一。古小嶋歌云、

春がすみたなびく山のまつがえにほにはあらずてしら雲ぞたつ

四洛鴻　偏に題に被レ引て詞を不レ勞也。或云二倭上尾病一。用レ韻歌曰、

くれのふゆわがみおひゆきこけのはふえだにぞふれるうれしげもなし

五花橘　詞質にして直に其本名を用。或云二倭翻語病一。古諷歌曰、

あなつたなたけどもくち木もえなくにたとへばにむやわがこひらくに

六老楓　篇終一章上四下三用レ之。或云二倭齟齬病一。喜撰式云、一歌中にこめ思ひたることなくいひもらしつるなり。

古答レ贈レ花歌云、

てる月はゝれまなくのみにほふいろの人ゆきもなくきえぬるがうき

七中絶　一篇の中或有三三十五六字一也。或云二倭結腰病一。古題二秋花一歌云、

時は秋ぞはなは春なりてふうべもなみかきえりていろをうつりにさゝむ

八後悔　混本之詠音韻不レ諧。或云二倭解鐙病一。喜撰式云、心のどかに思ひをめぐらさずして、まだきよみて後悔也。

岩がうへにねざすまつがへとのみこそおもふこゝろあるものを

已上出二喜撰幷孫姫式一。

十七　避病事

古式之趣如レ此。但近所レ用は歌三十一字、病は同心病許也。同心の病と云は、一歌の中に再同事を用也。但隔レ句て用るを爲レ病云々。隔レ句と云に、二義有。一者歌は始の五七五の句をば本と云、終の七々句をば末と云。本句にいへることを、末句にのぶるを爲レ病、一者隔レ句と云は、たとへば第一句にいへる事を第三句にのべ、又第二句にいへることを、第四句にのぶる也。中に一句をへだてゝいへるを爲レ病云々。今案に如二古髄腦一は、一歌の中に二度同事を用を同心病としるして、隔レ句おもむきみえず。是又今の世にいできたることとなるべし。隨て四條大納言の新撰髄腦のごときは、

〔新撰云、雖レ有レ病無レ所レ避之時、可レ詠證歌注レ之。〕

み山にはあられふるらし外山なるまさきのかづら色づきにけり

是を病としるす。山と山也。然れば本の三句の中に同事あるも病と聞えぬ。又云、

みさぶらひみかさとまうせ宮城野のこの下露は雨にまさりけり

一字なれども心同は爲レ病。證歌に是をいだせり。みさぶらひ、みかさのみの字は御の字なる故也。これにてならびの句にも同字あるは病と見えたり。たとへば隔レ句と云義あるにても、彼句此句なる中に一句をへだつるにはあらぬにや。又詞は同共心ことなるは不レ爲レ病。同髄腦云、

み山には松の雪だにきえなくにみやこは野邊にわかなつみけり

みやまとみやこと別事なる故不レ爲レ病。又一字もおなじからねども心同は猶爲レ病。此義佳木抄の歌也。同髄腦云、

もがり船いまぞなぎさにきよするなる汀のたづのこゑさわぐなり

なぎさ汀同所なる故爲レ病云々。又ふた句の末に同字あるはさるべき也。又句の末ならねども詞の末にあるも如何、耳にとゞまりてきこゆ。

ちりぬればのちはあくたになる花をおもひしらずもまどふ蝶かな

第一句の果の字と第二句の三字と同、はとはと也。

久かたのあまのかはらのわたしもり君わたりなばかぢかくしてよ

第一句第三句のはての字同、のとのなり。かくはいへどもすぐれたる所あるには、凡て病若はかくのごとくのとがさるべからず。此歌どもみなよき歌なりといへり。

十八　詞病事

又歌に詞病と云事あり。但、古髄腦にはみえず。近代出來事か。たとへば、けれらむなど云類也。まことに耳にたちて聞ゆ。さるべき事也。

〔但病雖レ不レ載二古式一延喜十三年歌合稱レ最、其歌、さかざらむものとはなしにさくらばなおもかげにのみまだきみゆらむ〕

あふまでとせめていのちをしければこひこそ人のいのちなりけれ

是等よき歌也。たゞいかなることもよくつゞけつればあしくも聞えず。されば天徳の歌合には同とがあれども、とがめたるもありとがめぬもあり。かやうの事は當時耳にたゝむにしたがふべし。近代の人は此式を可レ用也。

十九　秀歌體

新撰髄腦云、凡歌は心ふかく姿清げにてをかしき所あるをすぐれたりと云ふべし。こと多くそへくさりてとてやをみたるはいとわるき事也。ひとすぢにすくよかによむべし。すがたと云は、うちぎゝよげにゆるありて歌と聞え、もしはめづらしくそへなどしたる也。猶ふるき人おほく歌まくらをおきて、するに思ふ心をあらはす。中ごろの人はさしもあらねど、はじめにいひあらはしつるは、猶わろき事になむする。おほよそ詞いやしく、あまりおいらかなること葉などをよくはからひて、すぐれたることにあらずばよむべからず。かも、らし、べらなどふるきことつねによむまじ。又ふるくよめる詞をふしにしたるはいとわろし。ひともじにてもめづらしき事をよみ出づべし。さりとてよみもならはさぬ事などをいへるもわろし。又内外典のふみ、ふるき詩歌もしは物がたりなどの心をもととしてよめる事あり。古歌の心、ものがたりなどは、古きことのみな人の知りぬべきならずばよむべからず。われは思ひえたりとおもへども、人の心えぬ事はかひなくなむある。又むかしのさまをのみこのみて今の人ごとにこのみよむは、我ひとりよしと心には思ふらめども、なべての人さも思はねばあぢきなくなむあるべき。いにしへのよき歌

世のなかを何にたとへむあさぼらけこぎゆく舟のあとの白なみ

天の原ふりさけみればかすがなるみかさの山にいでし月かも

貫之躬恒はなかごろの上手也。今の人のよむは此人の流也。貫之歌

思ひかねいもがりゆけば冬の夜の川風さむみ千鳥なくなり

躬恒歌

わが宿の花みがてらにくる人はちりなむのちぞ戀しかるべき

兼盛歌

かぞふれば我身につもる年月をおくりむかふとなにいそぐらむ

これらをよきうたとしるせり。かゝる中にも又おの〳〵このむすぢの侍るにや。

風ふけばおきつ白なみたつた山夜半にや君がひとりゆくらむ

此歌を貫之歌の本とすべしと云ひけり。

つの國のながらのはしもつくるなり今は我身を何にたとへむ

これは伊勢の御の中務君に、ながらむ世にはかやうに歌はよめといひける也。

戀せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな

是は深養父が元輔にをしへける也。かやうによむべきにこそは。これも同髄腦にみえたり。

凡歌のしなは忠岑が和歌の十體、もしは四條大納言の九品、道濟が十體などにみえたり。忠岑がはことおほければしるさず。

二十　和歌九品

一、上々　是は詞もたへにしてあまりの心さへあるなり。

春たつといふばかりにやみよしのゝ山もかすみて今朝はみゆらむ

ほの〳〵とあかしのうらの朝ぎりにしまがくれゆく舟をしぞ思ふ

二、上中　ほどうるはしくしてあまりの心あるなり。

み山にはあられふるらし外山なるまさきのかづら色づきにけり

あふ坂の關のしみづにかげ見えていまやひくらむもち月の駒

三、上下　心ふかゝらねどおもしろきところあるなり。

世中にたえてさくらのなかりせば春のこゝろはのどけからまし
もち月の駒ひきわたす音すなりせたのなが道はしもとゞろに

四、中上　心ことばとゞこほらずしておもしろきなり。

たちどまりみてをわたらむ紅葉ばゝ雨とふるとも水はまさらじ
をちかたに萩かるをのこなはをなみねるやねりそのくだけてぞ思ふ

五、中々　すぐれたる事もなくわろきところもなくて、あるべきさまをしれるなり。

春きぬと人はいへどもうぐひすのなかぬかぎりはあらじとぞ思ふ
いにし年ねこじてうゑしわがやどの若木の梅は花さきにけり

六、中下　すこし思ひたるところあるなり。

きのふこそさなへとりしかいつのまにいなばそよぎて秋風のふく
我を思ふ人をおもはぬむくいにやわがおもふ人のわれを思はぬ

七、下上　わづかに一ふしある也。

ふくからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ
荒潮のしほのやほあひにやくしほのからくも我は老にけるかな

八、下中　ことの心むげにしらぬにもあらず。

今よりはうゑてだにみじ花すゝき穂にいづる秋はくるしかりけり
わがこまははやくゆきこせまつち山まつらむ妹をゆきてはやみむ

九、下々　ことばとゞこほりてをかしき所なきなり。

世中のうきたびごとに身をなげばひとひにちたびわれやしにせむ
梓弓ひきみひかずみこずばこずこばこそをなぞこずばそをいかに

二十一　道　濟　十　體

一古體　〃

をがさはらみつのみまきにあるこまもとればぞなづくこのわがそでとれ
わかのうらにしほみちくればかたをなみあしべをさしてたづなきわたる

二神妙

わがきみは千代にましませさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで
み山にはあられふるらしとやまなるまさきのかづらいろづきにけり

三直體

何をして身のいたづらにおいぬらむとしの思はむことぞやさしき
秋きぬとめにはさやかにみえねども風のおとにぞおどろかれぬる

四餘情

我やどの花みがてらにくる人はちりなむ後ぞこひしかるべき
今こむといひしばかりにながき月のありあけの月をまち出つるかな

五寫思

君がすむやどのこずゑをゆく〳〵とかくるゝまでにかへりみしかな
こぬ人をしたにまちつゝひさかたの月をあはれといはぬよぞなき

六高情

冬ながら空より花のちりくるはくものあなたは春にやあるらむ
ゆきやらで山路くらしつ郭公いまひとこゑのきかまほしさに

七器量

きのふこそとしはくれしか春がすみかすがの山にはやたちにけり
梅のはなそれともみえず久かたのあまぎるゆきのなべてふれゝば

八比興

雪のうちに春はきにけりうぐひすのこほれるなみだ今やとくらむ
花のいろはかすみにこめてみせずともかをだにぬすめ春の山かぜ

九華體

梅がえにきゐるうぐひす春かけてなけどもいまだ雪はふりつゝ
花みにもゆくべきものをあをやぎのいとてにかけてけふもくらしつ

十兩方

山たかみ雲井にみゆるさくらばなこゝろのゆきてならぬ日ぞなき
年をへて花のかゞみとなる水はちりかゝるをやくもるといふらむ

是等にてこゝろうべき也。

二十二　盗古歌證歌　餘證歌在二一字抄一、仍不レ注レ之。

ふるき歌のこゝろはよむまじきことなれ共、よくよみつればみなもちゐらる。名をえたらむ人はあながちの名歌にあらずば、よみだにましてば憚るまじきなり。又なからをとりてよめる歌もあり。それは猶こゝろえぬこと也。

古今　はなのいろは雪にまじりてみえずともかをだに匂へ人のしるべく　　躬恒
同　花のいろはかすみにこめてみせずともかをだにぬすめはるの山かぜ　　良峯宗貞
萬葉　むすぶ手のいしまをせばみおく山のいはがきしみづあかずもあるかな　　人丸
古今　むすぶ手のしづくにゝごる山の井のあかでも人にわかれぬるかな　　貫之
萬葉　おもひつゝぬればやかもとむばたまのひとよもおちずゆめにしみゆる　　無名
古今　思ひつゝぬればや人のみえつらむゆめとしりせばさめざらましを　　小町
萬葉　まちかねてうちにはいらじ白妙のわがそでの上にしもはおきぬとも　　無名
古今　きみこずばねやへもいらじこむらさきわがもとゆひにしもはおくとも　　作者可レ尋
同　年の内に春はきにけり一とせをこぞとやいはむことしとやいはむ　　元方
後撰　ひるなれやみぞまがひぬる月かげをけふとやいはむきのふとやいはむ　　恒躬
古今　うぐひすのたにより出づるこゑなくば春くることをたれかしらまし　　躬恒
拾遺　鶯のこゑなかりせばゆききえぬ山ざといかで春をしらまし　　中務
戀しきをさらぬがほにてしのぶれどものやおもふとみる人ぞとふ　　忠岑
拾遺　しのぶれどいろに出にけりわが戀はものやおもふと人のとふまで　　無名
古今　紅葉せぬときはの山はふくかぜのおとにや秋をきゝわたるらむ　　兼盛
拾遺　もみぢせぬときはの山にたつ鹿はおのれなきてや秋をしるらむ　　盛望
麗花集　花さかぬときはの山のうぐひすはおのれなきてや春をしるらむ　　宣能
　　同

うぐひすのねのひの松のうれしきはきみにひかれてやちよとぞ思ふ　基康親王
拾遺　千とせまでかぎれる松もけふよりは君にひかれてよろづよやへむ　能宣
後撰　としふれはかしらのかみもしら川のみつわくむまで老にけるかな　檜垣嫗
後拾　としをへてすめるいづみにかげみれはみつわくむまでおいにけるかな　重之
古今　かひがねをさやにもみしかけゝれなくよこほりふせるさやの中山　無名
玄々　かひがねをみるともきくはまことにやよこほりふせるさやの中山　左衛門權佐宣孝
拾遺　ふぢごろもはらへてすつるなみだ川きしよりまさるみづぞながるゝ　貫之
玄々　ふぢごろもながすなみだの川水はきしにもまさるものにぞありける　道綱母
古今　あしびきの山邊にいまはすみぞめのころものそでのひるときもなし　無名
拾遺　心にもあらでうき世にすみぞめのころものそでのぬれぬ日ぞなき　同
　わがやどのものなりながらさくらばなちるをばえこそとゝめざりけれ　貫之
玄々　わがやどのさくらなれどもちるときは心にえこそまかせざりけれ　花山院
拾遺　すぎたてるやどをぞ人はたづねけるまつはかひなきよにこそありけれ　無名
玄々　わがやどのまつはしるしもなかりけり杉むらばかりたづねきなまし　赤染
六帖　さゞれいしのうへもかくれぬさはみづのあさましくのみみゆる君かな　無名
拾遺　さをしかのつめだにひぢぬ山川のあさましきまでとはぬきみかな　同
古今　見る人もなくて散りぬるおく山のもみぢはよるのにしきなりけり　貫之
麗花　くれぬまにいそぎてゆかむ紅葉ばゝよるのにしきになりもこそすれ　泉式部

後撰　秋の田のかりそめぶしもしてけるがいたづらいねをなにゝつまゝし　藤成國
　あきの田のかりそめぶしもしつるかなこれもやいねのかずにとるべき　無名
後拾　すがのねのなが〳〵してふ秋のよは月みぬ人のいふにぞありける　長能
同　秋の夜をながきものとはほしあひのかげみぬ人のいふにぞありける　能因
古今　たちどまりみてをわたらむ紅葉ばゝあめとふるとも水はまさらじ　躬恒
後拾　水もなくみえこそわたれおほ井川きしの紅葉は雨とふれども　定頼卿
後撰　わかれにしほどをはてともおもほえずこひしきことの限りなければ　時貞朝臣妻
後拾　我身にはかなしきことのつきせねばきのふをはてとおもはざりけり　江侍從
同　いづかたときゝだにわかずほとゝぎすたゞ一こゑのこゝろまどひに　嘉言
同　きゝつともきかずともなし郭公心まどはすさよのひとこゑ　伊勢大輔
後撰　みやこにて山のはにみし月なれどなみよりいでゝ波にこそいれ　貫之
後拾　都にてやまのはにみし月かげをこよひはなみのうへにこそまて　橘爲義

前一條院御時

うらやましくものうへ人打むれておのがものとや月をみるらむ　無名

後冷泉院春宮御時

後拾　うらやまし春のみや人うちむれておのがものとや花をみるらむ　良暹
後撰　かへるかり雲井にまどふこゑすなりかすみふきとけこのめはる風　無名
金葉　ほとゝぎすくもぢにまどふ聲すなりをやみだにせよ五月雨のそら　經信卿

玄々　はる毎に心をそらになすものは雲井にさけるさくらなりけり　戒秀
後拾　山ざくらしら雲にのみまがへばや春のこゝろはそらになるらむ　源縁
拾遺　河ぎりのふもとをこめて立ちぬればそらにぞ秋の山はみえける　深養父〃
　ふもとをば宇治の河ぎり立ちこめてくも井にみゆる朝日山かな　三條大納言春宮大夫ィ
拾遺　日ぐらしにみれどもあかぬ紅葉ばをいかなる山のあらしなるらむ　長能
金葉　しぐれつゝかつちる山のもみぢばをいかにふくよのあらしなるらむ　顯季卿
古今　朝ぎりのともにたち出でてわかれなばはれぬおもひにもえやわたらむ　平基範
金葉　秋霧のたちわかれぬる君によりはれぬ思ひにまどひぬるかな　藤基俊
同　みむろ山もみぢ散るらしたび人のすげのをがさに錦おりかく　經信卿
同　おとは山もみぢちるらしあふさかのせきのをがはに錦おりかく　俊頼朝臣

以下歌已取レ半

萬葉　ことにいでゝいはゞゆゝしみ山川のたぎつこゝろをせきぞかねつる　人丸
古今　あしびきの山した水のこがくれてたぎつ心をせきぞかねつる　無名
萬葉　たか山のいはもとたぎりゆく水の音にはたてじこひはしぬとも　作者可レ尋
古今　よしの川いはきりとほし行く水の音にはたてじ戀ひはしぬとも　無名
同　さゝのくまひのくま河にこまとめてしばし水かへよそにてもみむ　同
後撰　ちかはれしかものかはらにこまとめてしばし水かへかげをだにみむ　敦忠卿
古今　こきちらすたきの白玉ひろひ置きて世のうき時のなみだにぞかる　行平卿

後撰　秋ごとにおく露そでにうけためてよのうきときのなみだにぞかる　無名
古今　みても又またもみまくのほしければなるゝを人はいとふべらなり　同
三十六人撰　みても又またもみまくのほしかりし花の盛はすぎやしぬらむ　高光少将
後撰　思ひいでゝとふ言のはをたれみまし身のしら雲となりなましかば　無名
後拾　思ひいでゝとふ言のはをたれみまし浮きにたへせぬいのちなりせば　同
同　さむしろはむべさえけらしかくれぬのあしまのこほりひとへしにけり　賴慶法師
金葉　たかせぶねさをの音にぞしられけるあしまのこほりひとへしにけり　隆經朝臣

二十三　物異名　付十二月名　略抽レ要

天、あまのはら　日、あかねさす　月、ひさかた　雨、しづくしく　風、しのゝをすゝき
霧、いさらなみ　樹雪落、しづく　水上雪、うすらひ　地、あらがね　山、あしひき
峯、つくばね　野、いもきの　河、はやたつ　高峯、あまそぎ　海、わたつみ　わたのはら
鹽海、おしてる　水海、にほてる　巖、よそねしま　道、たまほこ　庭水、にはたづみ
京、たましき　平城宮、あをによし　内裏、もゝしき　春、かすみしく　夏、かけそひく
朝、たまひこ　時、つかのま　曉、しのゝめ　腕、すみぞめ　草、さいたづま
壁草、いつまでぐさ　花、しめしいろ　菓、しまひこ　薦、かつみ　花がつみ　鶯、もゝちどり
鶴、あしたづ　鹿、すがる　猿、ましこ　蚤、させ　蛙、かはづ
蜘蛛、さゝがに　神、ちはやぶる　帝、すべらぎ　東宮、はるのみや　中宮、あきのみや
大臣、かけなびく　中少將、みかさやま　衛門、みかきもり　兵衛、かしはぎ　男、よしゑやし

女、はしけやし　婦、わかくさ　下人、やまがつ　賤男、しづのをだまき　盗人、しらなみ
別、むらどり　つらき事、いはみがた　夢、ぬるたま　書、たまづさ　筆、みづぐき
簾、たまだれ　和琴、あづま　酒、ひじり 見萬葉集　人形、はらへぐさ
正月　むつき　たかきいやしきゆきゝたるがゆゑむつびきづきといふをあやまれり。
二月　きさらぎ　さむくてさらにきぬをきればきぬさらきといふをあやまれり。
三月　やよひ　風雨あらたまりて草木いよ〳〵おふる故にいやおひ月といふをあやまれり。
四月　うづき　波流花（ワルバナ）さかりにひらくるゆゑに卵のはなづきといふをあやまれり。
五月　さつき　田うううることさかりなるゆゑにさなへ月といふをあやまれり。
六月　みなづき　農のことどもみなしつきたるゆゑにみなしづきといふをあやまれり。一説には此月俄にあつくしてことに水泉かれつきたる故にみづなし月と云ふをあやまれり。
七月　ふみづき　七日たなばたにかすとてふみどもをひらくゆゑにふみひらきづきといふをあやまれり。
八月　はづき　木のはもみぢておつるゆゑに葉おち月といふをあやまれり。
九月　ながつき　夜やう〳〵ながきゆゑによなが月といふをあやまれり。
十月　神無月　天の下のもろ〳〵の神出雲國にゆきてこの國に神なきゆゑにかみなし月といふをあやまれり。
十一月　しもつき　霜しきりにふるゆゑにしもふり月といふをあやまれり。
十二月　しはす　僧をむかへて佛名をおこなひ、あるひは經よませ東西にはせはしるゆゑに師はせ月といふをあやまれり。

二十四　古歌詞

いやとしのは、彌年也。　とよむ、響也。　とゞろ、動也。　あまはり、雨晴也。
はたれ、琰也。　あさけ 且開也又朝食と云は別義也。　しみゝ、繁也。　しばなく、數啼也。
ゆふかたまく、夕片設也。　いそふ、爭也。　かりそく、苅掃也。　ほむけ、穗向也。
おもる、霤也。　よくだけ、夜降也。　月よゝみ、月夜好也。　ゆふごり、夕凝也。
さやけし、清也。　しげぬく、繁貫也。　いたふる、甚振也。　まに〳〵、隨意也。
なほあらし、默然として不有也。　きなく、來啼也。　けに、勝也。　あまぐも、天雲又雨雲。
ほつえ、末枝也。　うれ、末也。　こづみ、木積也。　さよなか、小夜半也。
なのりそ、神馬藻也。　みしぶ、水澁也。　みこも、水薦也。　たぐふ、如也、具也。
あびき、網引也。 あみ引ものをばあこともいふ。　みなわ、水沫也。　され、岩也。さゞれ石也。　しのぐ、侵也、などもせぬ也。
おのがじゝ、おの〳〵也。　已上見二萬葉集一。　うたゝ、うたて也。
まくりて、そでまくりて也。又紅色はまぶりて也。　こまなめて、駒ならべて也。　あけたてば、夜のあくる也。
とむ、尋也、求也。　しでうつ、しづかにうつ也。　さしながら、さながら也。
なべ、からになど云ふ心也。　みちゆきぶり、行觸也。　あまぎる、そらのきる也。
さかゆく、さかゆる也。　心づから、心よりと也。　とをゝ、木草の末のたわみのく也。
ことぞともなく、なに事もなき也。　心にのる、心にかゝる也。　しゞにおふる、繁おふる也。
あへず、たへず也。　さか、くせなど云心也。
きかく、きくにと云也。　しかすが、さすが也。
とぶさ、木草のする也。　たわゝ、たわむ也。
こだる、盛すぎたる也。

ねこじ、掘也。見日本紀。　このくれ、木のしげき所也。　まとね、まはりゐたる也。
なまめく、やさめく也。　ことしも、ことありがほ也。　やゝ、微也、やう〳〵也。
うらおもふ、やゝおもふ也。うらがなし、うらさびし、うらめづらし、うらとく、是等同也。　おにこもる、心にくきと也。
まほ、うるはしと云心也、ゆるまぬ也、人のかたちならば美也。　はるかけて、春にかゝる也。曉かけて、夕かけて、是等同也。
きえがて、難レ消也、きえかぬる也。いねがて、すぎがて、ハでがて是同也。　のら、野也。萬葉集には草とかきてのらとよめり。　ゆきげのみづ雪消水也。又雪げの雲は別義也。雪氣也。雪ふらむとて黄雲のたつ也。
たむく、佛神に物たてまつる也。手向と云心也。　たぶさ、うでをいふ也。

二十五　出萬葉集所名　普通名所不レ注

山

山城 さぎさか山 白鳥ノ鷺坂山同所 又ホソヒレトモ。
古歌 こせ山
近江 田上 たながみ山 ユフダヽミ
山城 ふたば山
うへタカヤマイ うへかた山
美濃 ゆふ山 木綿
みふねの山 ミヨシノヽ タキノウヘノ
き山
加賀後 いはくに山
近江 しばつ山
おほは山
神山
乎す をすて山
きざ山 ミヨシノヽ
若狭 後瀬 のちせの山
ふる山
あをがき山
いさみの山
難波 くさかの山
おも山
大和 見毛呂 味酒 みもろ山
山城 鳥羽 とば山 シラトリノ
寸原乃 すがの山
山城 加世乃 かせの山
石見 高角山
なほり山
しはつ山
シルシノ こしのおほ山 白山歟
大和 あまのかぐ山
たち山
志良 しらつき山 ユフダヽミ
保曾 ほそ河山 イナヅチノ
志茂 しま山
宇津田 うつたの山
かくれの山
とませ山
あはの山
同所 まきもく山

近江 あさづま山
なごしの山
たゆらぎの山
おほきの山
井がねの山
いはむら山
下野 みかもの山
ゆふま山
あかみ山
かまくら山
いため山
はがひの山 春日ニ有
あを山
山城 こま山
屋 やのゝ神山 ツマカクス
まきての山 イモガソデ
くらゐ山
かさの山
二かみ山
なぐさ山
ふかつ島山
しばを山
ひきての山 スベニテヲ
いはむら山
下野 みかもの山
ゆふま山
あかみ山
かまくら山
かせの山
たかまとの山
人くに山
はつせの山 コモリエノ アマヲブネ
かりかの山
ひら山
大和 なみくら山 サベナミノ
ひとへ山
安藝 せの山
あきの山
こはた山 ヤマシロノ
なつき山
かも山
をはせの山
うすひの山
このもと山
あしくま山
はこね山
あそ山
きさの中山 大和也
スルガ たかまつの山
うの花山
いかご山
みなぶち山
たか山
まつち山
三輪山 ミムロナル
いもの山
たち山
いはきの山
たかしま山
とませの山 カクレヌノ
あしほ山
おひた山
よらの山
わをかけ山
くらはし山 ハシダテノ

きならの山　たむけの山ユフダヽミ　あらし山　おきつしま山
みくに山　ふたかみ山シブタテ　水わけ山ミヨシノヽ

峰　付嶽・高根

あをねがみねミヨシノヽ　いまきのみね　ゆづきがたけ　ふじのたかねシロタヘノ
よしのゝたけ　いこまがたけ

坂

ゆきあひのさか　ふぢしろのみさか　くせのさぎさかヤマシロノ　やそすみさかモヽクラズ
あしがらのみさか　てこのよびさか　うすひのさか　かみのみさか

岡

むかひのをか　ならしのをか　ゆきゝのをかアスカバハ　さのゝをか
しげをか　いはしろのをか　さたのをか　まゆみのをか
あとみのをか

杜

いはせのもりカミナビノ　いくりのもりイモガイヘニ　いはたのもりヤマシナノ　うきたのもり
さくさはのもり　うなでのもりマトリスム

野

かすがのをの　しめの　しめのゝ　くだらの
よこのムラサキノネハフ　すきのの　おほの　かくれの

あだのおほの　はなの　いるの　とほざとをのスミヨシノ
あしきの　しきのゝ　なみしばのゝ　やたのゝ
わざみの　いなびの　かりばのをの　おほあらぎの
いはせの　つくまの　たなくらのゝ　するのはらのアヅサユミ
やすのゝ　あげをさゝのイモガヽミ　かはぐちのゝ　いはたの
ひくまの　おほかの　あさゞはをのスミヨシノ　あはのゝ　うだのおほの
あきつの　あさはの　さがのあらの　きゝつかの
うぢのおほの　かたちのをの　みしまの　そひの　まの

原

まきもくのひばら　みわのひばら　たけだのはら　たかのはら
はつせのひばら　ゆはら　よさみのはら

海　付迫門

くろうしのうみ　ふせのうみ水海也　みこのうみ　おくのうみ
ちぬのうみ　あしつのうみ　いなみのうみ　なごのうみ
ねなのうみシナガドリ　はぐひのうみ　あしたりのうみタカシマノ　みかたのうみ
いづのうみ　あかしのせと　さつまのせと

江　付沼湊

たつのおほ江　みまくほり江イモガメヲ　すまの入江　かしふ江

なご江
いなさほそ江
ひらのみなと

津　付泊

すみよしのえなつ
ひきつアヅサユミ

浦

まれかのうらコロモデノさたのうら
いそのうら
なつみのうらスガシマノまとかたのうら
しがつのうらサヽナミノをみのうら
みほのうら
いそまのうらカミシマノながはまのうら
しらのうら

くさかのいり江
みたのほそ江
やそのみなと

なりたつ
のこのとまり

あみつ

名高たかのうらムラサキノとばたのうら
たちのうら
あさかのうらスミヨシノからのうら
あこねのうら
あこのうら
かとりのうら
まなかのうら
かざはやのうら
たきのうら

まのゝいり江カツシカノ
いそらのぬま
かけのみなと

しがのおほつ

綱なはのうら
けひのうら
みぬめのうら
しきつのうらスミヨシノ
まのゝうら
ひらのうら
ひかさのうら
たまのうら
のざかのうら
かたみのうら
ふぢえのうら

二〇六

たごの入江
いそらのぬま
かけのみなと

武庫むこのうら
たるひめのうら
とものうら
ちえのうら
みほのうら
さひかのうら
しほつすがうら
まりふのうら
たゆひのうら
まゝのうらカツシカノ
ふせのうら

濱

おほわたりはま
きくのはま
きくのたかはま
よろぎのはまサカシケノ

潟　付礒・奈太

かしひがた
みづきてのいそ

島

からかのしま
ひめしま
おきつかりしま長門也
いはひしま
からげたくしま

崎

みわがさき
やらのさき
おほのさき

たづなのはま
あくらのはま
はやみはま
いでみのはま

あゆちがた
ひぢきのなだ

たけしま
もゝつしま
きびのこじまヤマトヂノ
やそのしまモヽツヂノ
あはしま

神さき
みこしのさき
かねのみさきチハヤブル

すみよしのこはま
たかしのはま
ふなせのはま
かみのをばまオホサキノ

あすかゞた

さゝしま
ながとのしま
かちしま
ゆきしま
のじま

みほがさき
ゆらのさき
しらのさき

なごえのはま
（閑園）きくのながはま
しなのはまコシノウミノ

たゆひがた

いへしま
いらごがしま
かさぬひのしま
あべのしま

としまのさき
たかひめのさき
かしまのさき

あへつのさき　あれのさき　たぶしのさき　をじまのさき
のじまのさき　みそめしさきイモガメヲ　〔しぶたにのさき〕　〔あら井のさき〕
みうらのさき　たごのさき　みわのさき　さでのさき

河　付河淀・河原

のと川　みわ川　のとせ川　きさのをがは
あなし川マキモクノ　みよしの川　ひのくま川サヒノクマ　うちこせ川
ゆふは川　にふがは　あしきの川　いはでみ川
むつたの川　なつみ川　かたかひの川　にしきがは
あなせの川　はつは川　よしきがは　ふる川イソノカミソデ
とりかへ川アラヒギヌ　やすかは　しかま川　ひろせ川
とませがは　みつ川　たと川　うさかがは
ひめ川　さきた川　しくらがは　いづみがは
いなむのかは　むこがは　ちくまがは　たましまがは
ゐながは　あきつのかはミヨシノ、　とねがは　くしがは
あそのかはら　まつらがは　おほかはよど　くらはし川
みへのかはらワガタ、ミ　そがのかはらマスゲヨキ　すみだがはらイホサキノ　おほのかはら
ゆげのかはら　なゝのかはら　おほやがはら

池

よりかのいけイカルガノ　とりこのいけ　まのゝ池　うきねのいけ
かりぢのいけ　耳なしの池　いはれのいけモ、ヅテノ　をやまだのいけ
かるの池　土やすのいけ

井

さらし井　かそれのみ井　いそしのみ井　まのゝ井カッシカノ
やまべのみ井

橋

いたぶのはしヲハリダノ　まのゝつぎはしカッシカノ　さのゝふなはし

里　付村

かすがのさと　やまなみのさと　すみよしのさと　神なびのさと
うちわのさとコロモデヲ　いづみのさと　みほかのさと　きまほのさと
ゆづはのむら

雑

さほぢ　あさこぢ　みこしぢ　のがみのかた
すそわのたゐ　ふしみのたゐ　いづみのそま　ありそのわたり
こがのわたり　おほたき　をじまの神

奥義鈔中釋

後拾遺歌三十八首

一 かずしらず　二 花のものいふ　三 なつかり　四 なつの夜も
五 たままくくず　六 をぶち　七 萩の花ずり　八 水もいろなる
九 めもかれず　十 錦をあらふ付錦をさらす魚鱗錦　十一 はまつばき　十二 ゐるちり
十三 きみすめば　十四 かくしつゝ多くの人　十五 つるのはやし　十六 いぶきの山
十七 はなだのおび　十八 はゝきぎ　十九 ことのをたつ　二十 雪のあしたのこま
二十一 上陽人付楊貴妃まぼろし　二十二 玉昭君　二十三 うらなるたま　二十四 かめ井
二十五 むなしき船　二十六 山鳥頭白かめゐ　二十七 一巻にちぎのこがね　二十八 かへしけむ昔人
二十九 たもとせばし　三十 たちつくり江　三十一 をのへのしらべ　三十二 ふかきうみ
三十三 かづらのを　三十四 鶯のさへづり　三十五 まゆとしめ　三十六 うどはまに
三十七 ゆたけ　三十八 いちみのあめ

拾遺歌二十一首

一 さくらがり　二 かみまつるうづき　三 さばへなす付さといふことおしね　四 菊露ふちとなる
五 やまよばふ　六 みちよのもゝ　七 あまのは衣付つるばみ藤衣　八 花のかほ
九 いくくすり　十 やほかゆく　十一 いりぬるいそ　十二 しかのあま
十三 いさむ　十四 とものみやつこ　十五 むらさきの雲　十六 そがぎく
十七 かづらきの神　十八 月のかつら付うさぎ　十九 いはしろの松　二十 かをさして
二十一 たきぐこる

後撰歌四十九首

一 みのしろごろも　二 たかさご付あしびき　三 柳のまゆ　四 あしびきの
五 よひながら　六 かこつ　七 月のかさ　八 そよみともなく
九 のもせ付こゑのあや　十 むさしの　十一 はな〳〵にみむ　十二 吹風のふかきたのみ
十三 いもがひも　十四 玉にくらべし付ますみの鏡　十五 やつはし　十六 鳥のそらね
十七 あしづゝ　十八 はなちどり付かげろふ　十九 あしのねわけて　二十 くれはとり
二十一 おほみ　二十二 すくもたくひ　二十三 たねはあれど　二十四 かざし
二十二 えに　二十六 ふたごもり　二十七 はすなは　二十八 あまのまくかた
二十五 いなせ　二十七 こまのあしをるはし　三十一 駒にまかせてゆく　三十二 しづはた
二十九 おきなさび　三十四 まさきのつな　三十五 おもひのつな　三十六 はちすはのはひ
三十三 うらしまのこ　三十八 わかむらさき　三十九 とびたちぬべし　四十 みこしをか
三十七 あしびきの　四十二 こゝらちる花　四十三 なほきゝ　四十四 いもせ付うつし人
四十一 いそのかみ　四十六 いせわたる付いほへ　四十七 さくさめ　四十八 ともゝ〳〵
四十五 たけくまの松
四十九 大原をしほ

古歌四十八首

一 まつらさよひめ　二 たはれを　三 山鳥のかゞみ　四 あからびく
五 うつたへ　六 はにふのこや　七 わすれぐさ付おにのしこぐさ　八 たぢからをの
九 てまのせき付やへがき　十 きのまろどの　十一 にひくは付つくばね　十二 夏そひく付すだくさくらあさ

十三　やそうぢがは　十四　玉はゝき 付玉之事　十五　はこやのやま　十六　しらまゆみ 付月名又ひるめのかみ
十七　このてがしは　十八　しながどり　十九　かさのかりて　二十　あさで 付こぶすま
二十一　あぢむらこま　二十二　あさもよひ 付をふちのまゆみおきのまゆみ　二十三　うつせみ
二十四　しきたへ 付あらたま　二十五　おほたむち 付みわの山、みとのまぐはひ幷いざなみいざなぎの次第在之。　二十六　石船 付玉垣の中又あきつしま、うきぶ
二十七　いつてふね 付舟名　二十八　やかたをの鷹 付たかへる　二十九　おほをそどり　三十　よるべのみづ
三十一　いなむしろ 付いなしき　三十二　錦木 付けふのほそぬの　三十三　野もりのかゞみ
三十四　うけもちの神 付はもりのかみ、付むすぶの神、あら人神　三十五　ありどほし　三十六　かさゝぎのはし
三十七　ともしけち　三十八　やまのみな　三十九　くだかけ　四十　つくもがみ
四十一　井手の玉水　四十二　たのむのかり　四十三　かぞいろ 付たらちねむまたま　四十四　からすば
四十五　そみかくた　四十六　みたまのふゆ　四十七　ひつじのあゆみ 付ひまゆくこま月のねずみ
四十八　おもりのしるし 付そでのすみ、こまつまづく、ころもかへす

合　百五拾六首

後拾遺

春

一　かずしらずかさなる年をうぐひすのこゑするかたのわかなともがな

是は拾遺に、つみたむることのかたきは鶯の聲するかたのわかななりけりといふ歌を思ひてよめるなり。

二　ふるさとの花のものいふ世なりせばいかにむかしのことをとはまし

桃李不レ言下自成レ蹊といふ事のあるなり。それはもろこしに李廣といひし武士のみちなし、させるいふ事もなかりしかど、徳あるものにて、これがもとに人のつどひしを、桃李はもの云ふ事なけれど人あつまりきたりてみるにたとへしよりいふことなり。もろこしには桃李をめでたき花にするなり。但しいづれの花をもよみてむ。詩には石松などをもものいはずとつくれり。

夏

三　なつかりのたま江のあしをふみしだきむれゐるとりのたつそらぞなき

なつかりとは、あしをば秋かるをとくおひぬれば夏もかるをいふ也。玉江とは越前の國にあり。鴈は春は北へかへるに、はねつかれぬるは越前越後などにおちとまりて、夏は江のあし、野の草などの中に、はねもぬけ毛もおちてはひありくなれば、その心をよめるなり。或説には、夏かりとはなつある鴈をいふなりと申せども、はじめに鴈とよみてするゑに鳥とよまむことはあしくや侍らむ。又重之百首にも、

なつかりのをぎのふるえもかれにけりむれゐしとりはそらにやあるらむ

とよめり。これに思ひあはするに猶あしにてあるべきとぞおぼえ侍る。

四　夏の夜もすゞしかりけり月かげはにはしろたへの霜とみえつゝ

月照二平沙一夏夜霜と云心也。

秋

五　あさぢはらたまゝくくずのうらかぜのうらがなしかる秋は來にけり

玉まく葛とはくずのかづらではたまのやうにまきするゑたればいふなり。

六　あふさかのせきの杉むらひくほどにをぶちにみゆるもち月のこま

をぶちとは小ぶちと云ふなり。杉まの月の影のうつりたるが、ちひさく斑なるやうにみゆるなり。後撰に云、

みちのくのをぶちのこまものがふにはあれこそまされなづくものかは

是はぶちにはあらず。陸奥にをぶちと云ふ所よりいでくる馬をいふ也。

七　けさきつるのはらの露にわれぬれぬうつりやしぬるはぎが花ずり

これは催馬樂の歌に、わがきぬはのはらしのはらはぎのはなずりと云歌の心なり。又萬葉にも、

我きぬはすれるにはあらずたかまどののべゆきしかば萩のすれるぞ

などよめり。花のうつりたるがすれるやうにみゆるなり。又はぎにてするともよめり。同集云、

いにしへにありけむ人のもとめつゝきぬにすりけむまのゝ萩はら

八　をみなへしかげをうつせば心なき水もいろなるものにぞありける

誰謂水無心、濃艶臨而浪變レ色といふ文をよめる也。

九　めもかれずみつゝくらさむしらぎくの花よりのちの花しなければ

是非二花中偏愛一菊、此花開後更無花と云詩なり。

冬

十　あじろ木にもみぢこきまぜよるひをはにしきをあらふこゝちこそすれ

蜀江濯レ錦と云ふ文なり。春部に、

花のかげたゝまくをしきこよひかなにしきをさらすにはとみえつゝ

とある歌もこの心也。かの江にあらひてさらせば錦の色のまさるなり。又にしきをばをしく、たちうきことにいへばかくよめり。又魚鱗錦といふことあり。一には魚鱗は錦にたるなり。一には魚鱗を焼きて、その灰を錦にさせば色のよき也。

賀

十一　きみがよはかぎりもあらじはまつばきふたゝび色はあらたまるとも

徳是北辰椿葉影再改と云文の心なり。古有二大椿者一以二八千歳一爲レ秋、以二八千歳一爲レ春也。さればしらたまつばきやちよなどもよめり。

十二　君が代はちよにひとたびねるちりのしら雲かゝるやまとなるまで

泰山不レ譲二土壌一故成二其高一といふ文の心なり。又古今序にもみえたり。

十三　きみすめばにごれる水もなかりけりみぎはのたづも心してねよ

明王時者黄河一清といふことのあるにおもひよせてよめるなり。

別

十四　かくしつゝおほくの人はをしへきぬわれをおくらむことはいつぞも

楊岐路滑、我送レ人多年、李門波高、人送レ我何日と云心をよめり。

哀

十五　たきゞつきゆきふりしけるとりべ野はつるのはやしのこゝちこそすれ

薪つきといへるは佛化縁つきて入滅し給ふをいふ。それによそへていへるなり。つるのはやしとは沙羅林といふなり。佛の入滅の時、木のかれて白鶴の色になれりしより鶴林とはいふなり。

戀

十六　かくとだにえやはいぶきのさしもぐさしもしらじなもゆるおもひをいぶきのたけはつねに火のもゆるなればかくよむなり。

追考、草は春もゆるものなればそへよめるにや。

十七　なきながすなみだにたへでたえぬればはなだのおびのこゝちこそすれ

是は催馬樂の心也。いしかはのこまうどにおびをとられてからきくいするいかなるおびぞはなだのおびのなかわたいれたると、いふ歌をよめり。

雜　一

十八　ゆかばこそあはずもあらめはゝき木のありとばかりはおとづれよかし

信濃の國に、そのはらふせやといふ所にはゝき木のやうなる木のこずゑの、よそにてはみゆるが、このもとへゆきぬれば、いづれの木ともみえぬなり。ふるくも、ありとはみれどあはぬ君かななどよめり。

十九　なき人はおとづれもせでことのをゝたちし月日ぞかへりきにける

伯牙鍾子期といひて二人の琴の上手ありき。鍾子期しぬる時に、伯牙きゝしりたる人あるまじければよしなしといひて、琴のをゝたちてそのゝちひかざりしことをよめるなり。

雜　三

二十　たづねつる雪のあしたのはなれごま君ばかりこそあとをしるらめ

雪中放レ馬朝尋レ跡といふ詩の心なり。

二十一　こひしくば夢にも人をみるべきにまどうつあめに目をさましつゝ

文集に、蕭々暗雨打レ窓聲　といふ事をよめるなり。是は上陽人のことなり。玄宗と申しけるみかどの時、上陽の人十六にてまゐりたりけるが、楊貴妃にそばめられて六十までみかどにもみえたてまつらで、一生むなしきゆかにむかひて夜をあかしかね、日をくらしわびて春ゆき秋すぐることをもしらで、上陽の宮のうちにむなしく老にたるあひだの事也。この楊貴妃を愛して、みかどのまつりごともしり給はざりければ天下うれへあるをきゝて、楊貴妃がしたしきもの、安祿山といひけるもの、楊貴妃をころしてけれども、みかどこひ悲しみ給ひて、位をさりて春秋のゆくをもしらずなげきかなしみ給ふ。庭には木の葉つもり草ふかけれど、はらふ人もなくて月日をおくるに、方士といふ人蓬萊にいたりて楊貴に尋ねあひぬ。みかどのおぼむことなどいひてかへらむとするに、楊貴玉のかんざしをつみかきて、これをみかどにたてまつれとて取らするに、方士がいはく、みかどまことゝおぼしめさじ。むかしかたらひけむことの、人などきかぬあらば、それをうけたまはりて申さむといひければ、楊貴がいはく、むかし七月七日長生殿夜半無レ人、ひそかにかたらひてのたまはく、天にあらばはねをならぶるとりとなり、地にあらばえだをつらぬる木とならむと。このことを申せといひければ、かへりてそのよしを奏しければ、いよ〳〵かなしび給ひけり。拾遺集歌に云、

　木にもおひずはねもならべずなにしかもなみぢへだてゝ君をまつらむ

道濟歌に云、

　思ひかねわかれし野べをきてみればあさぢがはらに秋風ぞふく

楊貴がころされし野をたづねにおはしつゝ見給ひける所をよめるなり。長恨歌と云ふは是なり。拾遺集歌に云、

　おきつしま雲井のきしをゆきかへりふみかよはさむまぼろしもがな

此歌もこの事を思ひてよめる也。まぼろしは方士也。

二十二　みるたびにかゞみのかげのつらきかなかゝらざりせばかゝらましやは

もろこしには、異國の王のつねにかたぶけむとするにおぢて、和親のちぎりをなさむがために、女御を一人胡國の王につかはさむとするに、三千のたぐひみなしも御覽じつくさねば、綵かくものをつかはして、おの〳〵のかたちをうつして、わろからむをつかはさむとするに、こと女御たちは畫師におほくの金をとらせつゝ、かたちをうつくしくか

かせけるに、王昭君といひける女御の、世にすぐれてうつくしかりければ、わがかたちをたのみてまひなひもせざりければ、これ一人をあやしげにかけりければ、中にわろしとて胡國へつかはせるをくいかなしむことかぎりなかりし事どもなり。

二十三　いかでかく花のたもとをたちかへてうらなるたまをわすれざりけむ

法華經云、不覺内衣裏有二無價寶珠一の心なり。佛道にいるをばかの玉をありとしるにたとふる也。

雜　四

二十四　よろづよにすめる龜井の水やさはとみのをがはのながれなるらむ

聖德太子をばとみのをがはによせたてまつりて云ふなり。文殊の歌よりおこれることなり。さればかの太子の志おき給へる所なれば、そのながれといふ也。

二十五　住吉のかみもあはれとおもふらむむなしきふねをさしてきたれば

太上天皇をばむなしきふねにたとふるなり。位におはしますほどはおもく物つみたるふねのごとくにて、おそれのおほかるゆゑなり。又經敎をば生死の海をわたる船筏にたとふ。般若經は畢竟空をとく故にむなしきふねといふなり。この經をば佛神のよろこびあがめ給ふものなれば、むなしきふねといふにわが身をそへて、かみもあはれとおぼすらむとよませ給へるなり。

二十六　やまがらすかしらもしろくなりにけりわがゝへるべきときやきぬらむ

燕の太子丹といふ人、秦始皇の時秦にゆけり。本國にかへらむとするをみかどゆるさず、烏のかしら白くなり、馬に角のおひたらむ時にかへすべきよしをのたまふ。丹そらをあふぎてなげくに、たちまちにからすのかしらしろく、馬に角おひたりければ、みかどとぐむるにあたはず、かへしやり給ふなり。

二十七　ひとまきにちぐのごがねをこめたれば人こそみえねこゑはのこれり

遺文三十軸、々々金玉聲、龍門原上土、埋レ骨不レ埋レ名といふ詩の心也。これは孫興公といひし人、天台山の賦をつくりてかたはらになげおきしに、金玉の響のきこえしより、文をほむることにはかくのごとくいふ也。

二十八　かへしけむむかしの人のたまづさをきゝてぞそゝぐ老のなみだを

黃壤誰知レ我、白頭獨懷レ君、唯將二老年淚一、一灑二故人文一といふ詩なり。

雜　五

二十九　しのびねのなみだなかけそかくばかりせばしとおもふ戀のたもとに

是は古今に、うれしさをなにゝつゝまむからごろもたもとゆたかにたてといはましを、といふ歌を思ひてよめり。うれしきことはそでにつゝむといへば、うれしさのおほかるよしにてそではせばしとはいふ也。

三十　よろづよを君がまぼりといはひつゝたちつくり江のしるしとをみよ

三十一　たかさごとたかくないひそむかしきゝしをのへのしらべまづぞこひしき

これは六條左大臣の子に相方辨といへる人の歌なり。此大臣は高名の琵琶ひきなり。絃のしらべをば松のこゑにかよふことにいへば、をのへときけば昔のしらべ思ひいでらるとよめるなり。高砂のをのへには松あるゆゑなり。

三十二　ふかきうみのちかひはしらずみかさやまこゝろたかくもみえし君かな

これは山階寺供養の後、宇治殿にたてまつりける歌なり。弘誓深如レ海の心なり。願海のほどはしらねどもこころたかくおほきにくはだてたりとみえしことかなと讀めり。

三十三　たえにけるはつかなるねをくりかへしかづらのをこそきかまほしけれ

琴にはかづらのをといふ事あり。隱逸などは琴の絃たえぬればくずかづらなどを用ゐる故なり。古詩にも風拂二琴上一

葛絃鳴とつくれり。

三十四　いつか又こちくなるべきうぐひすのさへづりそめしよはのふえ竹

樂の中に春鶯囀といふ樂のあればよめり。囀はさへづるとよむなり。

三十五　いにしへのまゆとしめにもあらねども君はみまくさとりてかふらめ

催馬樂に、みまくさとりかへまゆとしめといふことのあるなり。まゆとしめとはうまかひを云ふ也。

神祇

三十六　うどはまにあまのはごろもむかしきてふりけむそでやけふのはふりご

するがの國のうどはまに神女のおりてまへりしことなり。あづまあそびとていまにあるはこれなり。野叟のみてまねびつたへたるなり。

三十七　あめのしたはぐゝむかみのみぞなればゆたけにぞたつみつのひろまへ

神をばみつのひろまへといふなり。又きぬにゆたけといふことあり。まへをわらでひろながらあるなり。ひろまへともいふ。されば世の中をはぐゝむ神のみぞなればひろくたゝむとよめり。

三十八　もろともにみつのくるまにのりしかばわれはいちみのあめにぬれにき

法華經の三車のたとへの心なり。一味の雨は法華經なり。われはのりの雨にあひにきとよめり。經文を題にえてよめる歌はしるさず。

拾遺抄

春

一　さくらがりあめはふりきぬおなじくはぬるとも花のかげにかくれむ

このさくらがりを、或人先達の申しゝは、さといふはあと云ふ詞なり。あくらがりて雨はふりきぬとよめるなりとまうせど、いかゞときこゆ。さくらがりとは櫻をたづねもとむるなり。何をもとふむるをばかると云ふ也。ししがり、たかゞりなどいふめり。又古今にも、遍照が歌の詞に、たけがりに北山にまかれりけるにとあるは、松たけもとめにこそ侍るめれ。中ごろの人の歌にも、

春がすみはなぞのやまをあさたてばさくらがりとや人のみるらむ

とよめり。これさといふ詞の義にあらず。

夏

二　神まつる卯月にさけるうのはなはしろくもきねのしらげたるかな

神まつるると云ふにつきて、きねにはしらげさせたるなり。きねとは巫女をいへばなり。又物しらぐる具にも杵と云ふものあればそへよめり。

三　さばへなすあらぶるかみもおしなべてけふはなごしのはらへなりけり

さばへなすと云ふ事、日本紀云、天照大神の御孫皇孫命を葦原の中津國の主とせむとおぼすに、かの國に螢火光神および蠅聲邪神おほかりといへり。たとへば夏のはへのちりみだれたるやうに、あしき神のあるなり。これをはらへなごめむとて六月祓はするなり。萬葉には和儺祓とかきて、なごしのはらへとよめり、衆蚊成レ雷といふ文の心也と申す人もあれど、義もかなはぬうへに、書にたしかにみえたれば、異義をもとむべからず。さばへとはちひさきはへにや。さと云ふ事は物にしたがひて、せばくも、ちひさくも、をさなくもあるものを云ふ也。さむしろ、さごろも、さをしかなどいへり。古歌云、

やまざとはたのきのさねもすくべきにおしねほすとてけふもくらしつ

さるとはちひさき魚をいふ。おしねはおくてのいね也。

秋

四　わがやどの菊のしら露けふごとにいくよつもりてふちとなるらむ

仙宮の菊のつゆはつもりて淵となるといふことあるなり。

賀

五　こゑたかくみかさの山そよばふなるあめの下こそたのしかるらし

山嶮高歳、といふことのあるなり。世のまつりごとととゝのほれるときの事也。見二史記一。

六　みちよくてなるてふものことしよりはなさく春にあひぞしにける

漢武帝は仙の法をならひて、とげざりし人也。七月夜漏に西王母と云ふ仙人紫雲にのりて武帝の承華殿に至る時に、東方朔といふものの御まくにありし時、かくれて屏風のうしろにをり。みかど不死の薬をこふ。王母いまだいだすべからずといひて、桃七枚をとりて、みづから二枚をばくひつ。御門のゝたまはく、この桃からばしくうまし。うゑむとおもふ。王母わらひていはく、これは三千年に一度なるもゝなり。下土にうゑべきものにあらず。この屏風のうしろに侍る竈が三度ぬすみてたべたるものといふ。東方朔も仙人なり。かの仙宮の桃をよめるなり。王母きたらむとするとき、まづ青き鳥つかひにきたる。これによせて使を青鳥といふ也。

七　君が代はあまのはごろもまれにきてなづともつきぬいはほならむ

經云、方四十里の石を三年に一度梵天よりくだりて、三銖の衣にて撫に磨を爲二一劫一。うすくかろき衣なり。このこころをよめるなり。天人によそくて殿上人のきぬをもあまの羽衣といふ。又四位のきぬをば、つるばみのころもと云ふ。つるばみといふものにてそむる故なり。又服のきぬをふぢごろもと云ふは、藤のかはにておりたるあさましきぬのなればなり。海人のきぬをもふぢごろもと云ふ。あやしのものなれば、かの藤のぬのをきるなり。

別

八　さくら花つゆにぬれたるかはみればなきてわかれし人ぞこひしき

百詠云、果実蕊似二啼粧一、花の露にぬれたるは人のなけるかほにゝたるなり。

九　かめやまにいくすりのみありければとどめむかたもなきわかれかな

みなかく行く人に香藥やるとてよめる歌なり。かめ山とよめるは蓬萊なり。龜甲にある山なれば云ふなり。蓬萊には不死藥のあればいくゝすりのみあればとゞめむかたなきとよめる也。いくをゆくにそくたる也。

戀　上

十　やほかゆくはまのまさごとわがこひといづれまされるおきつしまもり

やほかとは八百日ゆくはまとよめるなり。しまもりとは島を守る神なり。

戀　下

十一　しほみてばいりぬるいそのくさなれやみらくすくなくこふらくのおほき

儀のくさの、しほみちぬればわづかにはずゑなどばかり見えて、しほにいりたるほどはおほかるなれどくにとりて、人をみることはすくなく、みぬことはおほかるよしをよめるなり。

十二　しかのあまのつりにともせるいさりびのほのかにいもをみるよしもがな

近江國のしがにはあらず、筑前の國にあるしほうみなり。萬葉に云、

しかのあまのしほやきどうもなるといくばくひてふことはおすれかねつも

十三　たらちねのおやのいさめしうたゝねはものおもふときのわざにぞありける

諫をいさむとはよむ也。をしふるやうなることなり。ことをすゝむるにも又とゞむるにもいさむるなり。

雜上

十四　とのもりのとものみやつこ心あらばこのはるばかりあさぎよめすな

或人云、主殿の下部は伴氏（トモウヂ）にてあるなり。みやつことはかの氏のかばねなりと申せど、伴のかばねは朝臣なり。おぼつかなし。もしともとは公といふ字をよめば、君のみやつことといふにや。やつことは奴なり。君の御奴といへるにこそ。萬葉にも、

ますらをはともものそめきになぐさむるこゝろもあらぬわれぞくるしき

とよめる也。公事のいそぎとよめるとこそみゆれ。又ゐなかに大領小領などいふものをばこほりのみやつこ、すけのみやつこなどいふよし口遊にみえたり。たゞおほやけのたみをばみやつことといふべきにこそ。但、ともを公と云ふ義はあまりのことなり。伴氏のみやつことよめり。

十五　ふぢのはなみやのうちにはむらさきの雲かとのみぞあやまたれける

これは慶雲の心をよめるなり。みかど后の出でき給ふべき所には紫の雲のたつなり。南中紀云、紫雲之瑞に膺て堯を生也。雲向二於北斗一乘二南風一雲瓏漢之上に到、堯母感二氣扶袖一雲愛レ之下入二堯母之懐一、堯を姙也。

十六　かのみゆるいけべにたてるそがぎくのしげみさえだのいろのてこらさ

そがぎくは黄菊なり。承和のみかどはよろづの物きなる色をめでたまひて、菊もきなるを愛し給ひけるなり。されば承和の黄なる菊をいふなり。或物には一本菊をいふなり。さればこそしげみさえだとはよみたれとはべれど、一本ぎくならずともえだなかるべきやうなし。又黄菊の一本ぎくにてありけるをみてもよめりけむ。みさのことばにつきて一本菊といふべきにあらず。色のてこらさとはいろのてりこきさまとよめり。しげみさえだとはしやがしたえだと云なり。問云、いろてりこしとは花のことにこそ。はなとしたえだとしもさしていふべきぞ。てこらさとはつくろさといへるにこそ。五音のもじにかよへり。きくのしたばゝあかぐろにこふかければ、かくてこそしたえだの義はかなひておぼえ侍れ、いかゞ。答云、あまりの義なり。歌はさのみこそよみ侍るぞかし。

十七　いはゞしのよるのちぎりもたえぬべしあくるわびしきかづらきの神

むかし大和國に役優婆塞といひけるもの、ゆきゝよかりなむといひて、かづらき山、よしの山のあひだに橋をわたさむと思ひて、日本國の神々に祈りこふに、かづらきにいます一言主と云ふ神、一夜の間に、かの山この山のみねにいしのはしをわたしはじめて、ひるはかたちの見にくきにはゞかりてわたさぬを、役おそかりてなむといひて、ひるもわたすべきよしをせむるに、神はらだちて託宣して帝に奏し給はく、役優婆塞と云ふもの王位をかたむけむとす、つみし給ふべしと。みかどこのつげによりて役優婆塞を伊豆の國に流しつかはしつ。神なほかれが世にあらむことをおそれて命をたゝるべきよしをかさねて奏するによりて、人をつかはしてころすべきよしおほせらるゝに、使いたりてつるぎをぬきてころさむとするに、つるぎに表文あり。みれば神の讒言によりてあやまたぬ役行者をつみせらるゝことあたはぬよしあり。驚きてこのよしを奏するに、みかどおそれ給ひて、めしかへされぬ。そのゝち行者のいかりをなして、護法をもちて此神をしばりて唐へわたりにけり。これ金峯山の縁起にみえたり。此こゝろをよめるなり。

十八　久かたの月のかつらもをるばかり家のかぜをもふかせてしがな

折二桂葉一と云ふ事あり。秀才もしは進士なんどになるを云ふなり。家のかぜとは、いへの業をつたふるなり。月の桂とよめるは、八桂の心なり。百詠注云、南州八桂樹有、生二月中一月滿卽桂生也。同注云、月中玉兎有、月陰之精成二獸兎一にかたどる。

十九　わがことはえもいはしろのむすびまつ千とせをふとも誰かとくべき

これは物語合するところにてよめるなり。わがことはえいはじとよめる也。むすび松のことしらぬ人なし。有間の皇子世をうらみて山野に迷ひありき給ひしとき結びたまへる松なり。さてよみ給へる歌

いはしろのはま松がえをひきむすびまさしくあらば又かへりこむ

二十　かをさしてうまといふ人ありければかもをもをしと思ふなるべし

秦の二世のとき趙高といひし大臣の、世をかたむけなとおもひて、わが威のほどをみむとて、しかをよき馬なりとてみかどにたてまつれりしを、みかどはしゝなりとのたまふを、人々趙高におぢて馬に候と申しければ、我威はまされりけりとて謀反をおこしたりしこと也。日本紀に見えたり。

二十一　たきゞこることはきのふにつきにしをいざ斧のえはこゝにくたさむ

山寺にて經供養して、又の日かへるみちにて、花をみてよめる歌なり。法華經をば、たきゞをとり水をくみ、千年までつかへてのちえたまひたれば、昨日この法をばさとりえてしかば、たきゞこることはつきにきとよめるなり。をののえくたすとは、樵夫の仙宮に入りたりしことなり。久しきことによむなり。さればこゝにてよをつくしてむといへり。

後撰集

春上

一　ふる雪のみのしろごろもうちきつゝ春きにけりとおどろかれぬる

しろきころもといはむとてふる雪のみのしろ衣とよめるを、やがてみのしろごろもとそへたるなり。雪のふるにうへにうちきたればみのゝかはりとおぼゆる心也。集に云、

山里はくさばのつゆもしげからむみのしろごろもぬはずともきよ

是もみのしろといふをわが身のしろのころもとそへたり。たとへばかたみのころもなど云ふ心なり。古歌に云、

せながためみのしろ衣うつときはそらゆくかりのねもまがひけり

これはひとへにかたみのころもとよめり。又みのしろごろもとは取物の具にあるあさぎぬをいふにやともおぼゆ。

春下

二　山もりはいはゞいはなむたかさごのをのへのさくらをりてかざゝむ

これは播磨國の高砂にはあらず。山の一の名をばたかさごと云ふなり。をのへとは山の尾の上と云ふなり。比叡の山にてよめる歌也。又山をば足引といふ。それは日本紀にみえたり。推古天皇女帝也。かりし給ふとき、あしにくひをふみてなへぎてひきけるより、山をば足引と云なり。

三　春の日のかげそふ池のかゞみにはやなぎの眉ぞまづはみえける

柳の葉はみどりにて人のまゆに似たればかくよむなり。詩にも翠眉娟嫚などつくれり。又まゆといふにつきてかひこのまゆにそへてもよめり。兼輔卿歌云、

あをやぎのまゆにこもれるいとなればはるのくるにぞいろまさりける

夏

四　あしひきの山した水はゆきかよひことのねにさへながるべらなり

是は人の琴ひくをきゝてよめる歌なり。琴には流水曲といふものあれば、それをひくをきけば水ながるゝにもよせてよめるなり。又凡ながるゝも水調と云ふ調もある也。

五　よひながらひるにもあらなむ夏なればまちくらすまのほどなかるべく

この歌心得がたし。よひながらひるにもあらなむといへるは、よも日もみなゝがらひるにてあれかし。よるひるといふ、わきま

へなくばくれをまつといふこともなくて、人にあはむとおもふになつの日のくれがたきなげきもあらじとよめるにや。」

六　なつのよの月はほどなくあけぬればあしたのまたもかこちよせつる

月みるほどもなくあけぬればあしたの日いでぬほどをよるとおもひなして猶月をみるなり。かこつとは朝をよるとおしていひなす心なり。

七　こよひかくながむるそでのつゆけきは月のかさをやあきとみつらむ

月はかさきつれば、くらくなるは、月のかさをにくしとみる心をあきとみるとはよめる也。されば秋とみれば袖はつゆけきにやとよめり。

〔裏書追加、此義なほ心ゆかず思、處々數本を引みるに、月のしもをや秋とみつらむとあり。此心は夏のゝちは秋なればこの月のしもは秋にてあるべけれども、この月そらの月にそへて月のしもとはこのいたる所をいへるにこそ。さてこゝろをあきとみればつゆけきにやとよめるにこそ。〕

秋上

八　けふよりはあまのかはらはあせなゝむそよみともなくたゞわたりなむ

そよみともなくとは、それは水ぞとわくこともなくたゞちにわたらむとよめるなり。あせなゝむとはあるゝ事也。

九　秋くればのもせにむしのおりみだるこゑのあやをばたれかきるらむ

こゑのあやとはあやしといふことなり。たへなるもあやしと云ふ。あやしと云ふことは、よき事にもわろき事にもかよひてきはまりぬる事をいふなり。野もせとは野にみちたりと云ふこゝろ也。おほくひまなき也。或物には野面をいふと申したれども、古き七夕歌に云、

くにもせにつねにあだなはたつめれどあひ見ることはたゞこよひなり

とよめり。國にみちてしらぬ人なくとよめるにこそ。又水もせになどよめり。集云、

みづもせにうきぬるときはしらなみのうぢのとのどもみえぬもみぢば

これは宇治にてよめる歌なり。宇治といふを内になして内のも外のも、水にうきぬればわかれずとよめり。内といふはこゝなり、とゝ云ふはほかと云ふ心也。

十　なみなへしにほへる秋のむさし野はつねよりも猶むつましきかな

これは古今に、むらさきのひともとゆゑにむさしのゝ草はみながらあはれとぞ思ふと云ふ歌を思ひてよめるなり。

秋中

十一　をるからにわが名はたちぬをみなへしいざおなじくはなゝにみむ

是は花ををれば名はたちぬらむ。おなじくは、わが花人の花とはなゝをさだめてみむ。これかれさだめなくはみじとよめり。女郎花をば女によそへたればその心にてよめり。

十二　ふくかぜのふかきたのみのむなしくばあきの心をあさしとおもはむ

これはこひによせてよめるなり。わがふかくたのむかひなくば、君が人をあく心のあだなりと思はむとよめるにや。それをあきのたのみによせていねのみいらずば秋のあさきとしらむとそへたるなり。五文字の吹風ぞ心得ねども、ふと云ふ文字をとりてふかきたのみとはよめるにや。又秋のことにてもあれば風をひきかけたるにこそ。

〔裏書、ある本にはふくかぜにとあり。此義にては五文字心得ずもなし。〕

秋下

十三　いもがひもとくとむすぶとたつたやま山ぞもみぢのにしきおりける

いもがひもとははかまのこしなり。はかまのこしはゆふとてもたち、とくとてもたてば、たつといふ文字をとらむと

てびもとくとむすぶとたつた山とはつゞくる也。

戀　一

十四　ともすればたまにくらべしますかゞみ人のたからとみるぞかなしき

玉にくらべしとは、玉をばめでたきものにいくばもむる心なり。女なかゞみにたとくたるぞ心得ぬ。故あることなるべし。人のたからとみるとあるは、女のこと人などにつきにければよめるにや。ますかゞみはますみのかゞみを略したるなり。萬葉には十寸鏡とぞかける。又真澄鏡とかけり。

十五　うちわたしながき心はやつはしのくもでに思ふことはたえせじ

八橋のくもでとよむ事は、はしにはくもでといひて柱にちがくて打たるものゝあれば、かくよむなりと或物にはかゝれて侍れど、伊勢物語には、みかはの國にやつはしといふ所にいたりぬ。そこをやつ橋といふことは、水のくもでにて橋をやつわたせるによりていふなりとかけり。さればくもでといふもの、橋にあるゆゑにいふにはあらずときこえぬ。それならばまことにいづれのはしにもよみてむ。やつはしにしもよむ、これにかなくり。水のくもでなるとあるは、とかくながれたるにこそ、さてものをとかくおもふによせてくもでにおもふとはよめるなり。

戀　二

十六　あまのとをあけぬくといひなしてそらなきしつる鳥のこゑかな

是はもろこしに雪華君といひける人、おほやけにたがひ奉りて、隣國にげてゆきけるに、よなかばかり渕谷關に到りぬ。かの關は鳥のこゑをきゝて後にせきのとをばあくるところにて、よふかくていづべきやうもなかりければ、あひしたがくるものゝなかに、鳥のこゑまねぶ人のありけるしてなかせたりければ、あけぬなりとて關の戸をあけたるより、にげてゆきにける事のあるを思ひてよめるなり。

十七　なにはがたかりつむあしのあしづゝのひとくも君にわれやくだつる

菅づゝとはあしのよのなかにうすやうのやうにてあるかはなり。よくうすきものなり。さればあしづゝばかりのくだてもわが心にはなしとよめるなり。

十八　かげろふにみしばかりにやはなちとりゆくゑもしらぬこひにまどはむ

かげろふにみしばかりとはほのかにみしとよめるなり。はなちとりとはこにいれてかふとりをはなちたるをいふ也。いづちかゆくらむしらねばゆくゑしらぬことによむなり。又伊勢歌云、

はなちとりつばさのなきをとぶからにいかでくも井をおもひかくらむ

つばさなしとは、こにこもりてとびもならはずはねもかなはねば云くるにや。又はねなどをきりてはなちてかふ鳥などもあれば、是はそれを思ひて讀めるにや。

十九　ふかくのみたのむ心はあしのねのわけても人にあはむとぞ思ふ

わけてとはまけてと云ふ心なり。ものをまぐるもわくるもおなじ心なり。瀧のねはとかくまがれるなり。又あしのねはとかくわりなくはぐるゝものなれば、あしのねのわけてとよめるにやときこゆ。

戀　三

二十　くれはとりあやにこひしくありしかばふたむら山もこえずきにけり

くれはとりは綾の名也。文皇時、呉國より二端送る綾なりとぞ或物にかきたるを、或説には二人の綾綴の名なり。一人の名はくれはとり、一人の名はあやはとりなり。一人は大神宮にたてまつり、一人は熱田宮にたてまつれるよし日本紀にありといへり。但、この歌の詞に、人のおこせて侍りけるくれはとりと云ふあやをふたむらつゝみてつかはすとてよめりとあるは、なほ綾の名にて侍るにや。

二十一　たれとなくかゝるおほみにふかゝらむいろをときはにかゞたのまむ

これは五節所にて人のおくれる歌の返事也。おほみとは五節には小忌大忌といふ事のあるなり。うらにあひたる人をば小忌といひ、さらぬ人をば大忌といくばく、おしなべたることによそくてよめり。

二十二　つの國のなにはたゝまくをしみこそすくもたく火のしたにこがるれ

名にたゝむことをしみてしたになむこがるゝとよめり。すくもたく火とは、あまなどはかれたるものなどをかき集めてたくなり。もえぬものにてしたにこがるればかくよむ也。又下人は火けたにとてはすくもといふものにうづみておくなり。それはしたにくゆればその心にやともかゆ。

二十三　たねはあれどあふ事かたきいはのうくにまつにて年をふるはかひなし

古今に、たねしあればいはにも松はおひにけりこひをしこひばあはざらめやもと云ふ歌を思ひてよ。

二十四　わがやどとたのむ吉野にきみもこばおなにかざしをさしこそはせめ

かざしとは狩するに鹿にみえにとて柴などを折りてまくにたつるなり。同じ心なる人はひとつかざしのうちにてしゝをもいるなり。されば同じこゝろなる事によめり。又山だちなども人に見えにとては、てるところにかざしをさすなり。拾遺にも、

ぬす人のたつたの山にいりにけりおなじかざしの名をやかさゝむ

とよめり。舞人陪從などのかざしも一襲のものはおなじ。花をかざしぬればこの心にかなくり。又かざすとはかくすと云ふ事にや。集云、

かざすともたうとたちぬるなき名をばことなし草のかひやなからむ

とよめり。かのかり人もぬすびともかくれむとてすることなればかなひてきこゆ。

二十五　水どりのはかなきあとにとしなくてかよふばかりのえにこそありけれ

えにとは緣といふなり。なに事もまたにははねたる文字、かなにはにとかくなり。伊勢物語に、

秋かけていひしながらもあらなくにこのはふりしくえにこそありけれ

とよめるもあくと云ふ事はかけてもいはざりし中に、あきはてらるゝ緣のありけるとよめるなり。このはふりしくとはあきはてぬるに似たりといふ心也。

二十六　ひきまゆのかくふたどもりせましみくはこきたれてなくなみせばや

ふたどもりとはかひこのおなじまゆにふたつこもれるといふなり。くはゝこくらのなればこきたれてなくにそくたるなり。

戀　五

二十七　はすなはのうくはつれなきうらにこそもののあらがひはつくといふなれ

「はすなはと云ふ物は海にあり。かづらのやうにてうらうくあるべくもなしときくにいかによめるにや尋ぬべし。」

〔はすなはゝかづらのやうにてうみのおもてにうきておひたるものなり。それがうらにはちひさきかひどものつきたるなり。うらくにはさらけもみえでうらにつきたればかくそくよめるなり。〕

二十八　いせのうみのあまのまくかたいとまなみながらくにけるみをぞうらむる

〔あまは鹽やくとてはしはひのかたのすなごをとりて、すゝきあつめて、そのしるをやくなり。さてそのすなごをはまのかたにまきくするをあまのまくかたとはいふなり。しはひのまにいそいとまなければいとまなきことによせて、いとまなくて久しくとはごりけるみをなげうらむるとよめるなり。あまのことなればうらおともそくいくるなり。〕

〔追考、齋宮女御

まくかたにあまのかもおくもしばくさけぶりはいかにたつらんなき

數本にあまのまてがたとあり。不審なり。但、假名のくてまきうゝ字なり。書寫誤歟。

二十九　いなせとものいひはなたれずうきものは身をこゝろとせぬよなりけり

せと云ふは諾する心なり。日本紀にみえたり。萬葉には諾をしかとよめり。いなともしかともいひはなたれずとよめり。

三十　しひてゆくこまのあしなるはしをだになどわがやどにわたさゞりけむ

これは古今に、まてといはゞねてもゆかなむしひてゆくこまのあしなれまくのたなばし、といふ歌を本歌にてよめるなり。

三十一　ゆふやみはみちもみえねど故郷はもとこし駒にまかせてぞくる

老馬知道といふ事のある也。むかし齊の管仲大雪にあひて道をまどくるに、馬にまかせてゆきたること也。

裏書云、韓子曰、管仲事齊桓公、爲上卿。桓公北征孤竹國。干レ時大雪、人皆失レ路。仲曰、可レ用二老馬智一。於レ是放二老馬一、隨二其路一、得レ歸二本國一。見二蒙求一。

三十二　しづはたにくつるほどなりしらいとのたえぬる身とはおもはざらなむ

しづはたにくつると云ふはおもひみだれてくつる程といくるなり。しづはたをばみだれたることにいふなり。集云、

しづはたにおもひみだれて秋のよのあくるもしらずなげきつるかな

又忠峯が長歌にも、わがなすことはしづはたにみだれてならずありしかばなどよめり。

雜　一

三十三　おきなさび人なとがめそかりごろもけふばかりとぞたづもなくなり

おきなさびとはおきなされともまうす。又おきなすさびともいくり。すさびはあだにうちすることなり。おひさびと云ふも此心なり。

三十四　てる月をまさきのつなによりかけてあかずわかるゝ人をつながむ

返し

三十五　かぎりなきおもひのつなのなくばこそまさきのつなのよりもとだめゝ

まさきのつなとは、そま人のまさきかづらといふものをつなにしていかだなどをもつなぎ、又とゞむるところにもこれにてつなげばかくよめり。返歌に、おもひのつなとあるは、思緒と云ふ事あり。緒はつなゝり。これはかぎりなき思緒のなくばこそとよめるなり。思緒はたゞ思ひと云ふ事なり。

三十六　はちすはのはひにぞ人はおもふらむよにはこひぢのなかにおひつゝ

蓮にはひと云ふものあり。人のくふもの也。それをはひとそくたる也。あやしき身なればちりはひなどに人の思くる心なり。こひぢとは泥をいふなり。はちすはそれにおふればこひにそくてよめり。

三十七　あけてだになにゝかはみむ水の江のうらしまがこをおもひやりつゝ

是はものこゝしよりおちたることなり。日本紀にあり。雄略天皇時に、丹後國余社郡水鄕の浦嶋の子といふもの、おほきなるかめをつれりける、女になりにけり。それをめにして蓬萊にいたれりけるに、故鄕をこひて歸りなむといひければ、女封じたる甁を、是をかたみにせよ、ゆめ〳〵あくなといひてとらせたりけるを、ゆかしさにあけてみれば紫雲有りてそらにのぼりにけり。このをとこのよはひをこめたりければ、をとこ老かまりにけり。くやしとおもひどかひなし。これよりあけてくやしき事によめり。

三十八　おもひきや君がころもをぬぎしときわがむらさきのいろをみむとは

返し

三十九　いにしへもちぎりてけりなうちはぶきとびたちぬべしあまのはごろも

これは庶明朝臣中納言になれるとき、うへのきぬやるとて九條殿のよみたまへる歌なり。もし除名の人にてありけるが中納言になれるにや。官位をとくには、位にしたがひてきるころもをもぬがすることなれば、除名のときにはむらさききるべしとおもはざりしにとよみたまへるにや。返歌はむかしあふみのよごの海に天人のあまくだりて水あむるを、そこなりけるをとこみてぬぎおける天の羽衣をとりたりければ、えかへりのぼらでやがてめになりて居にけり。これむかしのちぎりあるゆゑなり。をとこのありきたるまに、かくしたる衣をとりてとびのぼりにける事をよめるにこそ。とられしころもをかへしえたれば、これにそへたるにや。さていにしへもちぎりてけりとよめるにこそ。とびたちぬべしとはうれしきにはとびあがりぬべきこゝちするをよめり。

四十　みこしをかいくそのよゝにとしをへてけふのみゆきをまちてみつらむ

此歌の詞には、延喜御時北野の行幸にみこしをかきてとあり。歌にはみこしをかとあり。是はところの名也。北野のかたにあるにや。或人云、近衛をばみこしをさと云ふなり。枇杷大臣、近衛づかさのときよみたまへる歌なり。みこしをさとよむべしともまうすめり。但、番長の中にこそみこしをさといふものは侍れ。又かの大臣その時わかき人にておはしけむ。いでそのよゝにとしをへてとあるもこゝろえず。なほ所の名にてあるべきにこそ。

四十一　いそのかみふるとぞよめる。そのゆゑはやまとにいそのかみと云ふ所に、布留の大神と云ふ神います故なり。さればいそのかみふりとはいふまじと申せど、ふるくみなよめり。ふりふる五音の字なればかよはせるにや。又かのやしろ、よのはじまりのところなれば、たゞふるきことによせていふにや。

雜　二

四十二　うつろはぬこゝろのふかくありければこゝらちるはな春にあへるごと

是は嵯峨の后の、みかどにたてまつり給ふ歌なり。我心ながくかばかりあだなる御こゝろをおほくのとしごろみつる事とよめるにやとぞきこゆるなり。

四十三　なほき木にまがれるえだもあるものを毛をふききずをいふがわりなさ

毛をふききずをもとむるといふこゝろなり。書云、好生三毛羽一悪吹レ毛求レ疵。

四十四　むつましきいもせの山のなかにさへへだつる雲のはれずもあるかな

是ははらからのなかに、こゝろよからぬことありてよめる歌なり。いもせとはいもうとせうとなり。これは山ふたつの名なり。いもの山せの山とてならべる山なり。又めをとこをもいふ。古歌に云、

かひすらもいもせぞなべてあるものをうつし人にてわがひとりぬる

これはめをとこなり。たゞをんなをとこと云ふ事に侍めり。うつし人とは萬葉には現人とかけり。うつしごゝろなどいふも現意とかけり。又かひにはめがひをがひと云ふ事のあればかくよめり。

四十五　うゑしときちぎりやしけむたけくまのまつをふたゝびあひみつるかな

武隈の松はいづれのよゝりありけるものともしらぬ人は、うゑしときとよまれたれば、おぼつかなくもや思ふとて書きいでゝ侍るなり。此松は昔よりあるにはあらず。宮内卿藤原元善といひける人の任に、たちの前にはじめてうゑたる松なり。みちのくにの舘はたけくまといふところにあり。この人ふたゝびかの國になりて後のたびよめる歌なり。

たけくまのはなはの松ともよめり。重之歌に云、

たけくまのはなはにたてるまつだにもわがごとひとりありとやはきく

たけくまのはなはとて山のさしいでたる所のあるなりとぞ近くみたる人はまうしゝ。この松野火にやけにければ、源

滿仲が任に又うう。其後又うせたるを橘道貞が任にうう。其後孝義きりて橋につくり、のちたえにけり。うゑてかりける人なり。なくともよむべし。

雜四

四十六　いせわたる川はそでよりながるればとふにとはれぬ身はうきぬめり

いせとは五十瀬といふなり。すべて五字をばいといふなり。いかなど云ふも五十日なり。萬葉には五百重とかきていほへとよむ。五百代小田と書きては、いほしろをだとよめり。

四十七　今こむといひしばかりをいのちにてまつにけぬべしさくさめのとじ

これは人のむこのいまこむとたのめてまかりにけるのち、ひさしくこざりければ、あとうがたりのこゝろをとりて、女のはゝのいひつかはしける歌なり。さくさめさま〳〵に申すめり。或物には江都督はしうとめの異名なりとぞ申し。さればかのしうとめの女の刀自にてありけるにやとかけり。とじは女の惣名と日本紀にみえたり。公家の刀自のうたがひはあるべからず。

別

四十八　そむかれぬまつのちとせのほどよりもとも〳〵とだにしたはれぞせし

そむかれぬ松の千とせとあるは、かれぬ松とそへたるにや。かつはわれをそむきぬるによせたるなり。松の千年のほどよりもとはひさしき心なり。ひさしくなむしたはれしとよめるなり。とも〳〵とはともにいかばやとしたふ心なり。人丸が長歌にもさかえむときはわれもとも〳〵とよめり。われもともならむと云ふ心とみえたり。但、いつもじの義ぞこゝろゆかずきこゆる。又貫之歌云、

とも〳〵と思ひきつれどかりがねはおなじかたにもかへらざりけり

などもよめり。

賀

四十九　おほはらやをしほの山のこまつばらはやこだかゝれちよのかげみむ

これはすみやく大原にはあらず。大原野の社のかたにをしほの山と云ふ山はあるなり。さて藤氏のこどものかうぶりすればかくよめり。氏のやしろなるゆゑなり。

古　歌萬葉集

一　うなばらのおきゆくふねをかへれとやひれふらしけむまつらさよひめ

松浦さよひめは大伴佐提比古がめ也。をとこおほやけの御使にもろこしにゆくに、すでに舟にのりてゆくときわかれをしみて、たかき山のみねにのぼりてはるかにはなれゆくを見るに、かなしびにたへずして領巾をぬぎて、これをまねく。見る者なみだをながす。これよりこの山を領巾麾の嶺と云ふ。この山は肥前國にあり。此心を後の人のよめるなり。うなばらとは海をいふ也。又三嶋王の追和する歌云、

おとにきゝめにはまだ見ぬさよひめがひれふるまでぞ君まつらやま

この山をばまつら山とも云ふ。又まつらがたなどもよめり。

〔○　かつしかのまゝの井見ればたちならし水をくみけむてこなしぞおもふ

是はむかし下總國勝鹿眞間野の井に水くむ下女也。あさましきあさぎぬをきてはだしにて水をくむ。そのかたちたへにして貴女に見えはむかし下總國勝鹿眞間野の井に水くむ下女也。あさましきあさぎぬをきてはだしにて水をくむ。そのかたちたへにして貴女に是はむかし下總國勝鹿眞間野の井に水くむ下女也。あさましきあさぎぬをきてはだしにて水をくむ。そのかたちたへにして貴女に

のゝかやはらなどよめる歌あり。或は大和國、或相模、或陸奥國によめり。是らにまがひぬべし。可二用意一なり。」

一〇　あかねさすむらさきのゆきしめのゆきのものもはみるやきみが袖ふる

是は天智天皇七年淡生郡に遊獵時、額田王のよめる也。あかねさすとはひかげなどさしたる心也。紫野とは彼野には、昔は紫のおひければおきてむらさきのとよめり。次にしめのといくるは今日の御獵にしめたればいふ也。一所に二名を稱すべし又一名を重疊してよむこと、古歌のならひ也。この野にあそびめぐらく女どもの髴は見るやとよめり。仁徳帝紫の女共也。皇太子御答歌云、

おらさきのにはくるいもがにくゝあらば人づまゆゑにわれこひめやも

たゞいま紫の見ゆればたとくにとりてかくよめり。古歌のならひなり。これにて紫ありけりとしるべし。これをおしく心得て、大和のしめのにあそび、山城のおらさきのにあそびしは見やとよめるなりなど申す人うあれば、かきおき侍るにぞ。今あそぶ野をばおきてすぎにしかたの事を、この野もりに見るやとゝはお事はいかゞ侍るべからむ。江師歌云、

がまふ野のしめのゝはらのをみなへしのもりに見すないかがそでふり

とよめるも、この歌の心をとりてよめるとこそ見ゆれ。」

二　たはれをとわれはきつるをやどかさずわれをかくせりをそのたはれを

集に云、大伴田主、字伊郎、かたちよく心優にして見る人こゝろをうごかす。隣にすみける石川女郎と云ふ者これをおもひかけてあやしき媚のさまをつくりて、夜ゆきて戸をたゝきて、ひがしのとなりのおうなの火とりにまゐれる也といひければ、をとこかくともしらで火ばかりをとらせて、空しくかへしつ。あしたに、とゞめぬ事を且はぢ、且はうらみて、女郎がやれる歌也。たはれをは遊士とかけり。好色と云ふ心也。をそとはきたなしと云ふ也。色好みときけどおれをとゞめず、きたなき色ごのみなりとよめり。いまもむなか人は申すことば也。或人云、ひがしの國のものはそらごとをばをそごとゝいふ也。さればそら色ごのみとよめるにこそともまうす。

三　やまどりのをろのながをにかゞみかけとなふべみこそなによそりけあ

此こゝろえがたし。なきよわりけあとぞあらむとおもふに、集にもなによそりけめとある、おぼつかなし。又このかゞみのこと、或物にはむかし隣の國より山鳥をおくりてなく聲たくなるよしを申しけれど、すべてながらけるをある女御云、とゞめはれてながぬならむ。かゞみをかけて見せ給へと申しければ、籠にかゞみをかけたりけるに、影を見てなけりとぞあり。心ゆきてもおぼえず。籠にかけたらむかゞみをろのながをにかゞみかけといはむ事もおぼつかなし。或説には、山鳥はよるになれば、あ鳥と山をくだてゝぢく〳〵にぬるに、あかつきになりてな鳥の尾をもたげて見るにめとりのあるところの、かゞみにて見ゆる也。この故に山鳥のかゞみといふ事はいふ也と申す。これはさもときこゆ。

問云、山鳥をなくだてゝぬといふ事は山のををくだつるにはあらず。ひと所にはねれど、をとりの尾ををりかくしてなかにくだてゝぬるなり。あたかなどにてあのづから見るに、おぼくならびねたりと申す人もあるはいかに。答云、しかあらむはしらず。ふるくはなほ山の尾をくだてゝぬとぞいひならはせる。古歌云、

ひるはきてよるはわかるゝ山どりのかげ見るときぞねはなかれける

とあり。これならずおぼく侍り。この歌はわが尾にかゞみある心にかなくり。人丸歌に、

あし引の山どりの尾のしだりなのながゝしよをひとりかもねむ

とあるも、山鳥の尾はながきものにてあるうへにをひとりぬるものにてあれば、かくはよめり、とこそ申すめれ。この歌に山鳥のをとあるは尾にあらず。雄なり、をとりのしだりをのといふ也と申す義も侍り。さもありなむ。

四　あからびくいろたくのこのかげ見れば人づまゆゑにわれこひぬべし

あからびくとは集には赤羅引色妙の兒とかけり。紅の羅といふ也。そのいろのめでたきをいろたくとは云ふ。これをきたる女といくる也。これは織女の歌なり。歌に云

むばたまのこのよなあけてあからびくあさゆくきみを見ればこひしき

五　うつたくにあまたの人はありといふをわきてわれしもよるひとりぬる

うつたくとは浮物をいふとぞ歌物には書きたれど、このうたの心にはかなはず。集云、

うつたくにまがきのすがた見ましみゆかむといくやきみをみにこそ

これらにて心得あはするに、ひとくといふ心にや。土佐日記にもさぞ見えたる。

六　ひさかたのはにふのこやにこしあめふりとこさくぬれぬみにそくわきも

はにふのこやとはあやしきいくなり。こさめとは和名には細雨とかけり。世俗にうこまかにてふる雨なさまうす。或物には、みちゆく人こしまでぬれとほるばかりにふるあめをいふと侍る、あまりの義とぞきこゆる。とこさくぬれぬとよめるにつきて、微雨にはよもあらじとて今案にまうす事にこそ。是はにふのこやのあやしきをよしをいはむとて、いさゝかの雨にもとこまでぬるゝよしをよめるとぞ見えはべる。ひさかたのはにふのこやとつゞけたるは、ひさかたのこさめふるといふべきを　つゞきをいたはりて詞の上下したるなり。

七　わすれぐさわがしたひもにつけたればおにのしこぐさことにしありけれ

わすれぐさとは萱草をいふ也。倭名鈔には忘憂草とかけり。これを見ればうれく忘るゝ也。おにのしこぐさは紫菀なり。これを見れば物忘れをせずといくり。ただし順が和名にはおにのしこぐさと云ふ注見えず。本草には忘草しのぶ草は同物と見えたり。伊勢物語にもしか侍り。又屋の軒におふる草をもしのぶ草とはいふ也。

八　いはとわるたからをのもえてしがたをやめなればすべもしらなく

是は手力雄の神をよめる也。天照大神の石門をひらきてのぞき給ひしとき、戸のわきにたちていはとひらきたりしちから神也。そのかみもがな、われは女の身なればすべきやうもしらずとよめり。

九　やくもたついづものくにのてまのせきいかなるてまに人をはるらむ

てまのせきはいづもの國にあり。てまといふことをとらむとてこのせきをひきよせたる也。てまとは人のてまふたがるなどいふこと也。いとまなどふたがる心也。いづもを八雲もたつといふ事しらぬ人なし。すさのをのみこと、足なづちの神のむすめとすまむとて、出雲國簸の川上にみやづくり給ひし所に、八色の雲のたちたるを見てよめるやくもの歌よりおこれる事也。

十　あさくらやきの丸殿に我をればなのりをしつゝゆくはたが子ぞ

是は天智天皇の御歌也。よにつゝみ給ふ事有りて、筑前國上座郡あさくらと云ふ所に、山中にくろきの屋をつくりておはしましけるを、木のまろ殿といふ。まろきにてつくれるゆゑ也。用心をし給ひければいりくる人とはぬになのりをしつゝいりける也。さてとはぬになのるともよむなり。これぞ本歌には侍る。

十一　つくばねのにひくはまゆのきぬはあれどきみがみけしぞあやにきほしき

にひ衾まゆとは、くはゝだび〳〵こくものにてあるに、はじめてきたるくはにてかひたるこのまゆなり。それはことによきものにてあれば、それにてありたるきぬもあれど、なほきみがみけしぞきほしきとよめり。みけしは御ぞといふ也。つくばねは峯をもいふ。又木のあまたおひたるところをも云ふ。古今にも、

つくばねのこのもかのもにかげはあれどきみがみかげにますかげぞなき

とよめり。このもかのもとはこなたかなたと云ふ也。すべてあたらしきものをばにひといふ。此集には新とかきてよめり。日本紀にも新殿とかきてにひなびのみやとよめり。集云、

わかくさのにひたまくらをまきそめてよをやくだてむにくからなくに

わかくさとは妻をいふ也。又云、

にほどりのかつしかわせをにくすともそのかなしきなとにたてめやは

これもにひとりといふ也。五音字にてかよはしてよめり。田舎には田つくるとき、やとひたる人々を集めてこのはつかりのいねにてにへをして饗ずる也。その日はかどをさしてさはりのいでこぬさきに、くひのゝしる也。この時にくる人をばうちへもいれねども、きみきたらばとにたてむやはとよめる也。かつしかとは所の名にや。

十二　なつそひくうながみがたのおきつすに鳥はすだけどきみはおともせず

夏そひく、集には夏麻夏素などかけり。夏のを也。麻をば春夏秋などかる、春の麻をば春そといふ。夏のをばなつそと云ふ。又夏はぎのをとも云ふ。夏そひきとよみてはかならずふとつゞけたり。それは麻のおひたる所をばふと云ふなり。あさふなど云ふのもじをとらむとてなつそひくとはいふ也。集にも、

なつそひくうなびをさしてとぶとりのいたらむとぞよあがしたはへし

又すだくとは啼くと云ふ事也。

問云、をゝば苅るものにてこそあるにひくとよめる、いかに。又すだくとは集まると云ふ事にはあらぬにや。

答云、麻をばかりて後にうはかはをとりすつるものにてあるをひくと云ふ也。又麻をはねながらひくべし。古歌にもさくらあさのなふのしたぐさとよめり。をのはたけとはふといふ、つねの事也。さくらあさとはさくらのいろしたるあさのある也。すだくとは一説にはいでいるとこそまうすめれ。後拾遺歌云、

すだきけむむかしの人もなきやどにたゞかげするは秋の夜の月

十三　ものゝふのやそうぢがはのあじろ木にいさよふなみのゆくへしらずも

ものゝふとはたけきものといへどもたゞをとこをなべていふにこそ。やそうぢがはとは人の姓はやそあるなり。さればやそうぢといふ。うぢがはと云はむとてやそとはつゞくる也。やそうぢ人など云ふも八十氏の人也。

十四　はつはるのはつねのけふのたまはゝき手にとるからにゆらぐたまのを

これはゐなかにこがすひるものは、正月はつねの日菁といふくさをはゝきにしてこやをはく也。いはひてすることなれば是をほめてたまはゝきとはいふ也。是をばいはひのものにして、年のはじめには人もまづとるものにてあれば、手にとるからにいのちなむのぶるとよめり。ゆらぐとはしばしと云ふ事也。しばしとはとゞまる心也。とゞまるはのぶる也。たまのをとはいのちを云ふ。たましひのをと云ふ也。又物をほめてたまといふ事あり。たまかづら、たまかつま、たまぎぬ、たまもなどのたぐひ也。

十五　こゝろをしふかうのさとにおきたらばはこやのやまを見まくちかけむ

ふかうは莊子文云、無何有之郷也。はこやは藐姑射山也。或物云、共に仙人の住所也。堯遁二帝位一居二姑射一、これによそへておりゐのみかどをば射山とは申す也。

十六　あまのはらふりさけ見ればしらまゆみはりてかけたりよみちはよけむ

しらまゆみとはかたわれ月をいふ也。ふりさけとはふりあふのぎの心也。集には振放とかけり。月をばかつらをともいふ。月人をとこともいふ。月人ともいふ。月よみともいふ。つきよみの神は天照大神のおとうと月神也。天神大神宮は日神也。ひるめのかみとも申す。又月をばひさかたといふ。それは故あるべし。或物云、背皇后とたはぶれしたまひけるに、御ひざのはかまよりいでたりけるが月ににたりけるよりいふ也。そらをもいふは月もそらにあるものなればかよはしていふにや。但、そらをひさかたといへば、ひさかたの月とつゞくるはそらの月といふにこそはべるめれ。

十七　ならやまのこのてがしはのふたおもてとにもかくにもねぢけ人かな

この歌、或物には女郎花の異名なりと云ひたれども、いかゞ侍らむ。此集の詞には、謗二佐人一歌といへり。ことばも歌の心もをみなへしと見えず。集云、

ちばのぬのこのてがしはのふゝまれどあやにかなしみおきてかたぎぬ

これもかしはのなとぞ見え侍る。

十八　しながどりゐなのをゆけばありまやまゆふぎりたちぬともはなくして

是はよのふる事也。雄略天皇かの野にてかりし給ひしに、しろきかのしゝをひとつとりて、ゐのしゝなどはなかりければ、かのしゝをしながどりゐなのと云ふ。白鹿をとりて猪はなきのと云ふ也。

十九　わぎもこがかさのかりてのわざみのにわれはいりぬといもにつげこせ

わざみのは野の名也。わといふ字をとらむとてかりてとはいふ也。かりてとは笠のをつくるものなり。それをばかさのつらにあるわにつくる也。さればかさのかりての輪といへる也。かさといはむとてわぎもことはおけり。

二十　にはにたつあさでかりほししきしのぶあづまをんなをわすれたまふな

これは宇合大夫遷任して京にのぼる時、常陸國の女のおくれる也。あさでとは麻をいふ也。又にはたちのあさでともあり。集云、

にはにたつあさでこぶすまこよひだにつまよしこさねあさでこぶすま

これもあさのふすま也。

二十一　やまのはにあぢむらこまはあるなれどわれはさむしもきみにしあはねば

或物には、あぢむらといふとりのやうに、おほくむれたるうまをいふ也と侍れど心得ず。さてはいかにやまのはにとはよむべきぞ。これは白駒のかげをいふとこそ申すめれ。ひのかげは山のはにあれどいもとねゝばさむしとよめるにこそ。

二十二　あさもよひきのかはゆすりゆくみづのいつさやむさやいるさやむさや

この歌おぼつかなきを、或物にはあさもよひとはつとめてものくふとき也と侍り。又女のゆみになりてのちにはしろきとりになりてよめる歌也などあれど、させる證文も見えず。又この歌のこゝろにもかなはず。ふるき物にはあさもよひとは木をいふ也とかけり。それはさもありけむ。きのかはゝところの名也。木といはむとてあさもよひとはおけるにこそ。古歌にも、

あさもよひきのせきもりがたづかゆみゆるすときなくまづゐめるきみ

これもきといはむとてよめりと見えたり。女のゆみになれること、ふるくもその心よめる歌見えず。おぼつかなし。たゞし、曾丹歌云、

まくらなるをぶちのまゆみ見るときはいもがてかせばいとゞこひしき

これもかのこゝろにやあらむと見ゆる。をぶちとはみちのくにゝあるところ也。但、或人云、これはまくらなるおちのまゆがき見るときぞとよむべし。まゆみはひがごと也と申す也。何れにつくべしともおぼえず。この義にてはまゆがきとはまゆつくりふでなり。それがおちてあるを見るときぞいとゞいもはおもひいでらるゝとよめり。かくてをかしき心なり。

〔裏書、或書曰、天平勝寶五年春二月於二左大臣橘卿之東家一宴二饗大夫等一時、主人大臣問二古歌一云、

安佐母與比紀能勢伎母利家多豆加弓由流須等伎奈久安我弊流伎美

即歌領云、安佐母與比紀、其情奈何者、式部卿石川卿說云、安佐母與比紀、所二以然一之者、古俗語併朝炊レ飯謂二阿佐母與比紀一歟也。〕

二十三　うつせみのひとめをしげみあはずしてとしをしふればいけりともなし

うつせみとは蟬のもぬけたるから也。みもなきものをばかくいふ也。うつせ貝などいふもみもなきかひ也。うつせみ

の人めとは、もぬけてからをばおきてゆきさるものなれば、人もしかあればはかなきものによそへて人といはむとて、うつせみとはおくなり。集には空蟬とかけり。

問云、さてはいきたるせみをばうつせみとはよむまじきにや。

答云、おほくよめり。或説には、文に打ㇾ磬蟬と云ふ事あり。磬をうつごとくなくゆゑなり。いきたるをうつせみとよむはその義也。きゝは同じけれどこゝろは異なりと申せども、あまりの儀にや。いきたるせみをむなしとよめる歌おほかり。後撰云、

打はへてねをなきくらすうつせみのむなしきこひもわれはするかな

これはいきたるをむなしとよめり。同集云、

つねもなきなつの草ばにおく露をいのちとたのむせみのはかなさ

かやうにもよめるは、たゞあだなるものなれば、かよはしてよむにこそ。

二十四　しきたへのころもでかれてわれまつとあらむ子どもはおもかげに見む

しきたへといひてはまくらとこそよむに此歌こゝろえず。もしもひがごとにやとおもへど、此集に眞名にたしかにかきたるはいかに。

答云、しきたへはかならずまくらにあらず。たゞぬるところのものをばしきたへといふ。しくといふ心にや。しきたへのむしろなどもよめり。集云、

おきていなばいもこひむかもしきたへのくろがみしきてながきこのよを

などよめり。あらたまといふはとしとしりたれども、集に云、

秋はぎのしたばもみづるあらたまの月のへゆけばかぜはやきかも

又云、

あらたまのすどか竹がきあみめよりもいもし見えずばわれこひめやも

かやうによめり。たゞあらたまるといふこゝろなり。このかきもあたらしきかきといへるにこそ。すどとは寸戸とぞかきたる。

二十五　おほなむぢすくなみかみのつくりたるいもせのやまを見ればしよしも

これは神ふたりの名なり。大己貴神はすさのをの、國つ神のむすめにうませ給へる子也。少彦名神は高皇產靈尊の子也。とこよの國をのがれてともに心をひとつにして天下をいとなみて、あをひとくさけだものゝために病をいやす方をさだめ、とりけだものをはらひ、はむ蟲のわざはひをまじなひやむるの法をさだめて、百姓いまに恩賴をかぶる。このゆゑにかくよめり。この大なむぢの神は大和國城上郡大三輪神これ也。日本紀に見えたり。古今云、

我いほはみわの山もとこひしくばとぶらひきませ杉たてるかど

とふ歌はこの明神の歌となむ申しつたへたる。みわの山をたづぬ、又杉をしるしなどよむことはこの歌よりはじまれるにや。或人云、このみわの明神は社もなくて、祭の日は茅のわをみつゝくりて岩の上におきてそれをまつる也。やしろのおはせぬあやしとて、里のものどもあつまりてつくりたりければ、からす百千いできたりてくひやぶり、ふみこぼちて、その木どもをばおの〳〵はへてゆきさりにけり。其後神のちかひとしりてつくらずとぞ。日吉明神はこの御神となむ申すめる。此神たちの事、古語拾遺に見えたり。但、山をつくれる事見えぬをかくよめる、おぼつかなし。日本紀には伊弉諾のみこと伊弉册のみことあまくだりましまして、みとのまぐはひして夫婦となりて、くにつちをうむ。産のときにいたりてまづ淡路の島をもちてえなとす。大日本豐秋津洲次第に諸國山川海をうむ。草木をうむ。次に日神月神をうむ。つぎに蛭子をうむ。三歳まで足たゝず。かるがゆゑに天石橡樟船にのせて順風にはなちす

つ。次に素盞烏尊をうめるよし見えたり。

問云、このみとのまぐはひはいかなる事ぞ。

答云、日本紀には欲共とかてみとのまぐはひとよめば、文字にあらは也。男女したしくなること也。或本には爲二夫婦一ともかけり。古歌云、

きかばやと人づてならぬことのはをみとのまぐはひまでもおもはず

二十六　ひさかたのあまのさぐめがいしぶねをとめしたかつはあせにけるかな

日本紀云、このすめらのみこ、きしみのみこと、神武天皇なり。年四十五なる時のたまはく、わがあまつみおやたゞしき道をおこなひて、この西のほとりをしろしめす。其後はるかなる國はなほみうつくしみにもうたはぬが如くして、むら〳〵のきみもあひきしろへり。又鹽土老翁のいひしは、これより東にあまのいはふねにのりてとびくだれるものあり。よき國ありと。われそこにはじめてみやづくりしてあまのひつぎをひろめむ。これあめのしたのもなかなるべし。みこたちこたへのたまはく、ことわりなり。そのとしすめらいくさをひきゐて、ひんがしをうち給へり。又このすめらみことといでまして、をかにのぼりてのたまはく、此くにのすがたはなほ蜻蛉がとなめせるがごとくもあるかなと。これよりはじめて秋津洲の名ありといへり。あきつは蟲の名也。かげろふにや。天磐船にのりたりしものは、河内國に磐船明神とておはす。歌のおこりは、このことこそ侍めれ。日本紀竟宴にこの心をよめる歌にも、

とびかけるあまのいは船たづねてぞあきつしまにはみやはじめせし

と侍り。又日本紀云、大己貴大神これをなづけて玉がきのゆつ國と云ふ。儀速日命の天磐船にのりて大空にめぐるにいたるにおよびて、この國を見てあまくだります。かるがゆゑに是をそらにみつ日の本國となづく。又船ならねどうきゞにものる事あり。昔張騫といひしものは宣旨にてあまのがはのみなかみたづねしには、うき木にのりき。さてかへりまゐりけるに、世中かはりにけりと云ふ事あり。古歌に云、

あまの川うきゞにのれるわれなれやありしにもあらず世はなりにけり

これはむかし采女なりけるものをみかどのめしけるに、やまひして里にひさしくありてまゐりたりけるに、さき〳〵のやうに御氣色の見えざりければよめる歌也。かの張騫が事をおもひてよめるなり。

二十七　さきもりのほりえこぎいづるいつてふねかぢとるまなくこひはしげゝむ

船こぐものをばいく手と云ふ也。かた〳〵に一人づゝあはせて二人をばひとてと云ふ也。いつ手船は十人してこぐ船也。ふねにはあまたの名あり。あけのそほ舟、あからをぶね、あしはやを舟、まつらぶね、これはつくしにある松浦と云ふところのふねなり。

二十八　やかたをのましろのたかをやどにすゑかきなで見つゝかはくれよしも

やかたをとは尾のふの矢の羽のやうにさがりふにきりたるたかなり。巣には矢形尾とかけり。鷹にはたがへると云ふ事あり。わが手にかへりゐるを云ふ也などかきたるものも侍れど、心えず。たがへるとは、わが手にてかへりたるといふにこそ。とやかへりのたかを申すべきにや。五音の字なればかよはしていふとぞきこゆる。又とかへると云ふ事あり。それはこのとやかへりをいふ事と思ひ侍るに、

後撰云、

わするとはうらみざらなむはしたかのとかへる山のしひはもみぢず

この歌にては、山にてかへりたるをもとかへるといふときこえたり。おぼつかなし。はしたかのとかへる山と云ふはふかき心也。深山にすむ也。

二十九　からすてふおほをそどりの心もてうつし人とはなになのるらむ

或物には、伊勢の國の郡司の家に子うみたりける鳥、をとこがらすのしにゝければこと鳥ををとこにして、子をあたためずしてくさらかしてけり。さればからすをばうきものにしてかくよめりと侍り。たゞしさせる證文も見えず。鳥をば文には、貪欲又烏合之輩などいひて、鳥のなかにこゝろ貪欲に非常なるものにいひならはしたれば、かくよめるにや。うつし人とはまさしき人といふ也。集には現人とかけり。

三十　神さびてよるべにたまるあまみづのみくさゐるまでいもを見ぬかな

これは神社にかめをおきて、それなる水を、なき事などおひたるものは神水とてこれをのむ也。たゞすの杜などに今もあり。和泉式部歌にも、

神かけてきみはあらがふたれかさはよるべにたまるみづといひけむ

又源氏のあふひのうへの歌云、

さもこそはよるべの水にかげたえめかけしあふひをわするべしやは

これらもかのかめのみづをよめる也。

三十一　いなむしろかはそひやなぎ水ゆけばなびきおきふしそのねはたえず

これはむかしみかどの末なりける人の、あやしのものになりてゐなかにまどひゆけりけるが、つりしけるに、かはつらなるやなぎの水になびくを見てよめる歌也。柳のするゐはとかくなれど根はうごかぬを、我身によせてとかくまどへどわがもとはたえじとよめる也。いなむしろとはたびのこゝろ也。かくまどひあるけばたびとはよめる也とぞ人は申せども、かはのそこにみじかきくさのむしろをしきたるやうにおひたるを、いなむしろとはいふなり。このやなぎのするゐの水にひたるがかのいなむしろに似たればかくよめるとぞ見ゆる。たびの心よりはいますこしたよりありてもきこゆ。このくさをいなむしろといふ事は稲のいでとゝのほりたるは、むしろをしけるに似たればいなむしろと云ふ。

それに又このくさのにたればかよはして云ふ也。たゞしこれをばいなむしろと云ふ説も侍り。歌のひがゞきにや。

問云、たびをいなむしろと云ふ事させる證あるにや。

答云、たびをも云ふ也。田舎などにやどれるものはいねなどゝりおきたるをひきしきなどしてぬる心也。ゐなかをいなしきといふもその心也。集云、

たまぼこのみちゆきつかれいなむしろしきても君を見むよしもがな

ちかくの人の歌にも、たびにかへすはいなむしろとやなどよめり。このいなむしろの歌、日本紀にあり。仁賢天皇の御歌也。この天皇は履中天皇の孫、市邊押羽皇子の子なり。父の皇子雄略天皇にころされにければ、兄弟あひぐして田舎にまどひゆきてあやしのものにつかはれ給ひけるに、雄略天皇の子に清寧天皇と申しけるみかどの御時、太子にたつべき人なくて皇胤もとめらるゝときゝて、皇胤なるよし人にしられむとてよみ給へる歌也。さて京にのぼりて仁賢太子にたつ。兄顯宗は皇子にてあるに、清寧うせ申し候給にければ、太子兄顯宗に位をゆづりてつきたまはず。兄太子のすゝめにしたがひて遂に位につきてほどなくうせ給ひにけり。そのゝち仁賢は位につきたまへり。顯宗天皇久居二邊裔一、ことごとく百姓のうれへをしりて、惠をほどこせるよし紀に見えたり。

三十二　にしきゞはちづかになりぬいまこそは人にしられぬねやのうち見め

或物に云、えびすは女をよばふとては、一尺許りなる木をにしきのやうにいろどりて女のかどにたつれば、うけひく女はこれをとりいる。あはじと思ふはとりいれねば、なほしひて思ふには、三年をかぎりて日ごとにひとつをたつ。千束になりぬればこゝろざしありと見てあひぬ。なほそれにもあはぬ女をば思ひたえぬといへり。にしきのやうにいろどりたればにしきゞと云ふ。

問云、ひとすぢある木をつかといはむことおぼつかなし。

答云、このうたがひある事也。或説には、そめ物するにはひにやく木をものゝ色にあふによりて、いはひてそのきとりてたつる也。いろ〳〵にあふものなればにしきぐと云ふ。又にしきの糸をも是にてそむればさもいひてむ。かくてぞ束といふ事はかなへり。たきぐをいろどれるなりとあれば、千束までいろどらむことはいかぐ。能因歌云、

にしきぐは立ちながらこそくちにけれけふのほそぬのむねあはじとや

これはいろどりたる木ともおもうてむ。けふのほそぬのはみちのくにのけふのこほりよりいでたる布也。はたばりせばきぬのなればむねあはずとは云ふ也。

三十三　はしたかの野もりのかぐみえてしがなおもひおもはずよそながら見む

野守鏡とは野なる水を云ふ也。むかし雄略天皇狩して、御たかのうせにければ、野守を召してたづねてまゐらせよと仰せられけるに、かしこまりて地をまもらへて、御たかのありかを申しければ、地をまぼりてはいかでかくは申すぞとゝはれければ、前なる山水をさしてこの水にうつりて見え侍りと申しければ、それよりいひはじめたる也。或説には徐君が鏡なりとも申す。そのかぐみは人のこゝろのうちをてらすかぐみなり。但、それにてははしたかの野守のかがみと云ふべき故なし。

三十四　ふかみぐさにはにしげれる花のかなしへよきてへようけもちの神

ふかみぐさはかきつばたなり。いへよとは或物に興じ見ること也。うけもちの神はいへの神也。和名には保食神とかけり。よろづの物につかさどれる神おはす。はもりの神は樹の神なり。むすぶの神はうぶの神也。産霊とかけり。又あらひと神といふは萬葉には現人神とかけり。

三十五　なゝわだにわがれるたまのをゝぬきてありどほしとはしらずやあるらむ

此歌は和泉國にいますありどほしの明神にまうでたりける人に、よるになりてかの明神のあらはれてよみ給へりけ

となむまうす。この神の本體は、むかしのみかど四十より老たる人をば、とほきくにへおひつかはし、あるはころしなどうしなはれけるに、老たるおやもたりける人の、孝のこゝろふかくして家の内を深くほりて、そこにやをたてゝこのおやをかくしおきて、日ごとにいたはりてをがみつゝすぐるあひだに、ならびの國のみかど、このくにをうちとらむの心ありて、はかりごとをうかぐはむとて、白木のかみしもおなじさまにけづれるを、もとするゑしるしつけてたべとてつかはされけり。みかど人をあつめてとはれけれどもさらにしる人なし。このをとこつちのそこのおやのもとにいたりてこのことをかたるに、いふやう、その木を早き河にうかべむに、すゑはしもになりなむとをしふ。そのよしを奏しければ、そのまゝにしてしるしつかはしける。さりければ、また同じさまなるくちなはをふたつおくりて、これにめをとこしるすべきよしをいひければ、さきの如く、このをとこ親にとふに、くちなはふたつをならべて、其尾のかたにすはえをさしあてば、めくちなはは尾をはたらかしてむといへば、そのよし申すにしかなり。又なゝわだの玉のわがれる穴にをゝぬきてといひおくれり。是をまたとふに、蟻のこしにいとをつけて、玉のかたあなに蜜をぬりて、ぬらぬかたよりありをいれよといふ。そのまゝにしたるにあり蜜のかをかぎてとほりぬれば、いとしたがひてとほされぬ。かくかへしおくれるに、かのくにのみかどおそれおぢて、この國をえうちとらずなりにけり。みかどこの事をあやしみてたづね給ふに、しか〳〵と申しければ、これより老たるものをすつる事とゞまりて、人みなよろこびをなしけり。このおやと云ふはかの明神なり。さてかくよみたまへるなり。

三十六　夜やさむき衣やうすきかさゝぎのゆきあひのまよりしもやおくらむ

此歌、歌論義と云ふものには、かさゝぎとはかきあやまてる也。かたそぎのゆきあはぬまよりとよむべきなり。是は住吉明神のやしろのあれたるよしをみかどに申し給ふとて御夢に見ゆる歌也とかけり。先達のことなうたがふは心得ぬ事なれど、いかぐときこゆ。これはかさゝぎのはしをよめるにこそ。これは書に見えたる事なり。あまの河にかさ

さぎといふ鳥の、はねをちがへてならびつらなりて橋となることのある也。これをかさゝぎのよりばのはしなどもいへり。又詩にも烏鵲橋連ㇾ浪往來すとつくれり。又忠峯歌云、

かさゝぎのわたせるはしのしものうへよはにふみわけことさらにこそ

又曾丹歌にも、

かさゝぎのちがふるはしのまどほにてへだつるなかにしもやおくらむ

とあり。かのはしそらにあるものなれば、そのはざまよりもるよしによめる也。それを男女のなかにそへてよめり。さればかさゝぎのゆきあひのまよりしもやおくらむとある、あやまりとも見えず。又かさゝぎならぬ鳥にもよめり。萬葉集云、

そらをとぶかりのつばさのおほひばのいつこもりてかしものふるらむ

此歌論議は是ならず。あやまりおほかる文也。

以下六首は伊勢物語歌也。

三十七　いでゝいなばかぎりなるべきともしけちとしへなぬかとなく聲をきけ

此歌は、むかしあるみやばらのうせたまへりけるを、をさめたてまつる夜、もの見る車に、源至がほたるをとりていれたりけるを、車なりける人このほたるのともすにやあらむ、ともしけちなむとすめるとてよめる也。ほたるをたましひになして、これいでゝいなば限りなるべしといへる也。ともしけちとは經云、如ニ烟盡燈滅一といふ文あり。佛の滅し給ふをいふ也。これによせて人のしぬるをもともしびのきゆるによそへてかくよめり。としへなぬかといふ、としをへずなりぬるかなしさをなきあへる心也。べみとはべしといふことば也。

三十八　山のみなうつりてけふにあふことは春のわかれをとふとなるべし

これは田村御時、女御比子のうせたまへりけるみわざを、安祥寺にてしけるに、人々のたてまつれるさゝげもの、山の如くつみおける、講の後、當行の大將人々をめしてけふのみわざを題にて春の心あらむ歌たてまつれとありければ馬頭なりけるおきなのよめるなり。佛の涅槃の時は日月星宿も度をうしなひ、鳥獸心なき木草山川にいたるまでなげきかなしべるけしき見えし也。さればけふのさゝげ物の山のごとくなるをかの日におもひよせて、山もかげをのぞむるは春のわかれなかなしぶにやとよめり。涅槃は二月十五日なればそれによせて春の別とよむ也。

三十九　わがやどのきつにはめなでくだかけのまだきになきてせなをやりける

きつとはきつねなり。かけとは鷄也。くだとは家をいふとぞものしれりし人は申し侍りしかど、はじめに宿とよみて又家の鳥といはむことばいかゞ。もしくだはくづといへるにや。五音の字也。くづにはとりとよめるにやともきこゆ。

四十　もゝとせにひとゝせたらぬつくもがみ我をこふらしおもかげに見ゆ

これはとし老たる女をあひしれりけるに、久しくゆかざりければ、女こひしとやおもひけむ、をとこの家にいたりてかいまみけるを、をとこほのかに見てかくよみける也。もゝとせにひとゝせたらぬとは九十九と云ふ也。古き物語にうみかきのひとつありけるを、ものどものあらそひてとしたかゝらむものくはむといひけるに、九十九もといひて、くものくらへる事あり。それを思ひてくもといはむとて、もゝとせにひとゝせたらぬといへり。くもと云ふ文字につきてつくもがみとよせたり。古歌のならひ也。かの女のとしよれるものなれば、かくよめる也。このつくも神、つくまの神に侍めり。あるはちくまともいふ。これらは五音のもぢにてかよへる也。同物語云、

あふみなるつくまのまつりはやせなむつれなき人のなべのかず見む

これもかの神也。そのまつりには神のちかひとて、かの國の女、をとこしたる數につちなべをつくりてたてまつる也。

四十一　やましろの井手の玉水手にくみてたのみしかひもなき世なりけり

井手とは萬葉には井堤とかきたり。川などをせきたるをいふ也。但、この歌の心はそれにはあらず。やましろに、ならへゆく道に井手の水とてめでたき水のみちづらにあるなり。ゆきゝの人是を手にむすびつゝのむ。この水をほめて井手のたま水とはいふ也。たのみしとは手にてのむと云ふ也。それを人をたのむ心によせてよめるとぞみゆる。

四十二　みよしのゝたのむのかりもひたぶるにきみがかたにぞよるとなくなる

是は女をよばひけるに、ちゝはこと人にといふを、母なむこのをとこにとおもへりける。さて母のよめる歌也。かの女むさしの國みよしのゝさとにすみけり。たのむとは田のもといふ也。たのもは田のおもと云ふ也。むの字もの字は五音の文字にてかよはしていへる也。

問云、或人の釋に、たのむのかりとは東國の者は、かたよりにかりをして、むねと發起したる人にその日の鹿をばみなとらする事あり。その心也と侍るはいかに。

答云、今案也。さてはなくとよめるかなはず。かきあやまてるとも思ふべきに、萬葉歌云、

さかこえてあべのたのむにゐるたづのともしき君はあすさへもがな

とあれば、狩の義すべてかなはず。六帖にも雁部にこそいれて侍めれ。

後江相公歌云、

四十三　かぞいろはいかにあはれとおもふらむみとせになりぬあしたゝずして

是は日本紀竟宴の歌也。伊弉諾伊弉册尊らの蛭子の事也。三年までひるのやうにておきもねざりし也。かぞいろと云ふは、かぞは父也。いろは母也。ちかくの人の歌にかぞいろのとよめる、のゝ字心得ず。古歌云、

かぞいろはあはれと見らむつばめすらふたりは人にちぎらぬものを

とよめり。はの字ぐすまじくば此歌かぞいろもとぞよまゝし。つばめはつばくらめと云ふ鳥也。その鳥はをとりしぬれば又をとこもせずと云へり。但、おやをばたらちねとぞいへども、萬葉歌云、

おもへばぞわれてもつきのいでつらむこゝらたらちのさねのなかより

とあるは一字などはすてゝもよむにや。この歌はわれていづといはむとて月にそへたり。かたわれ月の心也。こゝらたらちのさねのなかよりとは、かばかりおやたちのさねたる中よりといへり。

〔萬葉集長歌にかぞいろもとよめる歌あり。はの字なくてあるべし。〕

又父をばたらちを、母をばたらちめとぞしりたれども、何れをもたらちねとよみ侍り。但、たらちねはすべて親の名なれば、父をも母をもいはむにとがなし。髪をばむばたまといひ、夜をばぬばたまといへども、又皆むばたまとよめり。たゞ黒きものをむばたまといへば、夜も黒き故にていふ也。夕暮をすみぞめと云ふもうすぐろなる故也。

博文歌云、

四十四　世中にきみなかりせばからすばにかけるほどにはなほきえなまし

是も同竟宴の歌也。敏達天皇の時、高麗の表、烏の羽にかきておくる。三日よむ人なし。王辰爾と云ふ人、からすのはをむしてふくさのきぬにておしければかけることうつりてよく見えける事也。

長能歌云、

四十五　しらかしのしらぬやまぢをそみかくたたかねのつゞきふみやならせる

そみかくたとは修行者をいふ也とぞ靜圓僧正は申しける。この人は小式部內侍の子也。

會丹歌云、

四十六　いとまなみかひなき身さへいそぐかなみたまのふゆとむべもいひけり

みたまのふゆと云ふは、なき人の恩德を報ずとて年のはてにはこれをまつる也。下人はみたま祭と申す。公家には荷

前祭と云ふ。書にも黄帝昇レ天みたまのふゆすとあり。頌とかきてよめり。日本紀には図頌とかきてよめり。

赤染歌云、

四十七　けふもまたうまのかひこそふきつなれひつじのあゆみちかづきぬらむ

是は法文にある事也。羊をかひてよくこえぬるをりはこれをころしてくふ也。ころさむとするところをひきわてゆくにしたがひてしなんずることのちかづくを、世中の人にたとくて羊のあゆみとは云くり。世中のほどなくすぐるたとくには、又ひまゆく駒と云ふ事あり。是も文にいくり。しろき馬くろき馬のおひつぎてゆくをものゝはざまより見るにたとくり。白駒は日也、黒駒は月なり。月日のすぐることかのうまのやうになむ程もなきと云ふ也。又月のねずみと云ふ事あり。それは樓炭經文也。世中のたとくに虎におはれてにぐるに、大きなる穴におちいりぬ。穴のなかはどにくさのわづかにあるにおちかゝりてとりすがりて見れば、そこにわにといふものゝまちうけて、おちばくらはむとするあひだに、此草のねをしろきねずみくろきねずみかはるくはみきり、のぼらむとすれば、又おひつる虎あなの口にある也。そこなるわには地獄也。おひつる虎は此世にてつくれる業障也。しろきねずみは日也。くろきねずみは月也。月日のゆくこと、かのねずみの、たのある草をはみきるが如くに、ほどなきよし也。高光少將歌云、

たのむよか月のねずみのさわがまのくさばにかゝるつゆのいのちを

此歌は古歌也。

草のねに露のいのちのかゝるまを月のねずみのさわぐなるかな

近古人歌云、

四十八　ぬばたまのかさなることのかさなるはおもりのしるし今はあらじな

是はもろこしの人は女をうだがひて、ものくゆく時にはおもりと云ふ諺のごとく合歓してかひだにつくる也。なとこする時にこの血うするなり。さてかくとよめり。たゞむしのいろなどもよめり。

（但、このおもりのしるしは玄賓と云ふ文にはみそか事しつればおもすとこそ釋したれと申す人も侍れば歌どものひが事にや。）

又女のみそかごとするには、男のくつかさなると云ふ事のあれば、かくよめる也。かやうの事はさせる見えたることろなけれども、ふるくいひつたへたるにつきて皆よむこと也。人にこひらるゝ人はそでにすみつく、又こひすればひたひの髪しゞくともよめり。古歌云、

わぎもこがひたひのかみやしゞくらむあやしくそでにすみのつくかな

又人にこひらるゝ人はのれるうまつまづくともよめり。萬葉云、

いもがかど出入の川のせなはやみこまぞつまづく家こふらしも

又きぬかくしてぬればこひしき人ゆめにみゆるともよめり。

（追加、守宮事、玄賓云、以血塗臂女有和情洗之不落。又抱朴子云、おもりに百日の間水をくはせてその血をつけつれば、かの事せざるにはおちずといへり。此事の說は古歌の心にかなへり。若玄賓の失歟。義もかなはざるなり。和情あらば不レ落とあるは、和情なくばおつべきにこそ。さて年月わたるべからむ人々はつけがたし。ゆめゆめすべからずおのづからせもあえでやおるべきときこゆ。）

奥義抄下釋

古今歌言十六首

一　ひつ　　二　ゆきのうち　　三　をりければ

四　とぶひ　　五　春やとき　　六　まつのゆき

七　をちこち 付たづき
十　なげ
十　三　打はぶき
十　六　やよやまて
十　九　としのを
二十二　ほにあぐ
二十五　うゑてだに見じ
二十八　花見つゝ人まつ
三十一　つひにもみぢぬ
三十四　すがる
三十七　したのおび
四　十　あやめ
四十三　雲のはたて
四十六　ゆふ手もたゆく
四十九　ゆく水にかすかく
五十二　有明のつれなく
五十五　ほがら〳〵
五十八　かはとみながら

八　ありとやこゝに
十一　こじまのくま
十　四　袖の香
十　七　をりはへ
二　十　たがたまづさ
二十三　うらぶれ
二十六　やまとなでしこ
二十九　よるのにしき
三十二　千年の坂 付もゝさか
三十五　秋の時雨
三十八　うひ
四十一　白浪の跡なき
四十四　いはきりとほし
四十七　まゆねかき
五　十　うたかた
五十三　風にさきだつなみ
五十六　あびき
五十九　わがなもみなと

九　うぐひすのかさ
十　二　あはれてふ
十　五　ぬしさだまらぬ
十　八　よたゞ 付とゞろ
二十一　いなおほせどり
二十四　ひとりながむる
二十七　山路のきく
三　十　あまのながせる舟
三十三　いたづらに過る月日
三十六　ぬれぎぬきせて
三十九　いさゝめ
四十二　月に見ぬ人
四十五　あしがきまぢかき
四十八　ゆたのたゆた
五十一　あしのめもはる
五十四　あやなくて
五十七　ねずりのころも
六　十　ことなしふ

六十一　宇治のはし姫
六十四　しきしまのやまと
六十七　たまかづらはふき
七　十　まなづるのあしげ
七十三　いとなし
七十六　ちのなみだ
七十九　たまだれのこがめ
八十二　もとくだち
八十五　たちぬはぬきぬ
八十八　あなうのはな
九十一　ひな 付あまのたくなは
九十四　すがはらふしみ
九十七　まひさし
百　　またくこゝろ
百　三　出てゆかむ人をとゞめむ
百　六　そへにとて
百　九　まきもく 付みづがき
百十二　をぐろさき

六十二　いざよひ
六十五　かすゞ〳〵身をしる雨
六十八　くもりびのかげ
七十一　ゆふつけどり
七十四　ながれては
七十七　さきだゝぬくい
八　十　野中のしみづ
八十三　さらぬわかれ
八十六　しりにけむきゝても
八十九　いはほのなか
九十二　わくらは たまゆら
九十五　をのゝえ
九十八　人く〳〵
百　一　山田のそうづ
百　四　もろこしのよしのゝ山
百　七　やさし
百　十　みちのくはいづら
百十三　もがみ川

六十三　とは
六十六　おほぬさ
六十九　かげろふ
七十二　鳴の羽がき付しぢのはしがき
七十五　わたり川
七十八　めもはる
八十一　しづのをだまき
八十四　しば〳〵
八十七　いづくにか世をばいとはむ
九　十　木にもあらず
九十三　うきめをみつ
九十六　あしたづのひとり
九十九　しでの田長 付くっでいだきぬ
百　二　月のなき夜に
百　五　難波なるながらのはし
百　八　うめの花さきてののち
百十一　まがねふく
百十四　あだしごゝろ

百十五　めざし　百十六　かひがね
短歌　一　かくなは　二　えふの身　三　やちくさ
四　くもにほゆ　五　あざむき　六　をさ〳〵しく　七　不死薬
詞　八　めど　九　ひをりの日　十　あがた
人名　十一　寵　十二　衣通姫　付玉津島姫　十三　天神の孫　付おきつとり
十四　海童の女　付いろに
問答此中歌十六首　合百三十二首
古今

春上

一　袖ひぢてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらむ
東風解レ凍こゝろ也。ひづとはひたるといふ也。萬葉集には漬とかけり。つく、ひたる同心也。
問云、後撰歌に、
大ぞらに我袖ひづとあらなくにかなしく露のわきておくらむ
是はみづと云ふこゝろとこそきこえ侍れ。
答云、是うちぎゝはしかおぼゆれど、よくおもへばみづゝひたるもおなじ心也。物にひたるも水のこゝろ也。同集云、
むさしのは袖ひづばかりわけしかどわかむらさきはもとめわびにき
是はすべてみづ心にはかよはず見ゆめり。
二　雪のうちに春はきにけりうぐひすのこほれるなみだ今やとくらむ
ある物には年のうちと云ふこと也とはべれどもいかゞとおぼゆ。さらば古今に第二番にぞいるべき。四首までさがるべからず。たゞ雪などもまだきえぬ春はたちにけりとよめるとぞ見ゆる。詞にも年内の立春のよしもなし。
三　こゝろざしふかくそめてしをりければきえあへぬ雪の花と見ゆるか
是は居りければとよむべし。花をまつ心のふかくてゐたれば雪も花かとのみおどろかるゝ也。人まつ時はものもそよめけば人のくるかとおぼゆる心也。
四　春日野のとぶひの野もり出でゝ見よ今いくかありてわかなつみてむ
是はとぶ火の野守いでゝ見よとよむべし。此野をとぶひ野といふ事は、むかしは國々にはやくきかすべき事あれば、所々に大なる火を立てければ次第に見つぎて是を立ておき、遠き國にも一日のうちにしらせつる也。その野をまもるものをとぶ火の野守とはいふ也。このとぶ火はもろこしよりおこれること也。日本紀に見えたり。
五　春やとき花やおそきとき〳〵わかむ鶯だにもなかずもあるかな
或人鶯語と云ふ事あれば、それにつきて春のときか花のおそきかとゝはむと思ふに　鶯のなけかなとよめるなりといへども、思へば春はたちぬるに花の今までさかぬは春のときか、花のおそきか、鶯にことをきかむと思ふに、なかぬかなとよめるとぞおぼえはべる。
問云、唯今まではうぐひすなかずときこえたれば、春のときはしりぬらむは。
答云、花の木いづくともわかねばさかずと見えぬ。鶯は爰に唯今なかずともほかにはなきもやすらむ。しからばかくはいへるなり。
六　深山には松の雪だにきえなくにみやこは野べにわかなつみけり
深山には木にふりかゝりたる雪だにまだ消えぬに都は野べにわかなつむとはよめり。まつとさせることはうちぎゝの

よき也。木なる雪はとくきゆるものにてあればかくよめる也。

七　をちこちのたづきもしらぬ山中におぼつかなくもよぶこ鳥かな

たづきとは萬葉集には便とかきてよめり。たよりたきことをたづきなしなどいふ、此心なり。をちこちは萬葉には遠近とかけり。をちと云ふは外也。こちと云ふは裏なり。

問云、貫之歌云、

きのふよりをちをばしらず百とせの春のはじめはけふにぞありける

とよめるは、をちは昔とこそきこえたれ。或物にもさぞ申したるはいかに。

答云、きのふより外の日をばしらずとよめる也。此歌にはかられてあしく釋してはべるにこそ。萬葉集にもたまくしげあけてをちよりすべなかるべしとよめり。

八　なりつれば袖こそにほく梅のはなありとやこゝにうぐひすのなく

梅の花はなりつれば我袖のかうばしきを梅の花こゝにありとやうぐひすの友になくらむ。梅もなき所ぞとよめり。

九　鶯のかさにぬふてふ梅のはなをりてかざゝむ老かくるやと

是は催馬樂に、あをやぎをかたいとによりてうぐひすのぬふてふかさは梅の花がさと云ふ歌を本にてよめる也。此歌は此集の第二十卷にもあり。よめる心はとりのこしげきえだにこづたひありくをばぬふと云ふ也。さればぬふといふことにつきて、かさをぬふものなれば、柳の糸して梅の花がさをぬはせたる也。

春　下

十　いざけふは春の山べにまどひなむくれなばなげのはなのかげかは

なげとはなしと云ふことば也。くれなば花のかげやはなき。それにもねなむ。今日はゞ山べにまどひありきなむと

いくり。古歌云、

ひねもすにゆきはてずともくいもなしなげのもみぢのよのひかりかも

是もなきもみぢのひかりかはとよめり。後撰云、

ことのはゝなげなるものといひしかどおもはぬためは君もしるらむ

これもことのはゝなきすてものなれど思はぬためはいはずとよめり。曾丹歌云、

あればありとなげらのよそに見し人を秋風ふけばそれぞこひしき

是もよそ物に思ひし人なと云くり。なげのなさけなどいふもこのこゝろなり。

十一　いまもかもさきにほふらむたちばなのこじまのくまのやまぶきの花

橘の小島のくまは所の名也。萬葉には橘島又小島又島のくまなどよめり。所は皇子尊の在所也。歌枕には河内とあり。

夏

十二　あはれてふことなきまたにやらじとや春におくれてひとりきくらむ

或物云、めでたしといふことなきまたにやらじ、我ひとりにてあらむとこそ花みなちりての後、この木一木はさきたるにやとよめる也とぞ。

十三　五月まつ山郭公うちはぶき今もなかなむこぞのふる聲

打はぶきとはうちはぶりと云ふ也。はぶるとは羽をたゝくなり。鳥はなく時は何れの鳥もひろは羽を打ちてなく也。萬葉にも打はぶり鳥は鳴どもなどよめり。

十四　五月まつはなたちばなのかをかげばむかしの人の袖の香ぞする

橘を昔の人のそでの香によそふることは、間守と云ふ者の、とこよの國より袖につゝみてきたりしかばいふなりと申す人もはべり。この歌は伊勢物語に有り。むかし女ありけり。人につきて人の國へいにけり。本のをとこ宇佐のつかひにていにけるに、或國の壯氏の官人のめにてなむあるときゝて、女あるじにかはらけとらせよ。さらずはのまじといひければ、かはらけとりていだしたりけるに、さかなゝりける橘をとりてよめるなり。これよりむかしにはよそふるとぞ見えたる。されば萬葉などにはさもよまず。

十五　ほとゝぎすはつ聲きけばあぢきなくぬしさだまらぬこひせらるはた

郭公のめづらしくなく聲をきけば、これを人にきかせばやとたれとはなけれど、人のまたれこひしき心也。はたとは萬葉には將ともあり、又當ともかけり。同じ心なり。まさにといふ事なり。又郭公の聲きけばなにとなくものがなしく心のすみやきて、人などの戀しきにや。古歌にはみな戀まさる、なげきまさるなどよめり。又郭公としもなし。よぶことりにも、ちどりにもよめり。萬集には、

やまぶきをやどにうゑつゝ見ることは思ひはやまずこひこそまされ

とあり。なにもめでたきものにつけては人の思ひいでらるゝにや。

十六　やよやまて山ほとゝぎすことずてむわれ世中にすみわびぬとよ

やよやとはしでの山ぞなど釋したる人もはべれど、げにもときこえず。やよやとはやしばしまてといふ心也。山よりくる鳥なればうき世の中に住みわびぬ。山へいりなむなどことづけむといふ心にこそ。

問云、ほとゝぎすはしでの山をすぐる鳥なれば、人などにおくれて世中なげかしく思ひける時よめる歌にや。我世中にすみわびにたりといへよとよめるにこそ。集にも、

なき人のやどにかよはゞほとゝぎすかけてねにのみなくとつげなむ

などはべり。又

しでの山こえてきつらむほとゝぎす戀しき人のうへかたらなむ

などもよみたり。萬葉には、

やまとにはなきてきつらむほとゝぎすながなくごとに人ぞおもほゆ

かやうによめる心にや。

答云、是義も故なきにあらず。題しらぬ歌にて侍るぞあやしき。但、古集共には故ある歌もことはからぬ多かり。

十七　あし引の山ほとゝぎすをりはへてたれかまさるとねをのみぞなく

或物には打はへてといふこと也。うちはへては打たへと云ふなりとはべり。

十八　五月雨のそらもとゞろにほとゝぎすなにをうしとかよたゞなくらむ

天も動きて鳴と云る也。萬葉には動とかけり。又響ともあり。響く動く同じ心也。よたゞとは或物には夜一夜といふ也とあれど、げにとも聞えず。よたゞは夜騒ぎなくといふ心にや。人の夜ののゝしりをばよただらぎなど申めるは。

秋　上

十九　七夕にかしつるいとの打はへてとしのをながく戀ひやわたらむ

としのをは萬葉には年緒とかけり。たゞ年といふこと也。緒は詞字也。よろづのことにあり。四緒、思緒、別緒、愁緒これらにおなじこと也。

二十　秋風に初かりがねぞきこゆなるたがたまづさをかけてきつらむ

これは蘇武が胡國にとらはれたりしに鴈のあしにふみをつけて本國におこせたりと云ふ事のある也。かりをばつかひともよめり。それも此ゆゑなり。萬葉集に云、

はる草をうまくひ山をこえくればかりのつかひはやどりすぐなり
うまくひ山といはむとて春草をとはおける也。

二十一　我かどにいなおほせどりのなくなべにけさふく風にかりはきにけり
いなおほせどり古歌にさま〴〵によめり。或は秋田にむれはむと有り。或は秋たちてくるよしあり。俊子歌には、
さよふけていなおほせどりの鳴きけるをきみがたゝくとおもひけるかな
とあり。又古歌云、
逢事をいなおほせどりのをしへずば人をこひぢにまどはましやは
とあり。是につけてにはたゝきと申す人もあれども、本草和名兼名苑などいふ文こそは、よろづの物の異名、かたちをさへあかしたるに、見えたることもなし。又順が和名、にはたゝきをも鷸鴣又鶺鴒などかきて、注には日本私記云、とつぎをしへ鳥とかけり。又別に稲負鳥と書きて、注にそのよみ　いなおほせどりとかきて、萬葉集を引文にいだしたれば、ことゞりと見えたり。順しらざらむやは。たゞしかの古歌にてはにはたゝきとぞ見えはべれど、順がわきまへざらむことを今の世にさだめがたし。

二十二　秋かぜにこゑをほにあげてくる舟はあまのとわたるかりにぞありける
鴈檣といふことあり。かりのなくこゑは檣をおすに似たりければ、舟によそへて詩にも歌にもいふなり。秋鴈似二牧人一といふ詩にも、風檣瀟湘浪上舟とつくれり。ほにあぐとは聲をあらはにいだす心也。たかく鳴く也。何事にも現形するをばほにいづといへり。

二十三　秋はぎにうらぶれをれば足引の山したとよみしかのなくらむ
此歌は普通本には秋かぜにこそはべる、うらぶれは物をおもひなづみたる心也。萬葉には煩とかきてなづむとよめり。同集云、
雁もきぬはぎもさきぬとさをしかのなくなる聲もうらぶれにけり
山ちさのしら露おもみうらぶれてこゝろにふかめわが戀やまず
露にしをれてなづみたるなり。

二十四　ひとりのみながむるよりは女郎花わがすむやどにうゑて見ましを
是は唯ひとりわが詠居たるよりも、をみなへしをそやどにうゑて見るべかりけるとよめり。女郎花は女によそふるものなれば、ひとりずみするよりはとよめるなり。

二十五　今よりはうゑてだに見じ花すゝきほに出づる秋はわびしかりけり
秋は四時の中にはらわたをたち、心をいたまする時なるに、すゝきのほにいでたるに秋のけしきのあらはれて見ゆるなむものがなしき。今よりはうゑて見じとよめるなり。秋のけしきの現形するを薄のほにいづるによそへたり。
問云、うゑてだに見じといへる、だにの字心えず。是は植ゑてだに見じとにこそ。今よりは野山ならむすゝきをだに見じ、いはんやことに植ゑて見るをばせじ。秋になれば見るもくるしとよめるにや。
答云、是よき義なれども餘にやはべらむ。古歌にはさのみぞ心得ぬもじはおきはべるかし。

二十六　われのみやあはれと思はむきり〴〵すなく夕暮のやまとなでしこ
鍾愛抽二衆草一之故、撫子とはいふ。さればわれのみやあはれと思はむ。たれとてかあはれと見ざらむとよめるなり。

秋　下

二十七　ぬれてほす山路の菊の露のまにいつかちとせをわれはへにけむ
是は人の仙宮にいりて、ときのほどゝ思ひけるに千とせをへたることのあるをよめる也。仙宮には菊のおほかればか

くよめり。

二十八　花見つゝ人まつ宵はしろたへの袖かとのみぞあやまたれける

百詠云、今日黄花、晩無復白衣来、これをよめり。陶潜九月九日に酒もなくて、たゞ籬下に菊をつみてをるに、王弘酒を送る。使白衣なりし事也。陶潜は詩をこのみ酒をたしなみて菊を愛し、又門に五木柳をうゑて隠居たりしもの也。五柳先生ともいふ。

二十九　見る人もなくてちりぬるおく山の紅葉はよるのにしきなりけり

ことわざに夜のにしきといふことをよめるなり。百詠注云、買臣身進のゝち本國にかくらぬはにしきをきて夜行くがごときなりとか。大臣までなれるなり。

三十　しら浪に秋の木の葉のうかべるをあまのながせる舟かとぞ見る

船は木の葉の水にうきたるを見て智慧してつくり出たるなり。さればかくよめり。又百詠に、仙人は以葉爲船といふ文あり。いづれを思ひてもよみてむ。

冬

三十一　雪ふりてとしの暮ぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけり

歳寒知松柏と云ふ文のある也。夏はいづれともなきに冬に成て萬木散落しぬる時、松柏ときはなる事をしるなり。

賀

三十二　ちはやぶる神やきりけむつくからに千とせの坂もこえぬべらなり

或物云、年はこゆるといふ物なれば坂とはいふなりとはべり。げにともきこえず。人のとしはたかくなりぬればすぎぬるしく、こえがたきにたとへて坂とは云ふにやとぞおぼゆる。又ものゝ數をはさかと申すべきにや。拾遺集云、

もゝさかにやそさかこえてたばてしちぶさのむくいけふぞわがする

是は法文にいくる也。人の子は母の乳百八十石をのむ也。さればもゝあまりやそとぞいふべきを、さかとよみたれば數とおぼしき也。かずは物をかぎることゝ、又さかひといふはものをかぎることなれば、かずといふこゝろにてさかとはよめるにこそ。のち見む人さだむべし。

三十三　いたづらにすぐる月日はおもほえで花見てくらす春ぞすくなき

これは過る月日はいたづらにおほかるやうにおぼゆるに、花見てくらす春のころほひは月日のすくなきやうになむおぼゆるとよめり。

問云、これはいたづらに過る月日は何ともおぼえざるに、花見る春は月日のすくなきやうにおぼゆるとよめるにはあらぬにや。

答云、これ甚深の義也。たゞしあまりにやはべらむ。後人のこゝろにまかす。

別

三十四　すがるなく秋のはぎはら朝たちて旅行く人をいつとかまたむ

すがるとは鹿をいふ也。或物にはわかきしかとぞ申したる。又さをしかといふむしをもすがると云ふ。萬葉云、

春さればすがるなく野の部公ほとゝぎすにおはずきにけり

是はさをしかなり。彼集にはすがるなく野とぞかきたる。

三十五　をしむらむ人のこゝろをしらぬまに秋のしぐれと身ぞふりにける

これはかねみの王にはじめてあひてわかるゝ日、貫之がわかれをしみたる歌の返事也。かく思ひける人のありけるもしらでとしの老にけるとよめり。ふりぬといはゞとて秋のしぐれとはいくる也。

三十六　かきくらしことはふらなむ春さめにぬれぎぬきせて君をとゞめむ

是は雨いたくふりてとゞまりなば物へいきつることはそらごとに成りなむずれば、ぬれ衣きせてとはよめり。雨にぬれぎぬともそへたる也。

三十七　下のおびのみちはかた〴〵わかるとも行きめぐりてもあはむとぞおもふ

おびは、はしは左右にわかるれども引まはしてまへにあへば、かのおびのやうにかた〴〵わかるとも、ゆきめぐりてあはむとはそへたる也。下帯とは束帯には、うへしたにおびをすればいふ也。

物名

三十八　われはけさうひにぞみつる花の色をあだなるものといふべかりけり

うひとははじめてぞ見つるといへるなり。うひをとこ、うひたち、皆はじめたることなり。伊勢物語にうひかうぶりなどいへり。

三十九　いさゝめに時まつまにぞ日はへぬる心ばせをば人に見えつゝ

いさゝめとはかりそめ也。萬葉に云、

いさゝめにおもひしものをたごのうらにさけるふぢなみひとよへにけり

又しばしと云ふ義もあり。おなじこゝろなり。

戀一

四十　郭公なくやさ月のあやめ草あやめもしらぬ戀もするかな

あやめもしらぬとは黒白もしらずなど云ふやうなることなり。さしてそのことゝはいひがたきこと也。かやうの詞は書籍にも確にしか〴〵と見えたる事もなし。たゞ大意をもちて、推量りいふこと也とぞ故人も申しける。兼盛歌云、

おくやまのゆづるはいかでをりつらむあやめもしらず雪のふれるに

四十一　しら浪のあとなきかたに行く舟も風ぞたよりのしるべなりける

舟はあとなきなみのうへにも風にまかせてゆけば、いたらむとおもふ所へはゆくやうに、わが戀もうはのそらなりとも思ひにまかせてあらば、などかあふこともなからむとよめるにや。又人云、波のうへなる舟もかぜをたよりにて、風にまかせてこそゆけ。わが戀なむたよりもなくすべきばかりもなきといへる也とも申す。いづれかいはれてはべるらむ。

四十二　世中はかくこそありけれふく風の目に見ぬ人もこひしかりけり

書云、龍不レ見レ巖、鬼不レ見レ地、人不レ見レ風。されば目に見ぬといはむとてふく風とおけり。

四十三　夕ぐれは雲のはたてに物ぞおもふあまつそらなる人こふる身は

くものてをくものはたてとはいふ也。きぬ布などおるやうなれば、よそへていふなり。くもといふにつきてそらのくもによそへて、天つそらなる人こふる身とはよめり。くものはたてに物思ふとは、くものすはとかくかきたれば、一すぢならず、とかくなむ物を思ふと云ふ心也。或物にはたゝかひのにはにたつるはたに似たるくもの、夕暮にたつがさだめなくなるをいふともはべめり。いかゞときこゆ。順が假名の序にも思ふ心くものはたてにありながら、おりたちていはむかたなしとかけり。これもとかく云ふこゝろ也。

四十四　よしの河岩きりとほしゆく水のおとにはたてじ戀ひはしぬとも

いはきりとほしとは、河の中に石などのあるにさはりて横ざまに流るゝ水なり。いはきりゆくと云ふ也。それはほかよりもはやく、又おとともたかければ音にはたてじとはよむ也。

四十五　人しれぬ思ひやなぞとあしがきのまぢかけれどもあふよしのなき

或物云、あしかぎはよはきものなれば、ことがきよりははしらを近くたつれば、まぢかけれどもとはよめるなりと侍れども、いかゞときこゆ。あしがき、ことがきよりもまぢかしともみえず。あしがきはひまなきものにはべり。ひがきのやうにくみたるは、さまもなくおしよせてくみたれば、まじかしとはいへるなりとぞみゆる。思やなぞといへるともじはことばのたすけ成るべし。古歌のならひ也。

四十六　おもふともこふともあはむ物なれやゆふ手もたゆくとくる下ひも

人に戀らるゝ人は、下ひもとくといふことのあるなり。されば思ふともこふともわれはあふまじきものを、それもしらずこふるにやあらむ。ゆふ手もたゆくひものとくるとよめる也。又めづらしき人みむとても下ひもとくと萬葉にはよめり。集にも、

めづらしき人をみむとやしかもせぬわが下ひものとけわたるらむ

とあり。しかもせぬとは、ときもせぬひものとくるとよめるなり。人きなばしたひもはとくべきことなれば、先相にて、人のこむとする時はまづひものとくるにや。萬葉にも、

こまにしきひものむすびめときわけていはひてまてどしるしなきかも

こまにしきとは高麗錦とかけり。又云、

人めにはうへもむすびて忍びにはしたひもときてこふるよぞおほき

かやうによめるも、先相にてとくることをいはひてこふればときてまつ心とぞ。又めづらしき人をみむとてもはなひ紐とくとよめり。同集云、

四十七　まゆねかきはなひ紐とけまつらむかいつしかこむと思ふわぎもこ

四十八　いでわれを人なとがめそおほふねのゆたのたゆたに思ふこゝろを

ゆたのたゆたとは浪にうきてとかくゆるぐ也。うきてとかく物思ふ心也。萬葉云、

わが心ゆたのたゆたにうきぬなはへにもおきにもよりやかねまし

是おなじ心也。同集には、猶豫とかきてたゆたひとよめり。これも物を思ひさだめぬ心也。へにもおきにもとは邊にも沖にもよりかぬとよめり。

四十九　行く水にかずかくよりもはかなきは思はぬ人をおもふなりけり

涅般經文云、是身無常、念々不レ住、猶如二電光一。慕水如レ淡、亦如レ畫レ水、隨レ畫隨レ合。萬葉云、

水のうへに數かくごときわがいのちいもにあはむとうけひつるかな

水にかずかくはかなきことのたとへにいだせるなり。

五十　おちたぎつ河瀬になびくうたかたも思はざらめや戀しきものを

おちたぎつはおちたぎる也。うたかたは水のうへにつぼのやうにてうきたるあわ也。詞に、うたかたといふことあり。それにそへてよめる也。その言葉はわすられぬことをいふとぞ。ふるき物にはかきてはべる。萬葉云、

離れそにたてるむろの木うたかたもひさしきときをすぎにけるかな

後撰歌云、

思ひがはたえずながるゝ水のあわのうたかたびとにあはできえめや

これは此こゝろにかなひてきこゆ。又萬葉云、

鶯の來なくやまぶきうたかたにきみが手ふれず花ちらめやも

是はかなひてもきこえず。

戀　二

五十一　津の國の難波のあしのめもはるにしげきわがこひ人しるらめや
めもはるとはめもはるかにと云ふ也。はる〳〵とあるあしはらのつのぐみわたるやうになむ我戀はしげきと讀めり。それをあしのめのはるにそへたる也。兼盛歌云、

難波江にしげれるあしのめもはるにおほくのよをば君にとぞおもふ

是このこゝろなり。

戀　三

五十二　あり明のつれなくみえしわかれよりあかつきばかりうきものはなし
これは女のもとよりかへるに、われはあけぬとていそぐに、あり明の月はあくるもしらず、つれなくみえしなり。そのときよりあかつきはうくおぼゆとよめり。たゞめにわかれしより、あかつきはうき心也。

五十三　かねてより風にさきだつ波なれやあふことなきにまだきたつらむ
是は波はかぜふく時こそたて、風もふかぬさきになみのたゝむやうに、人にあひてこそ名もたて、まだあはぬさきに名のたちぬるなむ、浪のかぜにたゝむやうなるとよめるなり。

五十四　あやなくてまだきなき名のたつた川わたらでやまむ物ならなくに
あぢきなしといふことゝぞみたる。拾遺にも、

かをとめてたれをらざらむ梅の花あやなしかすみ立ちなかくしそ

とよめり。又兼盛歌に云、

ゑひにけるわれらはしらずあやもなしたがゝづけたるつみにかあるらむ

五十五　しのゝめのほがら〳〵とあけゆけばおのがきぬ〳〵なるぞ侘しき
萬葉には明々とかけり。あけゆくこゝろ也。

五十六　君が名もわが名もたてじ難波なるみつともいふなあひきともいはじ
なにはにみつと云ふ所あり。さればみつとそへたり。あひきとは網引といふなり。萬葉にみえたり。浦によりたることなればそへよめり。

五十七　戀しくばしたにをおもへむらさきのねずりのころもいろにいづなゆめ
是はある物には、むかし紫のきぬをしたにきて人とねたりければ、あせにかへりてすりたるやうに、身にもつき、人のきぬにもうつりたりしより、むらさきのねずりの衣と云ふ也とぞはべる。又唯むらさきのねにてすれる衣とよめるにや。色こきものなれば色にいづとはよむにやともみゆ。

五十八　おもへども人めづゝみのたかければ川とみながらえこそわたらね
かはとみながらとはありとみながらとなり。古歌にみなこの心也。後撰にも、

故郷のかはとみつゝもすぐるかなふちせありとはむべもいひけり

五十九　おほかたはわがなもみなとこきいでなむよをうみべたにみるめすくなし

六十　むら鳥のたちにしわが名今さらにことなしふともしるしあらめや
ことなしふといふは、こととなきさまにいひなす心也。たとへばことなしびなどいふ、おなじこゝろ也。ある人云、ことなしびなどもいふ義也。否の字也とまうせど、あまりの義也。

戀　四

六十一　さむしろに衣かたしきこよひもやわれをまつらむ宇治のはし姫
此歌橋姫の物語と云ふものにあり。昔めふたりもたりけるをとこ、もとのめのさはりして七いろのめをねがひける。

求めにうみべにゆきて龍王にとられてうせにけるを、もとのめのなかりければほどに、はまべなる庵にやどりたりけるよ、あのうから此をとこにあひにけり。此歌をうたひて海邊よりきたれりけるなり。さてことのありやういひて、あくればうせぬ。このめなくかくりにけり。今のめのこの事をきゝて、はじめのごとくゆきて此男をまつに、又この歌をうたひてきければ、われをば思ひすてゝもとのめをこふるにこそとねたく思ひて、をとこにとりかゝりたければ、をとこもいくも雪などのきゆるごとくにうせにけり。よのふる物がたりなればくはしくかゝず。集云、

千はやぶるうちのはし姫なれをしもあはれとはおもふとしのくぬれば

これも此事を思ひてよめるにこそ。かのをとこもとのめを忍びたるものなれば、としごろなれける人などをは、し姫によそくてよめるとぞみゆる。千はやぶるとはかのをとこ女むかしの世のことなれば、かみにてはべりけるにこそは。又よろづの物にはその物をまもるかみあり。いはゆるたましひ也。されば橋をまもる神を橋姫とはいふとも心えられたり。神はふるきものなればとしくたる人によそくたるにや。宇治のはしひめとさしたるぞこゝろえぬ。神をひめ、もりなどいふことつねのことなり。さほひめ、立田姫、山ひめ、しまもり、みな神なり。

六十二　君やこむ我やゆかむのいさよひにまきのいた戸もさゝずねにけり

いさよひはとゞまる心なりとぞ。或物には市したれども、それは別の事なり。このいさよひはやすらふ心也。いさよふ月などよめるも、月代ありて出もやらぬほどを云ふ也。萬葉の挽歌にも、

かくらくのはつせの山のやまぎはにいさよふ雲はいもにかあるらむ

とあり。これも山のはにやすらふ心也。かやうのことはきゝはおなじくて、心はかはれり。つねのことなり。

六十三　つの國のなにはおもはずやましろのとはにあひみむことをのみこそ

なにはといはむとてつの國とおけり。とはといはむとて山城とおけり。鳥羽といふ所、山城にあれどなり。又ことばにとはといふは常と云ふことなり。ら〳〵ならず、おなじやうなることをばなにか人はとはと云ふ也。とこにはなといふもおなじ心也。されば名聞には思はず。常にあはむとぞおもふまゝにしきとよめるなり。とこめづらしなどいふこともつねにめづらしき心也。

六十四　敷島のやまとにはあらぬから衣ころもくずしてあふよしもがな

ころもくずしてとは比ばひなり。ほどもくずと云ふ也。比といふもにをとらむとてからごろもとはおけり。唐衣といはむとてやまとにはあらぬとおけり。大和といはむとてしきしまと云ふ也。

六十五　數々におもひおもはずとひがたみ身をしるあめはふりそまされる

數々にことべにたどいふ心なり。數はことをつくす義なり。されば思ふらむ心しのはどなつくしてとぶくきにあらず。たゞこの雨のふらむにぬれ〳〵きたらば、たゞひなき心ぐしとしりまたふるとて、こずばさしもおもはざりけりとしらむとよめる也。わが身の程なしらせむずれば、身をしる雨とは云ふ也。是を水にて此世の人は身をしる雨とはよみはべるとぞみゆるを、涙といふをなど申す人もあれども、いかゞはべるらむ。

六十六　おほぬさの引手あまたにまらねば思くだけそたのまざりけれ

おほぬさはばらくするに、陰陽師のもたるくしにさしたるしでなり。ばらくはてぬれば足なおの〳〵引きよせつゝなづるものなれば、人のもとにとよれどもとゞまらですぐれば、引手あまたにとまらねばとよめる也。此返歌に、

おほぬさと名にこそたてれながれてもつひによるせはありてふものを

とよめるは、かくとまるところなきやうなれども、河にながしつる時はながれとまる所なくやはあるとよめるなり。あまたの所くかよくどつひには君がもとにこそとまれといふこゝろなり。

六十七　主からはふきのあまたかえぬればたえぬことのはうれしげもなし

たまかづらは葛の名也。はふきのあまたとよめるははひかゝる木のおほかればといふなり。さて人によそへて物いふ人のおほかれば、たえずとふうれしげもなしとよめり。かづらは又たえぬことにいへばそへたる也。又女のするかづらをも玉かづらと云ふ。それにまがはしてあしく心うる人もやあらむ。又もゝちどりとは鶯をぞいへども、おしなべて百千の鳥といはむとてもゝちどりとよめり。歌の心にてわかつべし。

六十八　くもりびのかげとしなれる我なれば目にこそみえね身をばはなれず

是は法文にいへる事也。人にはいかにもかげといふ物そへり。曇日にもあれど人は是を見ず。天眼は是を見るなり。

六十九　かげろふのそれかあらぬと春雨のふる人みれば袖ぞひぢぬる

かげろふといふものはありともなくなしともなく、たしかにもみえぬものなれば、それかあらぬかとたとへむとてかげろふとはおけり。ふる人といはむとて春雨とはおけり。むかしの人なれば袖ぞぬるゝとよめる也。

七十　まなづるのあしげのこまやながぬしのわがまへゆかばあゆみとゞまれ

この歌古本にはなし。鶴はあしげの馬の毛に似たればまなづるのあしげの駒とはよめり。玄鶴の駕といふこともあれば、思ひよせてよめる也。仙人は鶴にのるといふことのありければ、かくはいふ也。古仙居をみてよめるうたにも、

あしたづにのりてかよへるやどなればあとだに人はみえぬなりけり

と侍り。

七十一　逢坂のゆふつけどりにあらばこそきみがゆきゝをなく〳〵もみめ

是は古事なり。世の中さわがしき時、四境祭として帝のし給ふことなり。鶏にゆふをつけて四のせきにいたりてする祭也。あふ坂は其の一の關也。ゆきゝとは去來るなり。

戀　五

七十二　暁のしぎのはねがきもゝはがき君がこぬよはわれぞかずかく

しぎははねかくことのしげき也。さればもゝはがきとはいふ也。人のこぬ夜のかずをかくしげさなむ彼しぎのもゝはがきのやうなるとよめり。歌論義といふものには古歌二首を誤りて、かきかよはせるなりとかきたり。先達のことをうたがふはおそれあれどもいかゞとおぼゆ。就中、此集にはかくはべれば、躬恒貫之が定、ひがごとしはべらむやはといとゞちからをえておぼえはべり。その歌云、

暁のしぎのはねがきもゝはがきかきあつめてもなげくころかな

暁のしぢのはしがきもゝよかききみがこぬよはわれぞかずかく

問云、このしぢのはしがきはいかなることぞ。

答云、如二彼歌論議一ば、むかしあやにくなる女をよばふをとこありけり。志あるよしをいひければ、女心みむとて、きつゝ物いひけるところにしぢをたてゝ、これがうへにしきりて百夜ふしたらむ時、いはむことはきかむといひければ、をとこ雨風をしのぎてくるればきつゝふせりけり。しぢのはしにぬる夜の數をかきけるをみれば、九十九夜に成りけり。あすよりは何事もえいなびたまはじなどいひかへりにけるに、親の俄にうせにければその夜えいかず成りにけるに、女のよみてやれりける歌也。是は或秘藏の書にいへりとはべれど、たしかにみえたることなし。

七十三　あはれともうしとも物を思ふときなどかなみだのいとながるらむ

いとゞは世俗に常にいふことばなり。いとわびし、いとかなし、などいふことなり。文集には最とかきていとゝよめり。最は專也、宗也。物思ふときはなど涙はいとかくながるゝことにてあらむとよめる也。同部のなかの歌にも、

あふことのいとたえぬるときにこそ人の戀しきこともしりぬれ

とあり。是は又かなひたり。あふ事の尤絶ぬる時にこそはこひしといふこともしりぬれとよめる也。

問云、いとなしとはいとまなしと云ふことにはあらぬにや。後撰云、

ひぐらしのこゑもいとなくきこゆるは秋夕暮になればなりけり

又兼盛歌云、

ひとゝせにふたゝびも來ぬ春なればいとなくけふは花をこそみれ

これらはいとまなしといふとこそみえたれ。

答云、はじめの哀れともうしとも物をと云ふ歌はいとまなしとも心えてむ。後歌ひとへに花と云ふ心なり。又此證歌どもひとへにいとまなしともよめり。如レ此詞はきゝはおなじくて心はことなる、常事なり。いづれをひがごとゝいふべからず。

七十四　ながれてはいもせの山の中におつるよしのゝ河のよしや世の中

男女のなからひは、ながらへてよき事は何よなどと云ふ心をそへてよめる也。さて男女のなからひをすべていひたる歌にて、戀部のはてにも此歌をばたてる也。

哀傷

七十五　なくなみだ雨とふらなむわたり河水まさりなばかへりくるがに

渡り川とは三途河をいふ也。みつせ河ともいへり。菅原の道眞が地獄繪を見てよめる歌云、

みつせ河わたるみさをもなかりけりなにゝこころもをぬぎてかくらむ

七十六　ちのなみだおちてぞたぎつ白河はきみがよまでの名にこそありけれ

血涙の元源、本文也。もろこしに玉をみかどにたてまつりけるものありけり。みかど玉つくりをめして見せさせ給ふにみがくと、ひかり出べからず。あやしの物なりけりと申しければ、常いかりて片足をきり給ひつ。なく〳〵玉をかへしたまはりて又後の帝にたてまつる。それ又さきの如くにしていまかた足をきられぬ。かくてなきかなしむあひだ、なみだつきてくれなゐになれりといへり。三代と云ふに猶たてまつれりけるにやうぞあらむとて、みがゝせて見給ふにめでたき玉也。和氏璧これ也。車十二兩を照す玉也。或物にはかく釋したり。これならず、血涙の事は侍るにや。南中記云、周興妻を戀ひて血涙をながす。河と成りて鳳臺山の南岳にいる。かるがゆゑに彼山おほくの名あり。蒸流ニ血涙一周流山也。

七十七　さきだゝぬくいのやちたびかなしきはながるゝ水のかへりこぬなり

是はむかしあひしれる人におくれたる男にやれる歌也。逝水不レ返、後悔不レ立レ前といふ事のある也。うせにし人にさきだゝぬを後悔前にたゝぬによせてくいたる也。行く水のかへらぬやうに、又くべきならねば、やちたびくゆれどもかひやなからむとよめる也。

雜上

七十八　むらさきの色こきときはめもはるに野なる草木もわかれざりけり

是はめのはらからなりける女のもとへうへのきぬやるとてよめる歌也。めもはるとは目も遙にといへる也。女をむらさきによそへてむらさきの一もとゆゑにめもはるかに、野に見ゆる草木のいづれともなくむつまじきやうに、この人を思ふ心のふかきゆゑ、はるかのやからまで思ひすてられぬとよめる也。

七十九　たまだれのこがめやいづらこよろぎの磯の波わけ沖に出にけり

風俗歌云、たまだれのこがめをなかにうゑてあるじはもやさかなまぎにさかなもとめにこゆるぎの磯にわかめかりあげに〳〵此心をよめり。たまだれのこがめとはぬりたるものゝたまのやうにさがりたる瓶をいふ也。

八十　いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心をしる人ぞくむ

このしみづの事やうありげに申す人も侍れど、させる見えたる事もなし。この水は播磨のいなみのにある也。昔はめでたき水にて有りけるがするゑにはわろく成りて、人などもすさめぬを昔を聞傳へたるものゝ、これにはめでたき水有りとこそきけとてたづねて見るに、あさましくきたなげに成りてありけれども、これはめでたかりける水なり。いかでかのまですぎむとてのめりけることをよめるとぞ申すめる。それよりもとをしれる事に言傳へたる也。いまはかたもはべらぬにや。是は人のかたりしこと也。見たる所もなければたのみがたし。

八十一　いにしへのしづのをだまきいやしきもさかりはありしものなり

物の異名しるしたる物には、いやしきをとこをしづのをだまきとはいふとかけり。いにしへのしづのをだまきとつゞけたるは、ふりたるあやしの男もよき人もさかりはありきとよめる也。このさかりといふは若き時もありきとなり。又をゝうみてまきたるへそといふ物をしづのをだまきといふ。たゞをだまきもと云ふをいやしきものゝをだまきといふ也。しづのをだまきとはつゞけたる也。

八十二　さゝのはにふりつむ雪のするをおもみもとくだちゆくわがさかりはも

くだつとは斜と云ふ字をよめり。ゝめになる也。萬葉には降ともかけり。これもかたぶく心也。篠の末のおもくなればもとのかたぶくを我よはひのかたぶくによそへてよめり。萬葉云、

今夜もやあかつきくだち鳴くたづのおもひはすぎず戀ひこそまされ

是もあかつきのたけゆく心也。

八十三　老ぬればさらぬわかれのありといへばいよ〳〵見まくほしき君かな

是不レ去別とよむべし。老至りて死事は凡遁方なき故也。

八十四　わたのはらよせくる波のしば〳〵も見まくほしきはたまつしまかも

なみはやがてつゞけてもたゝず、しばしはざまありつゝたつ也。さればしば〳〵ありつゝといふ心にてなみをおきてしば〳〵といふ也。しばらくみまくほしき玉つ島かなとよめり。このしば〳〵の時のほどにはあらず。久しくと云ふ心也。萬葉云、

郭公とばたのうらにしく波のしば〳〵君を見むよしもがな

これもおなじ心なり。

八十五　たちぬはぬきぬきし人もなきものをなに山姫の布さらすらむ

是は龍門寺の仙洞を見てよめる歌也。仙人の衣はたちぬふ事のなき也。

雜　下

八十六　しりにけむきゝてもいとへ世中はなみのさわぎに風ぞしくめる

世中はおだやかならぬところ也。且はしりてもあらむ、又きゝてもいとへ。浪の立ちさわぐによそへて風ふきとよむことなむある。心のどかにおもふまじきなりとよめるなり。

八十七　いづくにか世をばいとはむ心こそ野にも山にもまどふべらなれ

いづくにかうき世をのがれても住むべけれ、野山にても我心はまどはるればとよめり。まどふとは思ひのやすむこともなき心也。

八十八　世中をいとふ山邊の草木とやあなうのはなの色に出にけむ

さこそ世をいとひてわびたるものゝいる山邊ならめ。草木さへ卯花といふ名ある草しもありけるこそとよめるなり。色にいでにけむとは名につきけむと云ふ心也。花のことなればきゝをかざりて色とはよめる也。

八十九　いかならむいはほのなかにすまばかはよのうきことのきこえざるべき

是は法文にあること也。天竺に四人の外道ありてしなむことをおそれて、一人は海中に入り、一人は天に昇り、或說には須彌山の頂にのぼる。一人はいはほの中にかくれ、一人は市にまじはれりしかど、死期いたりにしかば一人まぬかれず、無常の風にしたがひにき。其心をよめり。

九十　木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしにわが身はなりぬべらなり

此歌常はふしに我身はとぞあれど、貫之が自筆本といふにはみなはしとあれば、それにつきて思ふに、竹は木ともなく草ともなければ、何ともなき物になむ成りぬると云ふ心也。孫姫式には此歌ははしたにわが身成りぬべらなりとぞ侍れども、古今にはいづれの本にもかくぞはべる。

九十一　おもひきやひなのわかれにおとろへて海士のなはたきいさりせむとは

此歌あまのなはたくとかける本もあり。但、きもくも五音の字なればおなじ事なり。あみのなはなどくると云ふ心也とぞ古きものには申したる。たくとはくるといふこと也。たくなはなどいふ、此心也。たぐるなどいふ事も侍り。ひなとはゐなかをいふ也。萬葉には夷とかきてひなとよむ也。山上憶良歌にも、

あまざかるひなにいつとせ住居して都のてぶりわすられにけり

とよめり。萬葉には天離とかきてあまざかるとはよめり。都のてぶりは、或物には田舍へ行く時人のとらせたる馬のはなむけなり。都の人のてぶれの物といふ心也とかきたれども、げにともきこえず。扨は忘られにけりといはむこといかゞ。忘れずとぞいはまほしき。

九十二　わくらはにとふ人あらば須磨の浦にもしほたれつゝわぶとこたへよ

わくらはゝたまさかといふ事也。たまゆらなどいふもおなじ事なり。

九十三　われをきみ難波のうらにありしかばうきめをみつのあまとなりにき

難波のうらにありしかばとは、われを何ともせざりしかば、うきめを見てなむあまに成りにたるといへるにや。難波にみつといふところはあればそへよめる也。

九十四　いざ爰にわが世はへなむすがはらやふしみのさとのあれまくもをし

是は山城のふしみにはあらず。大和國に菅原と云ふ所にふしみといふ所のある也。扨、かくつゞくる也。日本紀云、安康天皇崩云菅原伏見野中陵に葬、この所也。後撰云、

すがはらやふしみの幕に見渡せばかすみにまがふ小初瀬の山

とよめり。このふしみにては彼山見ゆべからず。

九十五　ふる里はみしこともあらずをのゝえのくちしところぞ戀しかりける

仙人の山の中にてごうつ所にきこりの行きて一番を見るほどに、つちにつがへてをりけるをのゝえくちたることの有るをよめり。

九十六　あしたづの獨りおくれて鳴くこゑは雲のうへまできこえつがなむ

鶴鳴三九皐一聲聞レ天と云ふ文也。古歌云、

から衣したてるひめのつまごひぞあめにきこゆるたづならぬぬを

是も此心也。したてるひめはあめわかみこのめ也。そのをとこにおくれてかなしむ聲、あめに聞ゆる也。

九十七　春されば野べにまづさくみれどあかぬ花まひさしにたえずみるべき

春されとは春くればといふ也。萬葉には春されとかきたれども、彼集は深きをあらはし淺きをかくせる集也。秋されば花さき紅葉すとよめり。夕されなどいふも夕幕也。まひさしは誠に久しくたえで見るべき花とよめる也。

誹諧歌

九十八　梅花見にこそきつれうぐひすの人く〳〵といとひしもをる

鶯はなきはてに、きり聲になくことあり。それはひとく〳〵となくやうにきこゆればかくよめる、或物にも、かくぞ見えたる。

九十九　いくばくの田をつくればか郭公しでの田をさをあさな〳〵よぶ

時鳥の一名をばしでの田をさと云ふ也。時鳥はもずと云ふ鳥の本名といへる事あり。彼鳥昔くつぬひにてありけるが時鳥のくつのれうをとりて、いま四五月のほどにたてまつらむとてなかしてかくれにければ、それを尋ぬとてよびありくによりて、この名をえたる也。太后の百番歌合歌云、

ほと〻ぎすなきつるかたの山べにはくつでいださぬ人やあるらむ

百　いつしかとまたくこゝろをはぎにあげてあまのかはらをけふやわたらむ

是は六日の歌也。またくとはまつと云ふ也。萬葉に如レ此の詞は、あるはもじをすて、あるはもじをそへてよめり。

秋の野の尾花がすゑをなびかしてうしくもしるくあへるきみかも

とよめり。又見らくすくなくこふらくなどよめり。又きくといはむとてもきかくなどよめり。さればまたくともなどかよまざらむ。はぎにあげてとは、いつか待つこゝろをはぎにあげてといふ也。思ふをしるべにてゆかむなどもよむ心なり。又またくとはまたがるといふ心にや。けふにありて心もとなく、あすをさしこしてまたるゝ心をまたぐ心とよめるにや、ともきこゆれど、あまりの義也。

百一　足引の山田のそほづおのれさへわれをほしてふうれはしきこと

そほづとは田におどろかしに立てたる人かたなり。さればあやしの人ならぬものといはむとて、そほづによそへたる也。それさへ我にあはまほしといふなむ、うれへとおぼゆるとよめるなり。あやしき人にけさうせられてよめる歌にこそ。

百二　人にあはむつきのなき夜は思ひおきてむねはしりびにこゝろやけをり

つきのなき夜とよめるは便なしと云ふ也。無骨ことなどをばつきなしと云ふは便宜なき心なり。萬葉にもかくぞ見えたる。思ひおきてとは此事を思ひておきゐたる也。むねはしりびとはむねのさわぐをばはしると云ふ也。それをはしりびにそへて心やくとはよめるなり。

百三　出でゝゆかむ人をとゞめむよしなきにとなりのかたにはなもひぬかな

此歌いかによめるにか。ゆゑあるべし。もしさせる本文などにあらずば、ことのはじめものゝさきに、はなひつればあしき事にてあるにや。物をいふにあしきさまにさしいらへするをば、はなひるやうに物いふなどまうすめるは。又はらへするをりはなひるをばいむは此心也。人の家を出づる時おのづからわるきものなどあひぬれば、くすしき人はいみてかへりいりなどすれば、いづる時はなひる人などのあるは、いむことにてはべるにや。さてとゞむべきかたもなきにははなひる人のあれかし、とまりやするとよめるにこそ。此義げにもとおぼえず。

百四　もろこしのよしのゝ山にこもるともおくれむと思ふわれならなくに

此歌ものしりたりとおぼしき人は、李部王の記に、吉野山は五臺山のかたはしの雲に乗りて飛びきたるよし見えたり。さればもろこしの吉野の山とはいふ也など申せども、今案のごときこゆる。たゞ心ざしふかきよしをいはむとて、もろこしのよしのゝ山とは、今いひいでたることなり。もろこしへいなむには、都にあらむをだに尋ねいたるべきにあらず。又此國なりともよしの山にいりなむ人をばおぼろけの心ざしならでは尋ね行きがたし。いはんやもろこしにとりて、この國のよし野山のごとくにあとたえたる所にいりたりとも、われはおくれじとよめるとぞ見ゆる。もろこしによしのゝ山をおけるに、誹諧の心はある歌とぞ見えたまふる。もとよりもろこしのよし野の山と云ふならばさせる

心もなき歌にてこそはべらめ。

百五　難波なるながらのはしもつくるなり今はわが身をなにゝたとへむ

此集雑部に、

世中にふりゆくものはつの國のながらのはしと我身也けり

といへる歌を本にてよめる也。誠に橋をつくるにはあらじ。かくたとへきたるにせめてわが身のたゞひなきよしをいはむとて、彼はしもつくる也とはよめる也。

百六　そくにとてとすればかゝりかゝすればあないひしらずあふさきるさに

あふさとはあふぎま也。きるさとはきざま也。とざまかくざまといふ心也。とするもあしく、かくするもあし。いひしらぬわざかなとよめり。

百七　なにをして身のいたづらに老ぬらむとしのおもはむ事ぞやさしき

やさしとはつゝかしと云ふこと也。萬葉に松浦仙人歌云、

たましまのこの河上に家はあれどきみをやさしみあらはさずあり

百八　梅花さきてのゝちのみなればやすきものとのみ人のいふらむ

さきすぎたるよしをいはむとて、梅花さきてのゝちのみとはそくたり。梅はすければそのみなればやすきものとはゝのいふらむとそくてよめる也。

大歌所御歌

百九　まきもくのあなしの山のやま人と人も見るかね山かづらせよ

人も見るかねとあるは、風俗のことば也。見るべくなどいふ心なり。山かづらとは神祭するには眞榊にてかしらをゆふなり。それを山かづらといふ。まきもく、あなしは大和國に有る山名也。會丹歌云、

まきもくのあなしのひばら奉たてば花かゆきかと見ゆるゆふしで

是もこの山也。又あなし川、ふる山などよめるもおなじ所也。ひばらとは檜木の原也。花か雪かと見ゆるゆふしでとあるは、かの山に神のおはすれば、ゆふしでなどのしろくて見ゆるが花にまがふ心也。

問云、彼山に神おはすと、其證あるにや。

答云、古歌云、

をとめごが袖ふる山のみづがきの久しきよゝり思ひそめてき

ふる山、あなし同所也。みづがきとよめるにかしこき神おはしぬときこえぬ。をとめご神ふるとよめるはをとめは神女也。まふ物なればそでふるとはいふ也。をとめは萬葉には未通女とかけり。なさなき女をもちゐれば也。みづがきの久しとよめるは、彼垣は神のまくにある垣なれば、神はふるきものにいませば、かの垣もふるきことによむなり。

問云、高野姫の天皇なにはのみやに幸し給ふ時、左大臣卿の奉る歌云、

堀江にはたましかましなみづがきのみふねこがむとかねてしりせば

此歌のごとくば、みづがき、神の御前にしもあるべくしとも聞えず。

答云、かのかきは垣の中にかしこくいつくしき垣なれば、神の御前にもすれば、御門の御舟をほめむがために、みづがきのみふねとはよめる也。又久しきものにもいへば、いはひてそくたる也。

百十　みちのくはいづくはあれどしほがまの浦こぐ舟のつなでかなしも

百十一　まがねふくきびのなかやまおびにせるほそたに川のおとのさやけさ

まがねは鐵なり。此山にて彼かねをほりてはふきおはすれば、まがねふくといへり。山のこしに細き河のめぐりた

れば帯にせるとはよめる也。備中國なり。

百十二　をぐろさきみつの小島の人ならば都のつとにいざといはましを

これは小黒さきと云ふ所の名也。これがめでたき所なれば人にてあらましかば、都へぐしてのぼりなましとよめり。つとゝは萬葉には裹とかきてよめり。つゝみもたる物と云ふ也。人なりともいかゞつゝみもつべき。されども田舎などより土産をもてきて人にみするをば、此たびのつとなりと云ふ心也。

百十三　もがみ川のぼればくだるいなふねのいなにはあらずこの月ばかり

此歌普通にはしばしばかりぞとはべる。もがみ川はたぐひなくはやくてのぼるふねのかしらをふりてくだり〳〵すれば、いな舟とはいふ也。遂にはのぼりぬればしばしばかりぞとはよめり。或物に云、出羽國の住人の申しゝは、彼河すべてはやき事なし。たゞくらまのなゝまがりの坂のやうにてひぢまがりて流れたれば、のぼり舟の又くだるやうによそにては見ゆる也と申せども、後撰にも、

もがみ川ふかきにあへずいな舟の心かるくもかへりけるかな

とよめり。是はさきの歌の心にてぞはべる。川はさだめなきものなればむかしこそははやくはべりけめ。

百十四　君をおきてあだし心をわがもたば末の松山なみもこえなむ

あだし心とは他心なり。君をおきてこと心をもたばとよめる也。萬葉に異意とかけり。貫之歌にも、

櫻よりまさる花なきはなければあだし草木はものならなくに

とよめり。末の松山浪こゆるといふことは、むかし男、女に末の松山をさして、彼山に波のこさむ時ぞわするべきと契りけるがほどなく忘れにけるより、人の心かはるをば浪こゆると云ふ也。彼山にまことに浪のこゆるにはあらず。あなたの海のはるかにのきたるには浪の彼松山のうへよりこゆるやうに見ゆるを、あるべくもなき事なれば、誠にあのなみの山こえむ時忘れむとは契るなり。

百十五　こゆるぎのいそたちならしいそなつむめざしぬらすなおきにをれなみ

めざしとはあまのいさりすとて物とりいるゝこと也。竹にてくめり。萬葉にはこよろぎのいそとよめり。五音なればかよへるにや。

百十六　かひがねをさやにも見しかけゝれなくよこほりこせるさやの中山

此歌普通には、よこほりくやるなどはべり。ある人の云、さやの中山は四郡にわたりてあればよごほりこせるとはよめる也。よごほりくやるとかきたる本はひがごと也。よこほりすといふことなしと申せども、土佐の日記には、ひんがしのかたに山のよこほれるをとへば、やはたのみやといふにと侍り。さる詞もあるにこそ。やはた山四郡にわたれりとも見えねば、ひがゞきにはよもあらじ。但、よき本によごほりこせるとはべるぞあやしき。或物云、くやるとはふせるといふ詞也。駿河の國の風俗なり。又けゝれなくとはこゝろなくと云ふ也。かひの國の風俗とはべる、さもやあらむ。たゞし五音に通ひたればいかにもひがごとにはあらじ。かひがねをさやかに見るべきに、心なくよごほりふせる山かなといへるは今すこしよくきこゆ。心なく四郡にはこえたると。

かひがねをねこしやまこしふくかぜを人にもがもやことづてやらむ

短歌

讀人不知

一　かくなはに思ひみだれてふる雪のかくなはゝくだ物の中に、とかくちがへたる物のつくりたる也。みだれたることにいへり。　同哥立、

二　えふの身なればなほやまず

貫之歌云、

三、やちくさのことのはごとに

萬葉には、八千種とかきてやちくさとよめり。

忠峯歌云、

四　けだものゝ雲にほえけむこゝちして

淮南王は藥を服して仙に成りてのぼれる人也。其仙藥の物につきたるをくひたりし犬鷄などの、仙になりてそらにのぼりしが、雲のうへにてほえたりし事也。　同歌云、

五　たれかは秋のくるかたにあざむきいでゝ

秋のくるかたとは西と云ふ心也。右はにしなれば右衞門府生にてあればかくよめり。あざむくとはすかすといふことなり。詐の字をよむなり。　同歌云、

六、をさ〳〵しくもおもほえず

をさ〳〵しとは優なりなどいふ心也。躬恒が假名の序にもあるじのをさ〳〵しければ、をかしく住みなしたりとかけり。伊勢物語にもまだわかければふみはをさ〳〵じからず、ことばもいひしらずと侍り。　同歌云、

七　おとはのたきのおとにきくおいず死なずの藥もが

文集云、中有三神山一、山上多生二不死藥一。又云、蓬萊古今但聞レ名、この心也。

詞

物名部に、康秀歌の詞に云、

八　めどにつくり花させりけるを

めどは草の名也。蓍也。是にてけづり花をもつくり、又これがくきにさしなどする也。されば草の處にこの歌はべり。

戀部云、

九、右近の馬場のひをりのひ

まゆみの眞手結の日也。五月五日也。此日はかちのしりをひきをりたれば、ひをりのひとは云ふ也とぞ楽乗方は申しけれども、あらてつがひの日も引きをれり。おぼつかなし。

小町歌の詞云、

十　あがたみにはえいでたゝじや

あがたは縣なり。縣は國也。史記に見えたり。又土佐の日記にもあがたのよとせいつとせはてゝと書けり。

人名

十一　龍

女の名也。或人云、これはうつくとよむ也。かの人かたちのめでたくて君のおぼえにてはべりければ、うつくとは、いかゞかくべきと議しけるに、おぼえなるによりて寵とかきてうつくとはよむ也と。いまたくみいだしたる事也とぞほりかはの右のおほいどのはかたり給ひしと、大宮のおほいどのゝあかし給ふとて、故一條殿のおほせられける也。故將作もうつくとぞ侍りける。又或人云、兼房朝臣はかなにてうとかきたりけりとぞしりたりける物を。

十二　衣通姫　序云

日本紀云、稚淳毛二岐皇子の女なり。允恭天皇八年春二月藤原におはしましてひそかにそとほり姫のふみを見てまふ。此夕、衣通姫みかどを戀ひたてまつりてひとりゐたり。みかどのみまするごとをしらずしてよむ歌

わがせこがくべきよひなりさゝがにのくものふるまひかねてしるしも

住吉の社は四社おはします。南社は此衣通姫也。玉津島明神と申す也とぞ津守國基は將作に語り申しける。

十三　天神（アマツカミ）　眞名序云

彦火々出見尊也。日本紀云、ひこほゝでみのみことわたつみのむすめ、豐玉姫をめとし給ひて、こうまむとし給ふ時、豐玉姫ののたまはく、やつこうまむ時にな見ましそ。みこと忍ぶる事あたはずして行きてうかゞひ給ふ。姫さかりにこうみ給ふ時に龍に成りぬ。はぢてのたまはく、我にはぢ見せざらましかば海くがあひかよひて、へだゝりたゆることなからまし。すでにはぢみつ。いかにしてかむつましき心をむすばむといひて、草をもちてみこをつゝみて、海のほとりにおきて、海のみちをとぢてさりぬ。時にみことよみ給へる歌

沖津とりかもつくしまにわがゐねしいもはわすれじよのことごとに

舟をば鷗にゝせ、おきつとりとおほくよめり。萬葉云、

沖つとりかもといふねかへりこばやらのさきもりはやくつげこせ

さればかもつくとは舟つく嶋によめるにこそ。我ゐねしとは、同集には、率宿とかきてゐねしとよめり。

十四　海童（ワタツミノムスメ）女

豐玉姫なり。同紀云、とよたまひめそのみこきら〳〵しきことをきゝて、あはれとて又かへりてやしなはむと思へど、よからじとおぼして、弟玉依姫をやりてやしなはせ給ふ時に、豐玉姫のみこと、玉依姫によせてよみ給へる報歌

あかだまのひかりはありと人はいへど君がよそひしたふとくありけり

あかだまとは子也。こをば玉にたとふる也。いろとゝは弟なり。兄をばいろえといふ。

同紀云、此贈答二首は號四拳歌。又云、このみこひとゝ成りて、をば玉依姫を爲レ妃云々。この御子は神武天皇の父、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊也。此尊うみたまふ屋にうの羽をふけり。これより産所をばうぶやと云ふ也。

於二此卷一者和歌肝心目足也。非二灌頂之人一者輒不レ可レ開。件灌頂撰二器量及年齢一可レ授レ之。

玉津島姫明神御守護卷也。可レ愼、々々。

下卷餘問答

一　かひや　　二　ひたち帶　　三　神風

四　さゝなみ　　五　二四八　付いほ　　六　もずの草ぐき　付玉くし

七　みやび　　八　うらへかたやき　　九　小車のにしき

十　ゆはた　　十一　せりつみし　　十二　いたづき

十三　さきくさ　　十四　はとふくあき　　十五　そのかみ

十六　かはやしろ　付神樂　　十七　とをづらの馬　付事もまと　　十八　ゆつのつまぐし

十九　誹諧歌　　二十　譬喩歌　　二十一　長歌短歌

二十二　反歌　　二十三　旋頭歌　　二十四　混本歌

一　問云、古歌にかひやがしたとよめるは何事ぞ。

答云、かひやとはゐなかに魚とるとてすること也。河もしは江などにすと云ふ物をたてまはして、口を一つあけて其内に、さゝの枝おどろなどとりおきたれば、あたゝまりにつきて、うをのあつまるをとる也。鳥などいりぬれば魚のおどろきてうすれば、その上にたかくやをつくりおほひて、みもりとて人をすゑて鳥をもおはす。又くひものをうちまきなどして此うをゝかひつけさすれば、このやをかひやとは云ふ也。たとへばふしつけといふ物を引きつくろへるなるべし。萬葉集云、

朝がすみかひやがしたになくかはづ聲だにきかばわがこひめやも

問云、あさ霞とよめり。春の歌ときこゆるに、かへるは夏こそはべれ。又これも冬すること也。いかによめるぞ。

答云、かれは冬することなれども、つくりおきたるかひやはこぼちとる物ならねば、春夏までも有りなむ。朝がすみといふは夏もなどよまざらむ。田舎にはかびのけぶりなどの名殘に、霞みて見ゆる折もあり。又萬葉集には霞も霧もいつともわかずよめり。

あさぎりに八重山こえてほとゝぎすそのはなべからなきてすぐなり

又云、

秋の田のほのうへきりあふ朝がすみいづくのかたにわが戀やまむ

又人丸歌云、

春山のきりにまどへるうぐひすもわれにまさりて物はおもはじ

三條大納言の歌にもかひやはよまれたり。

ますらをのもぶしつかふなふしつけしかひやがしたにこほりしにけり

これは冬のこゝろ也。

二　問云、ひたち帶のこと、或ものにはかしまの明神のまつりの日、けさうする人あまたある女は、その男の名どもをぬのゝ帶にかきあつめて神の御前におく也。それが中にあひてよかるべきをとこの名かける帶の、おのづからかへるをとりて繩宜がとらせたるをさもと思ふ男の名にてあれば、やがて神の御前にてかけおびのやうにうちかくれば、それをきゝてをとこかこちかゝりてしたしくなりぬとかけり。萬葉云、

東路のみちのおくなるひたち帶のかごとばかりもあはむとぞおもふ

此事たしかに見えたるものもなし。又かごとゝいふこともおぼつかなし。

答云、或人の申されしは、是はひがこと也。ひたちの國にはをとこ女のなからひをうらなはむとては、をといふものをおびにして、一つには我名をかき、ひとつにはをとこの名をかきて、彼神の御前にてのと申して、帶ををりかへして、中をばかくしてするをねぎにむすばする也。それにわろかるべきなからひは、はなれ〳〵にむすばれ、よかるべきは、かけ帶のやうにまろにむすびつながはるゝを、さもと思ふをとこなれば、やがてかけ帶のやうにうちかけつ。山すげうらなどするやうなることとぞかし。但、ひさしくなりてたしかにもおぼえず。かごとゝいふはかこつといふ事也。又帶にもかごといふものあれば、そへてよめり。つぎの義につかば、つながふ心にてもはべるべきにや。かごといふは物をつながふ物の名也。あふみにもあり。それにてくちをもつながふ也。されば彼帶のつながはるゝばかりの事だにもあれかしと讀めるにや。又かごといふ詞あり。それ誓言なり。此帶の事かの國の故老にとふべき也。

三　問云、神風伊勢といふはいかなるゆゑぞ。

答云、かみ風やう〳〵に申しあひたり。あるはみもすそ川に神風といふ瀬あり。大神宮のあまくだり給へる所也と申す、心得ず。扨はみもすそ川とつゞけざらむほかはよむべからず。あるは神のめぐみをいふ也と申す。それ又いかゞときこゆ。此義にてよめるにや。或人は安樂寺にて神風とよみて、時の人にわらはれけり。日本紀云、垂仁天皇二十五年三月朔天照大神を豐耜姫命に離て倭姫命につけたまふ。倭姫命大神をしづめまさむ所をもとむ。菟田の篠幡に詣で、さよにかへりて、近江國に入り、東廻三美濃にて、いせの國にいたる時、天照大神倭姫命にをしへてのたまはく、この神風伊勢國すなはち常世の浪重浪歸國也。傍國の可怜國也。此國に居と思故に、大神のをしへのまに〳〵そのまつりをいせの國にたつ。よりて齋宮を五十鈴河の上に興す。これをいそのみやと云ふ。すなはち天照大神はじめてあめよりくだり給ふ所也と云へり。是より申す事にてこそ。萬葉集云、

神風やいせのはま荻をりふせてたびねかすらむあらきはまべに

たとへばあふみをさゝなみといふがごとし。はま荻はあしの名也。

四　問云、あふみをさゝなみと云ふ事、又いかに。

答云、日本紀云、天智天皇あはつの宮におはします時佛寺を建立の御心ざしありて、勝地をもとめ給ふに、六年二月三日の夜夢に沙門奏云、いぬゐの山に靈窟あり。はやく見給ふべし。帝おどろきて其方の山を見給ふに、おほきなるひかりほそくのぼれり。あしたに人をつかはしてたづね給ふに、使かへりて奏云、ひかりにあたれる所に小山寺幷小瀧水あり。又優婆塞ありて經行念誦す。ゆゑをとふにこたへず。その操行を見るに、奇偉者といひつべし。帝そのところに幸、優婆塞いでむかひ奉れり。此山の名をとひ給ふに、奏云、古仙靈窟伏藏の地、佐々名賀長等山といひてうせぬ。其所に伽藍をたてらる。今の崇福寺是也。これよりさゝなみながらとはよむ也。この心にてはながらの山ばかりをぞいふべきに、いかなることにか、萬葉には、

さゝなみやひら山風のうみふけば釣するあまの袖かへる見ゆ

とよめり。又おほつとも、あふみとも、さゝなみの國ともよめり。あふみのうちはいづこにもつくべきにこそ。

五　問云、古歌に二四八とよめるは何事ぞ。

答云、二四八しれる人すくなし。或は四死道の心也などいへり。げにとも聞えず。二四八ははつねと云ふ事也。その故は鶏をば八聲の鳥と云ふ。やこゑ鳴く故也。常にやこゑなくにはあらず。暁には、はつ鳥なか鳥しば鳥とみしきりなくに、はつ鳥には必ず、やこゑ鳴く也。さればこの鶏の鳴くによそへてやつの聲をばはつとよめる也。二四といふはやつ也。八といふ字のこゑなればこゝには聲とよむべき也。さて二四八をばやつのこゑとこゝろうべし。やつのこゑははつねと心うる也。さてはつねのごとなむをちかへりなくとよめり。はつねのごとゝいふはめづらしくと云ふ心也。萬葉云、

ならさかをきなきとよます郭公二四八とこそをちかへりなけ

三條大納言の歌にも、

をちかへり庵になけどもほとゝぎす二四八ともにめづらしきかな

をちかへりとは萬葉には百千返とぞかける。又かしこへゆきこゝへかへり鳴くといふ義也とはべれど、それはいかゞとおぼゆるに、この後の歌はをちかへりいほになくとよまれたるは、いほを五百といふことなれば、百千返の義はことたがひぬ。但、或書云、郭公は山を出て都を棲とすと云ふ事あれば、いほになくとは都になくとよまれたるにや。

六　問云、鴫の草ぐきは何ぞ。

答云、むかしをとこ野を行くに女にあひぬ。とかくかたらひつきてその家をとふに、女もずのゐたるくさぐきをさしていはく、わが家はかのくさぐきのすぢにあたりたる里にあるなりとをしふ。男後にかならず尋ぬべきよしをちぎりてゆきさりぬ。そのゝち心には思ひながらおほやけにつかうまつり、わたくしをかへり見るほどにいとまなくてゆかずなりぬ。つぎのとしの春たま〳〵ありし野にゆきて、をしへしくさを見るにかすみこと〴〵くなびきてすべて見えず。ひねもすにながめてむなしくかへりぬといへり。これ故將作のつたへなり。萬葉云、

春されば鴫のくさぐき見えずともわれは見やらむ君があたりを

或人伊勢より將作のもとにおくれる歌云、

とへかしなたまくしのはに見がくれてもずのくさぐきめはならずとも

將作これを見て、もずのくさぐきとはいかにしりてかくよめるにかとかたぶかれけり。或說には木葉しげくなりて、しるしの草見えずといふ義もあれば、是はその心によめるにや。たまくしとはさかきを云ふ也。大神宮の風俗也。

七　問云、みやびと云ふ詞はいかなる心ぞ。
答云、みやびは媚たることにや。伊勢物語には、いにしへの人はかゝるみやびをなむしけると有り。又世繼にも女御たち多くおはするにもかたゞ〳〵みやびをかはし、かつはなさけをあたりてなどあり。
問云、このみやびはふるまひといふ事也と申す人もあるはいかに。
答云、萬葉云、
　梅花ゆめにかたらくみやびたるはなとわれ思ふさけにうかべこそ
又輔親卿歌云、
　みやびたる聲にもあるかなさをしかのふかき山邊にすまふものから
此歌どもはこびたる心にぞ見えはべる。但、ふるまひともおもひなさむにことのほかには侍らず。又かやうのことはかよはしても申すとあれば、ひとかたに定めがたし。文集には閑の字をみやびかなりとよめり。閑麗などいふもやさしくこびたる心にや。源氏物語にも此ことばゝはべり。
八　問云、古歌にうらへかたやきとよめるは何事ぞ。
答云、公家に龜甲の御卜といふ事あり。卜部の氏のものゝ、はゝかのきにて龜のかふをやきてうらなふ也。又それにかやうに鹿のかたのほねをやきてうらする事あり。萬葉云、
　むさし野にうらへかたやきまさでにものらぬ君がなうらにいでにけり
或説には、おくのえびすの鹿のかたのほねをやきてこのうらをする也ともまうすめり。江都督の歌云、
　かぐ山のはゝかぐしたにうらとけてかたのくしかのこゑきこゆなり
とよめり。もしひがぎゝにや。又かたのほねをぬきてやけばかたぬくとは讀めるにや。

九　問云、をぐるまのにしきはいかなるにしきぞ。
答云、めでたきにしき也。大神宮の御ぞにもちゐるにしき也。文に車のかたのある也。古歌云、
　をぐるまのにしきのひもをときたればあまたねもせずきみひとりなり
十　問云、ゆはたといふは何事ぞ。
答云、或文云、纐此字をゆはたとよむ。又纐障子ともあり。或物には目結ともいへり。古歌云、
　かしはぎのゆはたそむてふむらさきのあはむあはじははひのこゝろに
かしはぎとは兵衛のつかさ也。そのたちのをゝばむらさきにそむる也と或物にはかけり。又ものゝ色ははひにてあへばかくよめり。ゆはたは故將作の歌にもよまれてはべり。
　としひさにゆはたのきぬをとりしでゝ神にぞまつるいもにあはむため
十一　問云、せりつみしむかしの人と云ふ古歌を、あるは后のせりめしけるを、庭はく者おのづから見たてまつりて思ひに成りて、めしゝ物也とて芹をつみて、佛僧などに奉りし事のある也といへり。或は獻芹と云ふ本文の心也など申すは、いづれにつくべきぞ。
答云、いづれとさだめがたし。但、或人のかたりしは、むかし大和國に猛者ありけり。いへには山をつき池をほりていみじきことゞもをつくせり。門まもりの嫗のこなりけるわらはの、まぶくだ丸といひけるありけり。池のほとりにいたりてせりをつみけるあひだ、猛者のいつきの姫ぎみ出てあそびけるを見てより、このわらはおほけなき心つきてやまひに成りて、その事となくふせりければ、母あやしみてゆゑをあながちにとひければ、わらは此よしをかたるにすべてあるべきことならねば、わが子のしなむずる事をなげくほどに、はゝも又病にふしぬ。その時かの家の女房此をうなのやどりに立ちいれりけるに、ふたりのものゝやみふせるを見て、あやしみてとふに、おうなのいはく、させ

るやまひにあらず。しかゝのことのはべるを思ひなげくによりて、親子しなむとする也といふ。女房わらひて此よしを姫君に語るに、姫君あはれがりて、やすき事也。はやくやまひをやめよといひければ、わらはも親もかしこまりよろこびて、おきて物くひなどして、例のごとくになりぬ。姫君のいふやう、忍びて文などかよはさむにてかゝざらむくちをし。手をならふべし。わらはよろこびて一二日にならひつ。又いはく、我父母死なむことちかし。其後に何事もさたせさすべきに、もじ知らざらむわろし、學問すべし。わらは學問して見あかすほどになりぬ。又いはく、忍びてかよはむに、わらはゝ見ぐるし、ほうしに成るべし。すなはちなりぬ。又いはく、そのことゝなきにほうしの近づかむあやし。心經、大般若などをよむべし。いのりせさするやうにもてなさむと云ふにしたがひてよみつ。又いはく、なほいさゝか修行せよ。護身などするやうにて近づくべしといへば、修行にいでたつ。姫君あはれみて、ふぢのはかまを調じてとらす。かたばかまをばみづからぬひつ。是をきて修行しありくほどに姫君かくれにければ、そのよしきゝて、道心をおこして偏に極樂を願ひて、たうときひじりにてうせぬ。弟子ども後の事に行基菩薩を導師に請じたるに、禮盤にのぼりていはく、まぶくだ丸がふぢばかまわれぞぬひしかそのかたばかま、といひてかねうちてこと〴〵もいはでおりぬ。弟子あやしみてとひければ、亡者智光はかならず往生すべき緣ありしものゝ、はからざるに世間に貪着して惡道にゆかむとせしかば、わが方便にてかくはこしらへいれたる也となむ有りける。姫君は行基の化身、行基は文殊也。まぶくだ丸は智光なり。智光賴光とて往生したるものは是也。是はかきたることにてもあらず。人の文殊供養しける導師にて仁海僧正のゝたまひける也。さて、

せりつみしむかしの人もわがごとや心にものゝかなはざりけむ

といふ歌を詠じて、此歌はこの心をよめる也となむのたまひける。

十二　問云、身にいたづきのと讀める歌はいかに云へるぞ。

答云、文選文賦云、心不レ耐レ煩而官事闕レ掌。又云、或清虛以婉約、毎除レ煩以去レ濫。弘仁格序云、鋪設、雜器切隆多少等類事既輕脩。五等務從二折中一不レ煩二上聞一。煩惱兩字、釋云、煩は哦身、惱は哦心。文集云、繚綾念女工之勞。貴、困、これらの字をもいたづきと讀めり。法花經文云、生二疲勞一耶、是佛をくるしめたてまつるやと問也。大和物語に、いくたの女の詞云、人のなさけをもいたづきをも思ふにいといとほし。又云、あるはとほきほどよりいます。あるはそのいたづきかぎりなし。これらにて心をうるにいたづきは煩也。煩は惱也、苦也。古歌云、

さく花に思ひつく身のあぢきなさ身にいたづきのいるもしらずて

十三　問云、さきくさといふはなにぞ。

答云、或物には檜木なりといへり。又さきくさの祭といふこと有り。それは檜の葉にてする也。さてさきくさのまつりと云ふ也。古歌云、

このとのはむべもとみけりさきくさのみつばよつばにとのづくりせり

屋をば檜木にてつくればかなひてきこゆ。

問云、或說に、和名にさきくさといふ草あり。幸草とかけり。又三枝草ともかけり。三枝と云ふに付きてみつばよつばとはいへるにや。又かの草もみつばなどなる物にや。家にはといふ事あり。はりなどいふ事にこそ。軒ばなどいふなり。それによせてつくりかさねたる心をよめり。幸草ともかきたれば、榮ゆる心によせたる也とも申すはいかに。

答云、いづれもいはれなきにあらず。後人さだむべし。

十四　問云、はとふくあきといふは何事ぞ。

答云　れうしの鹿まつには、人をよばむとても、又人にしゝありとしらせむと思ふにも、手をうはせてふくをはとふ

くとはいふ也。はとゝいふ鳥のなくにゝたるゆゑなり。古歌云、

ますらをのはとふく秋のおとたてゝとまれと人はいはぬばかりぞ

又曾丹歌云、

まぶしさしはとふく秋の山人はおのがすみかをしらせやはする

秋としもよめるは、鹿の秋はつまをこふる心なれば、ふえしゝとて笛にてしゝのこゑをまねびて、我はかくれてまつことのある也。

十五　問云、そのかみとはすぎにしかたをいふ也。文字にも當初とかけるに、酒井人眞がやまひ大事にて山里へゆく時の歌云、

ゆく人はそのかみこむといふものを心ぼそしやけふのわかれよ

とよめるは心いかに。

答云、そのかみは當時ともかけり。そのをりと云ふこと也。さればすぎにしかたをも今ゆく末をも只今をもいはむにとがなし。大和物語にいくたの海に身なげたる女のことばにも、そのかみおやいみじくさわぎてとあり。當時のことときこゆ。これならずあまた侍り。

十六　問云、かはやしろと云ふはなに事ぞ。

答云、かはやしろのことさま〴〵に申すめれど、皆ひがごと也。是は夏神樂のこと也。神樂は冬することを、おのづからにはかなる事にて夏などする時にはきよき川のほとりにてする也。河の瀬にさかき四本を立て、それをはしらにて、しの竹をたなにかきてそれに神供をばそなふ。これをかはやしろといふ也。さてには火には、

かはやしろしのにをりはへてほす衣いかにほせばかなぬかひざらむ

といふ歌をうたふ也。この作法夏神樂譜に見えたり。神樂のいへに秘すること也。これ多忠方が說也。

問云、夏神樂むかしよりこそ侍るらめ。此歌は貫之集にあり。屏風歌のつゞきに夏神樂とてあるはいかに。

答云、れいの神樂は神代よりあることなれど、歌ははるかにさがりたるよの歌どもにてこそはべれ。をり〴〵に人のうたひはじめたるにこそは。されば夏神樂もむかしよりありとも、此等をのちの人のうたひはじめたるにもあらむ。催馬樂の譜は一條左大臣の時こそは、はじめて律呂の歌もさだめられたれとうけたまはれば、貫之がよに夏神樂のことのはじまらむもかたかるまじ。もしはかの集のひがごとにもやはべらむ。これはふるき歌とぞおぼゆる。

問云、かはやしろはしかなゝら、しのをりはへてほそころも、いかに。

答云、しのをゝりかけてたなにすれば、しのをりはへてとそへたり。いかにほせばかなぬかひざらむといふは、なきことなどおひてしける神樂にこそ。又猶屏風の歌ならば、夏神樂は兼事にてすれば、なき名たちたる山に思ひなしてよめるにこそ貫之集には又はべれ。

ゆく水のうへにいはへるかはやしろかはなみたかくあそぶこゑかな

是も言葉には夏神樂とあり。神樂のおこり、日本紀云、素盞烏尊のしわざあぢきなしとて天照大神あまの石屋にいりて、いはとをとぢてかくれます時、國のうちとこやみに成りて、もろ〴〵のこと火をともしてわきまふ。やそよろづの神たちあつまりはからひて、あまのかぐ山の銅をとりて日像の鏡を鑄て、麁をうゑてあをにぎてにし、穀木をうゑて白和幣（木綿也）につくる。これら一夜にしげく茂し。あめのたなばたづめの神に、神女のかたみぞをおらしめて、大峽小峽の木をきりて、瑞殿をつくりてあまのかぐ山の五百筒眞賢木をねこじにして、上つ枝には玉をかけ、中つ枝には鏡をかけ、しもつえだには青和幣しろにぎてをとりかけて、太玉の命をしてさゝげもちほめまうさしむ。あまのこやねのみことをしてあひともに祈り祭らしむ。まさきかづらを纏にし、ひかげかづらをたすきにして、たけのはをもちて手

草とす。石窟の戸の前にして誓槽をうつぶせて、庭火をあげて俳優をなしてあひともにうたひまふ。又とこよの長唱の鳥をあつめてたがひにながなかす。太玉のみことまうさしめていはく、わがさゝげもたるところの寶鏡あきらかにうるはし。戸をあけてみそなはせ。時に天照大神こゝろのうちにおもうたまはく、あの下くらからむに、神たち何によりてか、かくの如くうたひたのしび給ふ。戸をあけてみそなはす。こゝに天のたぢからをのかみそのとびらを引きひらきて、にひなびのみやにうつし奉る。すなはちしりくめなはを引きわたしていはく、なかくりましそ。あめはれて、共にあひ見るおもてみな明白也。手をのして歌舞して、あひともにいはく、あなおもしろ、あなたのし。足より有興ことをばおもしろしと云ふ。面白ゆゑ也。こゝちよきことをばたのしといふ。手をのすゆゑ也。又あなさやけと云ふは、竹のはの聲をいひし也。此鏡はじめ鑄たるはちひさくて心にかなはず。足は紀伊國の日前の神也。次に鑄たるはそのかたちうるはし。これは伊勢大神宮也。古語拾遺に見えたり。

十七　問云、乘綱中將卒の使の時、車の風流こひ、あじろにまとをかきては矢をたて、ふちよこぶちにしたるを見て、和泉式部がよめる歌云、

とをづらのうまならねども君のれば車もまもとに見ゆるものかな

とよめりけるは何事ぞ。

答云、くるまもまもとに見ゆるものかなとあるは、ことわざに思ふには馬のかは、まとに見ゆといふことのある也。馬のかはながきものなれど思ふになれば、まろにみゆる心にや。又貫之集にも、すくゝとゆく月日はかたきほどに馬のおもてまとにも見えねどもうづきの駒といふことあり。是又ことわざの義也。まとに見ゆといふは的のまろなればその義にいふにはあらじ。圓の字をばまとゝよむ。又まろなりともよめば其義にこそ。それをことばにつきて的にはよせたり。さて君のれば馬ならねどもくるまもまもとに見ゆとよめり。とをづらとは十列の馬とよめるにや。この歌にはよしなくぞおぼゆる。大貳三位歌云、

とをづらにたつるなりけり今さらにこゝろくらべにわれも成りなむ

又貫茂女が長歌にも、うきとをづらにわれのれば車もまもとに見ゆるふじのねのなどよめり。これらはひとくに十列とよめり。

問云、この車もまとにといふことは、日本紀にあることをよめるにや。伯孫といふもの、月夜にいはひこのをかの譽田のみさゝぎのもとにて赤馬にのれるものにあへり。その馬とぶが如くにとし。おがうまをもよはして追ひつかむとするにかなはず。時に駿馬のぬし伯孫が、ほしむる心をしりて、とゞまりて馬をかへてさりぬ。伯孫かへりてあしたに見るには馬なり。あやしみてもとむるに、譽田のみさゝぎにわが馬十馬の間にあり。とりかへて本の十馬をおきつといへり。其心にや、あらぬにや。かのはに馬のれる人がらに駿馬とみゆれば、まとゝいふことは的によせて、君のれば車もまとにみゆとよめるにこそ。まとゝはまことにとしといふ詞也。かくてや十列の馬の義もたよりあらむ。

答云、これはもとめたる義也。又かのはに馬も十列の馬にてやはあらむ。但、いづれとさだめがたき事也。

十八　問云、湯津のつまぐしとはいかにいへる事ぞ。

答云、日本紀云、すさのをのみことあめよりいづもの國にくだりいたる時に、哭泣の聲あり。尋ねゆけば一人の老翁老婆、中に少女をおきて、かきなでゝなく。尊とひてのたまはく、汝なんぞ哭する。答ていはく、我はこの國つかみなり。脚摩乳と號し、女は手摩乳と號す。この女は我子也。奇稻田姫と號す。さきに我子八人ありし、としごとに八岐の大蛇のみてき。此少女又のまれなむとするがゆゑに哭す。尊のたまはく、もすあを我にたてまつらむや。こたへて曰く、奉らむ。尊たちながら、少女をゆつのつまぐしにとりなして、御髻にさしつゝ、父母をして八醞酒を醸み、假假八間をゆひて、おの〳〵一つのさかづきをおきて、酒をもりてまつに、大蛇きたれり。頭尾おの〳〵やつあり。

松柏せなかにおひたり。八岳八谷のあひだにはひわたれり。酒を得て頭を、おの〳〵ひとつのさかぶねにおとしいれてのみ、ゑひてねむる時に、尊とつかの劒をぬきて蛇をづた〳〵にきりつ。尾にいたりて劒のはすこしかく。尾をさきて見るに中にひとつの劒あり。これは神劒也。我いかゞわたくしに安ぜむとて、すなはち天神に上獻す。此劒もとは天叢雲といふ。蛇上に常に雲氣あるゆゑなり。後には草薙劒となづく。倭武尊東征のとき、伊勢大神宮よりたまはりてくだり給ふに、さがみの國にて野火の難にあひて、この劒にて草をなぎてまぬかれたるゆゑ也。今熱田社にあり。尊の天のとつかの劒をは天羽々斬と云ふ。大蛇をはゞといふゆゑ也。今石上宮に有り。

問云、ことのおこりはしかなり。女をつまぐしにとりなすこともおぼつかなし。如何なる故ぞ。

答云、日本紀にはかく見えたるに、或説にはかの老翁むすめを尊にながく奉るこゝろにて、きよきくしをさす也。女を櫛にとりなす事はしらず。ゆつのつまぐしと云ふは潔齋の義なり。湯はいはひきよまはる詞なり。津は詞の助也。あまつやしろ、くにつかみなど云ふが如し。又悠基と云ふことも此心也。いはひきよむる也。主基はその次也。つまぐしはそのかたち爪の如くなる故也。齋宮群行のとき、帝齋宮の御ひたひに櫛をさしてのたまはく、都のかたにながくかへり給ふな。これは此義とぞ申すめる。これ故土御門右府の抄物に見えたりとぞ將作は申されける。又湯津の義は古語拾遺のうらがきにもかくぞ侍る。

問云、此ふたつの義、何れにつくべきぞ。

答云、かくの如くの事、ふみ〳〵にかはりていへる、常のこと也。又日本紀も本々あひたがへることあれば、いづれと定めがたし。くしにとりなして蛇に見せじとし給ひけるにや。つまぐしにはあしきものゝおつることにて侍るにこそ。同紀にも、しこめに追はれてにぐるものすべなくて、ふところよりつまぐしを取りいでゝうちまく。その時しこめおひさしてかへりぬといへることあり。しこめは鬼也。又みことに長くたてまつるとて、むすめに櫛をさすも齋宮の義を思へばゆゑあり。今の世の人の歌云、

かつ見れどなほぞ戀しきわぎもこがゆつのつまぐしいかゞさゝましを

是はみことの御みづらにさす心と見えたり。又日本紀には湯津柱木などいふ事もあり。

十九　問云、誹諧歌、委趣如何。

答云、漢書云、誹諧者滑稽也。滑妙義也。稽詞不レ盡也。史記滑稽傳考物云、滑稽酒器也。言、俳優者、出レ口成レ章詞不二窮竭一。若二滑稽之吐一酒也。傳云、大史公曰、天道恢々廣也。豈不レ大哉。談言微中亦可二以解一紛。優孟多辨、常以二談咲一諷諫。優旃善爲二咲言一、合二於大道一。已淳于髠滑稽多辨。郭舍人發レ言陳レ辭、雖レ不レ合二大道一、然令二人主和悅一。是等滑稽大意也。誹諧の字はわざごとゝよむ也。是によりてみな人偏に戯言と思へり。かならずしも不レ然歟。今案に、滑稽のともがらは非レ道にして、しかも成レ道者也。又誹諧は非二王道一して、しかも述二妙義一たる歌也。故に是を准二滑稽一。その趣辨說利口あるものゝ如二言語一。火をも水にいひなすなり。或は狂言にして妙義をあらはす。此中又心にこめ詞にあらはれたるなるべし。傳云、齊威王時、楚發レ兵加レ齊。齊王使二淳于髠一之レ趙請レ兵。齊金百斤車馬十駟。髠仰レ天大咲。王曰、少レ之乎。髠曰、何敢。王曰、咲有レ說乎。髠曰、臣從二東方一來レ是。道傍、有二禱田者一。操二豚蹄酒一盂一而祝曰、甌窶滿レ篝。汗邪滿レ車。五穀蕃熟、穰々滿レ家。臣見二其所レ持者一狹而、所レ欲者奢。故咲レ之。於レ是王益齎二黄金千鎰白璧十雙車馬百駟一。

古今誹諧歌云、

難波なるながらのはしもつくるなりいまはわが身をなにゝたとへむ

是等心辨說也。齊王使二淳于髠一獻レ鵠於楚一。道逢二其鵠一。徒揚二空籠一造レ詐往見二楚王一曰、齊王使二臣獻レ鵠。過二於水上一不レ忍二鵠之渴一、出而飲レ之。去レ我遂亡。已吾欲レ刺レ腹而死一。恐人之議レ吾以二鳥獸之故一令二士百傷殺一。吾欲二買而代レ之。是不レ信而欺二吾王一。欲レ赴二他國一奔亡。痛、吾兩主使不レ通。故來服レ過、受二罪大王一。楚王曰、善、齊王有二信士一。

若此哉。厚賜二之財一。倍二鵠在時一也。古今歌云、

世中のうきたびごとに身をなげばふかき谷こそあさくなりなめ

是等詞、辨說也。魏文侯時、西門豹爲二鄴令一。豹到レ鄴、會二長老一、問二之民所一レ疾苦一。長老曰、苦下爲二河伯一娶ら婦。以レ故貧。豹問二其故一。對曰、鄴三老廷掾賦二歛百姓一。收二其錢一、得二數百萬一。用二其二三十萬一、爲二河伯一娶レ婦。與二巫祝一共分二其餘錢一持歸。當二其時一巫行視二小家女好者一云、是當レ爲二河伯婦一。即娉取爲治二齋宮河上一。張二綵繒帷一女居二其中一。行十餘日、共粉飾之如二嫁女牀席一。令二女居二其上一。浮二之河中一。行數十里沒、其人家有二好女一者、以レ故多持レ女。遠逃亡以レ故無レ人。又困貧。豹曰爲二河伯一送レ女。皆曰諾。至二其時一。豹往會二之河上一。往觀者二三千人其巫老女子也。從二弟子女二十人許一。豹曰呼二河伯嬉一。來視二其好醜一。女來。豹曰、是女不レ好。煩二大巫嫗一爲人報二河伯一。得下更求二好女一後日送ら之。即使下吏卒抱二大巫嫗一投二之河中一上。有レ頃曰、巫何久也。弟子趣レ之。復以二弟子一人一投二之河中一。凡投二三弟子一。豹曰巫嫗弟子女子也。不レ能レ白。三老入白、復投二三老一。豹簪レ筆磬折嚮レ河立、待久。豹顧曰、巫嫗三老不二來還一。欲レ復使二廷掾入趣レ之。皆叩レ頭破レ額、色如二死灰一。豹曰諾、狀二河伯留レ客之故一。若皆罷去歸。從レ是以後不二敢言一河伯娶レ婦。古今歌云、

もろこしのよしのゝ山にこもるともおくれむと思ふわれならなくに

是等心、利口也。齊威王置レ酒召二淳于髠一賜レ之。問曰、先生飲二幾何一醉。髠曰、臣飲二一斗一□□□□亦醉、一石亦醉。王曰、先生飲二一斗一而醉、惡飲二一石一哉。髠曰、賜二酒大王之前一、執法在レ旁。御史在レ後。髠恐懼俯伏而飲不レ過二一斗一徑醉矣。□□□日暮酒闌合レ樽促レ座男女同レ席。杯盤狼籍。□□□□堂上燭滅、主人留レ髠而送レ客。羅襦袷解微聞二薌澤一。當二此之時一髠心最歡、飲二一石一。故曰酒極則亂、樂極則悲。萬事盡然。言不レ可レ極。極レ之而衰、以風諫焉。王曰、善、乃罷二長夜飲一。古今歌云、

むつごともまだつきなくにあけにけりいづらは秋のながしてふよは

是等詞利口也。始皇議レ欲二大苑囿一。東至二函谷關一。西至二雍陳倉一。優旃曰、善。多縱二禽獸於其中一。複從二東方一來。令二麋鹿觸レ之。是始皇以レ故輟止。古今歌云、

世中はいかにくるしと思ふらむこゝらの人にうらみらるれば

是等心、狂也。優旃者秦倡朱儒也。秦始皇之時、置レ酒而天雨。陛楯者沾寒。旃哀レ之曰、汝欲レ休乎。皆曰幸甚也。旃曰、我呼汝、應曰、諾。有レ頃殿上上レ壽。旃臨レ檻大呼曰、陛楯郎。々曰諾。旃曰、汝雖レ長何益幸雨立、我雖レ短固幸休居。於レ是始皇使二陛楯者得一半相代一。古今歌曰、

春の野のしげき草葉のつまごひにとびたつきじのほろゝとぞなく

是等詞、狂也。おほむね此おもむきにすぎず。これらにて心うべし。但し、辨說、利口くはしくいへば、わかれたることなきもの也。

問云、誹諧の趣如レ釋ならば、古今に他部にも誹諧の心ある歌まゝはべり、いかゞ。

答云、おの〳〵あひまじはれり。そのゆゑは誹諧の心ある歌を盡していれば、彼部すぐれておほかりぬべければよろしきにしたがひて、はからひいれたる也。四季雜部にもこの會釋はある事也。

二十　問云、譬喩歌を六義の風比興等歌とは如何。

答云、毛詩幷萬葉集に見えたり。風比興みな譬喩歌也。但、すこしの分別ある故、六義に別レ之歟。風は題をあらはさずして、物を取りて偏にそれになしていふ也。比は物を取りてそれによれる詞に似せいふ也。興は物を取りてそれにくらべて題の心をあらはす也。又賦雅はことなる事なし。但、雅はすこしもあやつることはなきにや。故六義に別レ之。仍毛詩に風雅頌を釋して賦比興をば不レ釋。大意おなじき故歟。これらの歌の趣六義に見えたり。

日本歌學大系　第一卷

二十一　問云、三十一字の歌を長歌と名づけ、五七の歌を短歌と名づくるは如何。

答云、歌は本體は韻字を用うべき也。三十一字歌は第三句の終字を爲二一韻一、第五句の終字を爲二終韻一。々を取事長ゆゑこれを長歌と名付、五七歌は第二句の終字を爲二一韻一、第四句の終字を爲二二韻一、如レ此轉々韻を取事短故これを短歌と名づく。いはゆる喜撰式および新撰髓腦、古今集には如レ此存。

問云、しかなり。たゞし歌に韻字を用は古事也。萬葉よりこのかたはみえず。しかるを上古の濱成式および萬葉集には三十一字の歌を短歌と名づけ、五七歌を長歌と名づく。中古の喜撰式ならびに新撰髓腦、古今等には五七歌を短歌と名づくる、如何。

答云、濱成式云、古長の求レ韻如レ此。二句爲二一韻一。新長の求レ韻如レ此なし。古の二句を爲二今一句一、古の四句を爲二今二句一、終字すなはち爲二一韻一云々。如レ此者、以往は韻をみじかくとり、濱成がこゝろは韻をながくとれるおもむき顯然なり。仍てかの式および萬葉集には三十一字を短歌と名付、五七歌を長歌と名づくる也。

問云、しかなり。但、濱成が時よりこのかたは、以往の説をそむきて韻をながくとる。しかるを喜撰以後の式さらに往昔に復して韻を短くとりて、長歌をあらためて短歌と名づくる條、如何。

答云、このうたがひあるべからず。自レ漢迄レ魏文體三變、和歌何萬代同レ體。凡諸事變異非二此事一者歟。

問云、於二長短一者しかなり。但、いまの歌韻字を不レ用して韻によりて名を分つ事、如何。

答云、今歌韻字を不レ用といへども、章句なは定まれり。昔に准據して名を分つにとがなし。いはんや韻といひ句といふ、無レ異歟。

二十二　問云、短歌にくはへたる三十一字歌は反歌歟。其讀如何。

答云、件字の訓或はかへす、或はならふ、或はそむくとよめり。或人云、文選に、反離騷といふものあり。屈原が離騷を後人學レ之所レ作也。反字はならふとよむ。かるがゆゑ反離騷と號す。しかれば反歌とよむべしと云々。又人云、反離騷は屈原が離騷を返す心也。ならふ義にあらずと云々。是を案ずるに、凡て此反歌をそふる事は、短歌は不レ能二詠吟一が故、短歌のおほよそをつゞめて三十一字に詠むなり。然れば返も故あり。ならふも故あり。又かの短歌をすてて更に同心を詠めばそむく義もあしからず。いはむや返反の音、訓によりて不レ可レ改こゝろにある歟。古人が家々の説也。ともに僻事にあらずと云々。古今序、逮二素戔烏尊到二出雲國一始有二三十一字之詠一。今反歌の作也。八雲歌也　如レ此ば凡三十一字歌を反歌と可レ稱歟。

二十三　問云、六句歌を旋頭歌と名づくる、如何。

答云、旋頭は上にかへるとよむ也。昔にかへる義也。かるがゆゑに濱成式には此歌を雙本と名づく。これ本にならぶといへば、昔に返る義におなじ。古今序には此歌を稱二換頭一。是又上にかへるといへばさきの義におなじ。

問云、昔に返る義、如何。

答云、神代は歌の章句不レ定。素戔烏尊の八雲の詠より、はじめて三十一字歌出來、其後ひとへに此體を學ぶ。然るを三十一字のうちに心ざしつきざるとき、六句の詠まゝ出來。所謂旋頭歌也。往昔の歌體に似たるによりて昔にかへる心にておのゝ〳〵如レ此名づくといへども、意趣はひとつなり。

二十四　問云、混本歌を喜撰弁孫姫等の式に後悔病歌と稱事、弁其名如何。

答云、音韻不レ叶。かるがゆゑ後悔病歌と稱す。又わづかに三四句の中に志つきて、もしは一句、もしは二句をすてて詠レ之。往昔の體に似たるゆゑ、是を混本歌と名づく。本にひたゝくと讀むなり。これ又昔にかへる義也。意趣旋頭歌におなじ。かるがゆゑ或書には以二旋頭歌一混本歌と稱す。文選序云、至二於今之作者一異二于古昔一古詩之體、今則全取二賦名一。又菅家未二且求一衣賦序云、賦古詩之流、詩蓋志之所レ之。歌又如レ此。短歌者古歌之流、歌志之所レ之。

施頭混本同二古歌之流一也。

正和五年應鐘廿七以二清輔朝臣自筆中之本一書寫比校。

花鳥次第定家卿作

正月　柳　鶯　　二月　櫻　雉子　　三月　藤　雲雀　　四月　卯花　時鳥
五月　橘　水鶏　　六月　撫子　鶺鴒　　七月　女郎花　鵲　　八月　萩　雁
九月　村薄　鶉　　十月　菊　鶴　　十一月　ビハ　千鳥　　十二月　梅　水鳥

右以九條公爵家本（架藏）書寫以印本校合了、昭和十五年五月。

追記　中山侯爵家に片假名本奥義抄叅上があり、八雲御抄其他と共に、本年七月二十四日重要美術品に指定された。未だその系統は調査してゐない。

追記　能因の名所歌枕も最近見ることが出來たので、詳細を書誌學誌上に發表し、本編解題の一部を訂正することゝする。

8N-0
(1927
Ni.97.B

昭和十五年十月十日印刷
昭和十五年十月十五日發行

日本歌學大系〔全十卷〕
第一卷　定價四圓三十錢
送料〔書留〕內地二十一錢　外地四十錢

複製不許

編著者　佐佐木信綱
發行者　楠間亀楠　東京市小石川區水道端二の一〇
印刷者　奈良直一　東京市小石川區諏訪町五六

發行所　文明社
東京市小石川區水道端二の一〇
振替東京一七〇一六番
電話大塚(86)五三五九番

株式會社常磐印刷所印刷

日本歌學大系　第一卷

〔注意〕小社發行の圖書萬一書店に品切の節は直接本社へ御照會ありたし。

日本歌學大系

文學博士 佐佐木信綱編

第一卷

東京 文明社